

年 中 行 事

は し が き

恵まれた農村といえるこの村での年中行事もそれに相応しているといえよう。

暦は新暦であるが、正月行事についてみるとまだ古くからの姿を保持しており、年男、若水汲み以下何れも一般的なものであった。

ここで一、二注目されるものを取上げてみると、先ず道祖神祭りについてはその信仰、行事の盛りあつたことである。これが増産を祈る神と考へられていたことは、数多い石造道祖神像—これは本県では特に西部における分布が密であるが、殊に榛名山麓に密で、群馬郡榛名町とこの榛東村はその代表的なものであろう—と祭事内容にみられる。殆どの石像はドンド焼きでこげたあとを残しており、子供を欲する主婦と、神に代る子供の会話、若衆が力くらべにかこつけて烟を持込まれることの喜び、道祖神責めなどその好例とみてよいであろう。

お盆迎えには七日から水行を一週間行つて、十三日の夜水沢山の裏、浅間山に、竹はらを吹きポンデンをふりながら登るのも、潔斎して先祖を迎えるにふさわしい姿である。また墓地まで迎えに行く部落、一方ではお盆さんはカイドで麦束を燃した煙に乗つてくると考えて、墓まで行かない部落もあって、一樣でないところに、変化しつつあるこの村の民風を見出せよう。

然し死後四十九日のおわらない仏を新盆様としないのは一般的であるが、それを無縁仏として盆棚の下に粗末に祀るのは注目してよいであろう。

古いものと新しいもの、特に戦後道祖神祭を県下でもいちはやく禁止する方向に持っていくなど、生活こそ裕福な村ではあるが、その中に民俗は人為的に急速に変化しつつある。戦前の相馬が原演習場、前橋予備士官学校は終戦後米軍が駐屯し、今や陸上自衛隊第十二師団司令部がおかれている。今後果してこれらの年中行事のうち如何程のものが維持されていくであろうか。見通しは暗いのである。

年中行事
古いものと新しいもの、特に戦後道祖神祭を県下でもいちはやく禁

止する方向に持っていくなど、生活こそ裕福な村ではあるが、その中に

民俗は人為的に急速に変化しつつある。戦前の相馬が原演習場、前橋

予備士官学校は終戦後米軍が駐屯し、今や陸上自衛隊第十二師団司令部

がおかれている。今後果してこれらの年中行事のうち如何程のものが維

持されていくであろうか。見通しは暗いのである。

新暦の月おくれでやる（井戸尻）。

モノ日

お祭り等の行事の日をいう（井戸尻）。

セツク

三月三日、五月五日、九日一日をいう。これに対し、セツクでない普

段の日をセチマという（井戸尻）。

五節供

一月一日（節）

（註、他處では七日なのだが、どうしてか一日と云われた）
三月三日（すし、もち）

五月五日（赤飯）

七月 夕（赤飯、七度食つて七度水浴びるという）

九月一日（八朔、タノモノ節供、ショーガ）（六区）。

一月

大正月と小正月

一日から七日までを大正月、または正月という。

八日から十五日までを小正月という。

二十日を二十日正月という（井戸尻）。

神棚と別の棚があつて、ザシキにおく。正月サマは明きの方よりお出になり、正月の卯の日卯の刻にお立ちになる。お立ちの日には赤飯のオタキアゲとお茶を進せる（井戸尻）。

元旦

元旦は年男が二時から三時頃戸を開けて、簾をかつぎケードをはき込む真似をする。それは縁側から部屋にはき込んで、神棚にはきこむわけで、そして神棚に燈明を立て、若水を汲み、湯をわかし、茶を進め、神酒、雑煮を進せる。女衆、子供を起こすのは風呂をわかしてからである。顔を洗って年男は神酒をおろしてのみ、次で家族皆に飲ませてからお年玉をやり雑煮をたべる。

若水を汲むとき、庭を清める意味で少々こぼす家もある。

正月棚（オタカ）は神棚とは別に作られる。床の間には大きなオカザリを飾り、神棚にもオカザリを飾り、その横に別にオタカを作るのである。その年によって方のよい方御ちアキの方に向けて作る。オカザリは十二月廿五日スハキの夜作る。この日出来なければおそらくも二十八日までに作る。一夜がさりはするものでないといふ。

オタカの両端にオカオカクシをつけ、その下にオソナエを十五、六組位供え、オカオカクシの真中にマツバ、ミカンをさしてつける。その前にはサオをつるして山海の珍味をつるす。

オタカには大宮神社神札、御成皇太神（トシトク神）天照大神（大神宮様）トシガミサマなどが祀られる。トシガミサマは卯の日卯の刻にアガルといふ。この日朝早く起きて飯をたきトシガミサマにあげる。トシトク様と大神宮様は神棚に毎年そのままおいて、新たに家を造るときは天井にはさんでいる。

オマツは道祖神焼きにもつていったが、今は道祖神も中止され、学校に持つて行つて給食のときの燃料にするようになり、次でわらだけは公会堂に持つて行くようになり、今ではオマツは廃止された。

年男は家長が決めるが、普通十三才位からの若い衆で、神酒、茶の供え方、拝み方、信仰方法などを教えてまされる。これが正月の神に関すること一切を司るわけである。

先ず大晦日のオタキアゲが始まる。お飾りしたところにナスの木（昔の借金をなしきるよう、借金なすからという）マメの木を供え、一升の米をたいて全部を一切の神に供える。オバコロを作り、ウシの刻に鎮守様の御神木のオシメにさして帰つてくる。次第にオシメの位置が高くなると、三人位でやぐらを組んででもこの行事は必ず行つた。

朝湯は年男がわかして、年令順に入る。

朝参り 部落の各戸を廻つて新年の挨拶をして、大宮神社に参る。

縁起 元日には「死んだこと」に関することは何もいってはいけない。

三十三才及び厄年の人は、便所にお膳をすえてたべると厄がきかないといふ。

トシトク神のあがる方に向つて小便するといけない（中組）。

朝、一戸一人出て、村中の家を仁義に廻つた。仁義に来ると仁義ウケに一杯出す。

年男 家の若衆がつとめる。六才以上の男、仕事は若水汲みと正月棚

の供物の上げ下げである。若水は、新しい桶にオシメを付けた若水オケで正月元日未明に渡む。この水で炊事をする（井戸尻）。

二 日

仕事始 女の針休み、女同志の年始日（井戸尻）。仕事始め 女は裁縫、あみものを始め、男はマブシ一枚を織って養蚕の用意をする。その他小さいコケカゴか欲しい場合は仕事始めに作る（中組）。

四 日

お棚さがし、朝、正月神への供物を全部さげ、年男の仕事は終る。こうして家の主は年男に年玉をやる。またこの日は山始めもあり、四日山といってボクを切りに行く。この日坊さんの御年始がくる。和紙十枚とお札、しゃくし、つけぎなど持つて「柳沢寺ごねんとう」といつくる（中組）。

棚サガシ 正月棚の食べ物をおろし、オミゴタとして食べる。

お寺サマの年始日 寺の和尚が来る。

嫁の年始日 婚も一緒に嫁の実家へ年始に行く（井戸尻）。

五 日

馬乗り 競馬をした新顔が次々とくる。これを一日に受けた方がよいというので、一致して柳沢に馬場を作つて盛大にやつた。日露戦争後は村長の主催でやつた（中組）。

六 日

六日山 マユ玉の木を切りに遠い山に行つた。この木は山桑がよいとされているが普通は柏である。今はツボ山に植えておいて切る。六日トシとこの日ゾウニを祝う（井戸尻）。

六日山 若木迎え、ボクヤリなどともよび、山の神様に餅一枚とゴマメを半紙にのせてしんぜ「いい木があつたからこれを切らせてください」といつて切る。他人の山の木でも黙認された（倉海戸）。

マルメドン 六日年という。年神様に、ノデンボーで作ったハラミ箸をさした握り飯を供える。数は五コ或は十二コの家もある（中組）。

七 日

七草で朝オジヤを食べる。これは正月棚に上げた七種のものを入れる。この日家の外の正月飾をとる（井戸尻）。

七草 ナズナ、セリその他を加えて七草。切りながらほうちょう、すりこぎなどをたきながら「七草なずな、とうどのとりが、にほんのはしきを、わたらぬうちに、せりたたけ、せりたたけ」と唱える。この七草の入ったオジヤを作つて總ての神に進せてたべる。

この日オマツをさげ外飾りを全部とつて子供に渡した。子供は道祖神場に持つていったものである。

これで大正月は終る（中組）。

八 日

八日溜といつて溜を上げ麦にしく。

八日と十一日は山へ行くのを嫌う。山の神サマが遊びに出ているから（井戸尻）。

コトジメ

十一月のコトジマイと同じ（井戸尻）。

十一日 作立て 明きの方の方向の煙へ行つて松を真中に立て、オンベロをたらし、テンガを持つて三尺ほどサクを切る。松にはゴマメとオサゴを供える。この日は雜煮を食べる（井戸尻）。

クラビラキ 倉に雑煮を供え物をする。内かざりを取り、朝、烟に出てサクタテをする。三がい松一本にオンベロをさしたのと、サクバナ（カヤの頭に色つきのオンベロをはつたもので、大正月のうちに売りに来る。売りに来た人には餅を一三切やることになつてゐる。）は家族の人數だけ、栗、米の餅十枚焼いて一升ますに入れたもの、するめ、オサゴなどをもつて、田畠で恵方をむけて松をさして拝む。そしてテンガ

で一人三さくずつ切る。終ると男子を全部つれて家に帰る。このとき進めたものを持って帰って家内で分けてたべる（中組）。

十三日

飾りかえ 内飾りをとり、ボタ（六日に切った木）にマイダマをさし、ザシギ一杯に飾る。

アーボ、ヒーボ

二寸位の木を花木にして、堆肥の上に立てる（井戸尻）。

カザリカエ 小正月のお飾りの用意をする。ハナガキナタでハナをかいて、またハナガシ、テンガ、キネ、ウスを作る。これはオマイダマの木につるしたり、神棚、大正月の供えを飾つた所に供える。

この日道祖神を造る。星頭（道祖神に繩イチボ（二十鳥）持つて小屋つくりり出てくんなんしょー」といながら、テーコ（太鼓）をたたいて家を廻る。三、四回廻つてから四時頃毬一ボ持つて集まる。小屋は大人が造つてくれる。母親方は御馳走（ソバの味をつけて美味しいしくしてくれ、子供は小屋造りしながらたべる）をつくつてもつて行く。仕上ると子供達はハッパタキを作つて、大人にオミゴタ（オミゴタ）といつて出す（中組）。

十四日

マルメドン メンバにメシを入れ箸十一センを立て、これにまいるい握飯をのせ、年神さまに進ぜる。このメシは十五日小豆粥にして食べる。箸はハラミットバシといい、一年中さんざ食えるようになると、十三日十二セン作つたものである。また十五日の粥もこの箸で食べ、田植の時の食事に使うと豊作になるという（井戸尻）。

針休み この日針仕事をすると蚕にアリが入るといつて休む（井戸尻）

小正月 十二日に餅をつき、十三日にカザリカエなどと準備をしてい

るが、ハナカキの材料はコメゴメの木、白ハギが多い。出来たものは神棚、椎杞の上、馬小屋を初めてあらゆる神に供える。

マユダマは米の粉一升で十六コ作る。丸い形、マユ形とある。マユダマは山桑、ナラ、ミズブサの枝にさす。それを八畳の間一ぱいに立て、これに餅一重ね、ニワトコで作ったケーカキ棒を供える。マユダマは十六日にマユカキをして、煮て神様にあげたり家族がたべたりする。これをイトヒキという。蚕神はキヌガサ様といい、十六日の朝祀る（中組）。小正月 アボヒギを作り肥し場に立てた。今はしない。カユカキ棒も昔は作つた。マニ玉は今も作る（宿）。

道祖神祭

正月七日から十三日の間に人別で各戸から子供一人について二銭位宛（五人子供がいると十銭となる）とりあげて、その他お祝いとして子供達に菓子をかつてくれた。

こうしたことは子供組によつてなされるもので、オヤズブリ（昨年の親方、普通高等学校一年生）オヤカタ（ヨヤガシラともいひ）

小学校六年生 ワキドウリ ユウ（ボーガシラともいひ）

小学校五年生 ジンコ（小学校四年生以下）という役で組織されて



道祖神（宝歷 7年4月）（新井）

オヤズブリがオヤカタをもう一年やることになる。

六六年生がいないとなると、

彼等は男の子が生れた家、新たに家を建てた家、嫁をもった家などからは、お祝いとして前記の資金のほか余分にもらつた。くれないとねばってでももうう。

小屋ができると一時から燃すことになつて、中には夜明けまでねぼつて燃さぬものあつた。小屋の材料は竹、お松、わらなどのほかガサックズを青年に持つてくるよう頼み、またかつぱつてもきた。親方はその青年にお菓子を御苦勞さんでしたといつてやつたりした。

また隣村の小屋同志燃料としてのオマツなど取り合いをしたことある。

燃すときには、大鼓をたき、「道祖神に火をかけますよ。もう夜が

あけますよ。」と、歌を唱えながら村を廻つた。

この火に身体をあぶるとおできが出来ないといい、また神様にあげたもの、書初め、餅、道祖神にあげる為に作つたオマイダマ、スルメなどを焼いてたべる。

この年がもなければ酒一升買つて大人に飲ませた。また酒、お菓子をオゴリに出した。また小屋に立てた「道祖神大笑」と書いた紙の旗をこのとき燃すが、この焼切れを拾つてきて、部屋に飾つたオマイダマの木の枝にかけると菓があたるという。(中組)。

七日によつた外飾りを子どもがヒキにくる。子どもは十五才の男が頭でコヤ頭といふ。集めた外飾で道祖神の近くに小屋を作る。作る時は「小屋作りに出てくんろ」と呼び廻り、大人が出て手伝う。この晩子ども達は小屋に集まり、家の外に進せてあるマユ玉をさげて食べる。子ども達のやることに文句を言うと「ヤク神だけてやる」と言うので子どもの言ふとおりにする。翌朝早く子ども達は太鼓を叩きながら「道祖神がもえますよ」早や夜明けますよと呼びながら村中を三回ぶれ廻る。そして最後に「夜中にさんざべツチヨこきやがつておきろよ」と呼ぶ。そして「もうきねエよ」と付加える。人々が集つて道祖神ヤキが始まると、

小屋をこわし、道祖神の前に集め、「奉納道祖神大笑」と白紙に大書して旗の上につけたものを立て焼く。

子どもはこの火にあたると風邪をひかないといふ(井戸尻)。

親方(十五才)、脇棟梁(十四才)、小頭(十三才)のほかは名なしで、親方、脇棟梁のいうことはなんでもきいた。学校も親方の命令で休ませたほど昔は権力があつた。仕事は七日のオジヤをたべてから始める。貢いのものとしては、人別、藁、繩、竹、根ッ子、御祝儀などを貢つて歩いた。人別をもらうと子供達は一せいに歎声をあげ、出産等の家のからお祝いをもらう。このときも歎声をあげる。帳付けは親方、脇棟梁がして、金は親方が預る。

お参り人は、ソバを重箱であげたり、まゆだま、豆腐、油揚なども進ぜる。ソバは一升ソバをあげるから、一生そばで護つてくださいといふ意味で、これらは宿へ持つていてたべる。

小屋造り 十二日の午後、村中の大人が出て遊つてくれた。
ドンド焼き 十四日の朝小屋を燃すことで、このとき「道祖神大笑」と書いた書が燃えあがつて飛ぶと奪いあつた。菓があたるといつて



井道祖神 (明和3年8月吉日)
(長岡字道城)

神棚にあげる。燃え残りの棒（モエックジ）は屋根に投げる。この火にあたると一年中病気にならないとか、できものが出来ないという（食海戸）。

正月十一日にかざりかえした松やこじこめを道祖神場へはこび、十四日の朝もす。そのとき、まゆだまや、餅、いかをもつていて焼き、それをたべると病気にならないといふ。おきができないように体中あぶれといふ。この日厄年（男二十五、四十二才、女十九、三十三才）の人には道祖神宿でこんにやくをだしあくおとしをする。また、家内安全のために「道祖神大笑〇〇氏」と書いたのぼり旗を書いてどんどんやきでもやす（毘能）。

正月の飾りの松竹をよせて十四日の朝ドンドン焼をする。以前には十三日の晩に泊ったものである。今も道祖神は立てる。場所は墓のはずれである（宿）。

道祖神像を青年が力くらべとして持上げ、他所に持運び適当な田に置いた。するとそこは縁起がよいとされ、その田の所有者は子供達をドンドン焼きの夜（一月十三日夜）に招待して御馳走した。事実ドンドン焼が行われた田では、麦がよくとれるのである（柳沢）。

道祖神を燃すときは、大鼓をたたきながら

道祖神が焼えますよ

東が白んだ、おーきろよ

はーやーよーがあけますよ

はやくおきないとおそくなる
と唱える（宮室）。

道祖神ゼメ

ドンドン焼きの日には道祖神を引廻して遊んだ。お祝いの出し方のよい家では、子供が騒いで祝う（南新井）。狩野仙之丞さんの家の家で、仙之丞さんが生まれた年にお祝を五十銭く

れ、丈夫に育つようによくお願ひをかけてくれといわれた。そのとき道祖神は道祖神の石像のところへきて青竹で石像をなぐりつけた。すると親方は石像のうろにかくれていて「そんなにたたかなくも丈夫に育てるからかんべんしてくれ」というとやめた。この話は五十年も前の話だが、その人は今でも丈夫である。

或年おばあさんが川のそばの道を通りかかると、子供達が道祖神を繩でしばって川の中に入れてたたいていた。見かねたおばあさんは、子供達に道祖神様をいじめるなど注意して帰ると間もなく病気になった。神様に見えてもらったたら道祖神が出て「ようよう子供達を集めて遊んでいたら、お前がきて追い散らしてしまったからだ」といったという。

天王様は「今年はどこの家へ厄病神を入れるか」と帳面をもつていたが、正月十四日に道祖神様が燃してしまったので、それからドンドン焼をするようになつた。

十五日

小豆粥を食べる。たべる前にケエカキ棒で豊凶を占う。ケエカキ棒はオカドかニワトコの木を割り、マエダマをはさみ、もとを紙でまき水ひきでゆわえて神棚に上げておく。十三日に作る。

ケエカキ棒で粥をかきまわすのは年男である。ケエカキ棒は使用後ボクに立てかけておき、苗代の水口に神サマ（碓氷熊野神社）の御札をさして立てる（井戸尻）。

小豆かゆ 吹いてたべると田植えのとき風が吹くといふ。小豆がゆのたべのこり（残るよう少し余分に煮る）神様に進ぜたものを洗った水などを家の廻りに撒くと、「へど、ムカデのまよけになる。

マルメドシのとき使ったハラミ箸は、小豆がゆのとき用いたケエカキ棒と共に、後にネーマの水口にさす。悪水除けになるといふが、このときのケエカキ棒には株名様がもつてくる鳥の絵の描いた紙をはさむことになっている。

尚小正月にはノーデンボーやニワトコを削って簡単なハナをつくり、枯れ竹を割ったものにさしたアーボーヒーボーを堆肥場にさした（中組）。

十六日

マイカキ

十三日に飾ったマエダマを取る。早カキは十五日の晩にやる。マエダマは煮て神棚に進せて食べる。

正月棚をおろす。「めんどうはお棚がおりてから」といって十六日すきにやる（井戸尻）。

十六日、馬頭様 馬に乗って馬頭様にお詣りした。このとき馬の餌を

ツトッコに入れ、線香と共に供える。「ナルノカ、ナラネエカ、ナックテ果樹せめ 果物が沢山なるように「ナルノカ、ナラネエカ、ナックテモ、オチレバ、ブッタガル」といながら樹木に小さな傷をつけ、メダマをゆでた湯をかけた。これをすると柿の木などはヘタムシが死んだものである（中組）。

十八日ガニ 十五日の小豆粥の残りを食べる。またこの粥に足して家の廻りにしやくしてまく。長虫が入らぬようにという呪いである（井戸尻）。

二十日 菓仕事をする。作るのは作立てナワ、肩カケナワ、クリナワである。

二十一日 正月 中お勝手で働いていてザシキに出られない。「年オイベスコウ 朝は雑煮、晩は御馳走を食べる。オイベッサマは正月中お勝手で働いていてザシキに出られない。」と待っている。この日朝ザシキに出し、俵二俵の上にメンバ板を置き、その上に一升ますを置き、エビス、ダイコクを飾る。この日オイベッサマは働きに行き、秋のオイベスコウに帰つて

くる（井戸尻）。

餅はつかない。繩ないをする。この日オイベス様の祭りで、天保錢、穴あき錢、大福帳、財布などを樹に入れて供えたり、御馳走をたべた（中組）。

繩ないをし、黒柱に結えつける（宿）。

天神待 謹初め 正月二十日以後の雪の日に、十六才から四十二才までの若衆

が、新築、婚礼のあつたメデタイ家に集まつて、謹いをやり飲食する。これは新年宴会である。新入会者は酒一升を立てた。新入をケイヤクといふ（井戸尻）。

天神待

一月廿四日 書方が上手になるようにと祈る。廿四日夜近所の人々が米一、二合持ち寄り、金を出し合つて、都合のよさげな家をみて宿を決め。

このお祭りをするのは学校ツコとハリコで、ハリコは普通オハリゴヤでやつてお詣りする。男女別々にする。今では小学校の生徒と中学生の一部希望者のみが参加し宿に泊り、こたつで一夜中語り合い、翌朝食後天神様（八幡様にある）に詣る（南新井）。

不動様

二十八日 昼前は仕事をし、赤飯をたべて午後は半日遊ぶ。どこの不動様でもよいが、不動のザベレニーといつてお詣りする（中組）。

不動の座払い 神棚に小豆飯を上げる（井戸尻）。

正月の禁忌

正月（一日から七日）に青竹と青松はもすなど昔からいわれている。また井戸尻の者は七草まで青物は食べられない。

家例 ソバの家 朝ソバを三カ日食べる。
正月の申の日に馬ゴイ出しをする。

年神サマは女である（井戸尻）。

二月

節分

トシリトリという。年のかわりである。

豆は福はうち二回、鬼は外一回を呼びながら男が撒く。その後年の数だけ食べる。残った豆は神棚に上げておいて、初雷に食べる。

ヤツカガシ 格にイワシの頭をさし、豆をいる時ママがらとナスがらを焚きながら、それを次のような呪え言をいいながらツバをつけて黒くなるまで焼く。「大麦、小麦、大豆、小豆の虫の口を焼く」、「百虫の虫の口を焼く」、焼き上ったものはトボロの鴨居の上にさす（井戸尻）。

夕方から夜にかけて大豆をいる。（なすの木豆、木を燃料として）年取りともいう。一升ますに入れて、その上に、正月棚にかざったいわしの頭と尾を焼き（ヤツカガシという）

“なすゆうがおの虫の口をやく”

四十二色の虫の口をやく”

と唱え、トットツとつばをかけ、豆を入れたままでの上に、ひいらぎの枝

にさしてのせ、神棚にあげておく。夜になると「福は内、鬼は外」と三回大声で叫んで、家々の戸障子を開いて豆をなげる。家中、便所、倉庫敷稻荷、小屋にまきおわると、戸障子をしめる。豆はとっておいて（主に茶袋にいれて）初雷の時たべる。外出するときは福茶をのんでると災難に会わない。豆を年の数だけ井戸に入れるとか、食べるか、又紙に包んで四本辻に捨てたりする。いずれも厄病除である。豆まきは年男がまく（雀熊）。

一月八日はオコトはじめといい、夜明方くらいうちに庭先にめけーを

オコト

たてら。天に悪いものがとおるが、おれよりマナク（め）のうんとあるのがいるといってたくさんお金を入れる。この日は赤飯をふかす。（雀熊）。

十二様

山の神様を十二様といい、年一回二月十二日に山の仕事に従事する人、伐採する人達が掛軸をかけて祀る。山でけがをすると十二様の罰が当たるという。昔は一月十七日に十二講をやつた（柳沢）。

ねはん会

二月十五日 祝迎ねはん会、寺で子供達に小さい団子をくれた（宮室）。

三月

節供

三日は三月の節供という。二月一八日から三月八日までが節供である。

初節供の時、嫁には高砂、孫には御殿を嫁の実家から贈る。

仲人はヒナさまを贈る。

新夫婦は実家、仲人にヒン餅三枚をもつて挨拶に行く（井戸尻）。

春祈禱

三月の良い日に、産土の聖宮神社の神道サンと八幡下の大福院が来て拝む。この日餅をつく（井戸尻）。

十五日

梅若という（井戸尻）。

春彼岸

初日を入り口という。墓参りをしつづシダンゴを二つ供える。

中日

切り換えでボタモチを作る。

終りの日 走り口という。セリネジ（セリの入ったオシンコ）を小豆

の甘い汁に入れて煮て（スシリネジという）食べる（井戸尻）。

初孫には縁の実家から吹流しが贈られる。新夫婦は嫁の実家へタラの干物を持って挨拶に行く（井戸尻）。

五日 山開き（宮室）。

四月

四月八日
オシヤカサマの日、草餅を作る。八日は一年中山入りを嫌う（井戸尻）

村のお祭り

八日に昔は黒髪山に登った。「お山は晴天、六根清浄」と唱えながら。今では黒髪山の里宮、黒髪神社のお祭である。昔は太々神樂があつた。

同日は宮昌寺の甘茶がある（宮室）。

十五日 おひじり様の祭日、広馬場總鎮守聖宮神社のお祭り、おおいちひめの命を祀る（宮室）。
山子田、広馬場、新井では、春秋二回の祭りには神樂を奏したものである。長岡では獅子舞が盛であつた。

五月

八十八夜

普段の年は五月一日が八十八夜である。オコモチを作り手伝いに来る人に配る。

オコモチとは蚕の神ママを祭る餅で大福餅のことである（井戸尻）。

五日の節供

四日の晩、ショウブとヨモギをたばねて三束ず軒場と神棚に上げる。これを屋根葺という。またこの日ショウブ湯に入る。入ると「デキ

モノが出来ない。長虫に噛み付かれない」といわれる。

初孫には縁の実家から吹流しが贈られる。新夫婦は嫁の実家へタラの干物を持って挨拶に行く（井戸尻）。

六月

一日
寒に作ったコウリ餅を食べる（井戸尻）。

一 日

寒に作ったコウリ餅を食べる（井戸尻）。

七月

祇園

十五日はギオンで農体である。メダイが代表で聖宮神社に御祈禱に行き、初なりのキユウリを進せてくる。

イキボン

七月十五日はギオンの日であるが新夫婦はイキボンといつて実家へウドン一箱を持って行く（井戸尻）。

八丁注連

十六日はハツチヨウジメをする。神道さんがオンベロを青竹にさげ、メダイが村の入口に立てる。ハツチヨウジメはヤク病が村に入らぬよう立てるものである。

昔は村の若衆がこの日百万遍のジュズを廻した（井戸尻）。

七月十八日觀音様の縁日に村境に立てる（宿）。

土用の丑の日

丑湯といって湯治に行くか、風呂に入りテンプラを食べる（井戸尻）。

八月

カマのロアキ

一日はウデマンジュウを作り仮壇に進せる（井戸尻）。うでまんじゅうを作る。この日以後盆迄に死んだ人は頭にスリ鉢をかぶせて埋める（宿）。

朝飯前にお墓の掃除をする（倉海戸）。

七夕

七日は盆の入口である。

六日の晩に子どもが青竹に飾り庭に立てる、この日から七晩燃しが始まる。

夕方家のカドで薬を少し焚く。この日ウデマンジュウを作り、仏さまに進せる。

七日の夕方七夕飾りは染谷川に捨てる。

七日の朝早く墓掃除をする。

七日の朝、ネブタの葉で眼をこする（宿、宮室）。

新竹で色紙をつるし、七日の日に川へする（倉海戸）。

ナナバン焼き

山子田、関谷塚第四区で行う。七夕から十三日のお盆迎えまで、萬束を毎晩大人、小人、年寄などみ寄ってきてカイドウで燃す。

迎え盆

十三日は迎え盆で、盆棚は座敷に作る。新盆は別の棚を作る。盆棚の下には杉の葉を敷く。

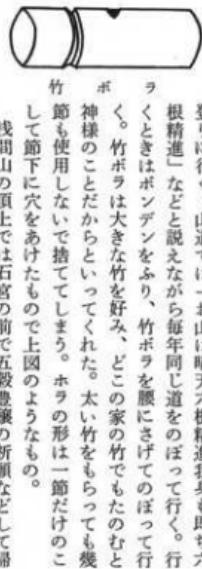
お盆さまは墓へ迎えに行かない。家のカイドウで麦藁を置き、これに火をつける。煙は相馬山の方に流れて行き、お盆さまはこれに乗つてくる。火をローソクにとり盆棚に移す。

迎え盆の八月十三日は村の共同墓地で提灯に火をともし、消さないよう持ってきて、それで門口で薬束をもやし、次で家の燈明に移し、お盆様がお客様に来たという。この日水沢山裏山の浅間山にはホラガイを吹いて、提灯をともす行列が続いたものである。

尚この日盆籠を作る。それは新竹を用い、チガヤでポンナワがない。生の手打ちどんをかける。この手打ちどんは普通のよりやや幅広で、ヒモカワのように作る。これはお盆様が馬に乗つてからあつて、そのときの荷籠、手綱のかわりだといつている。

またこの日山に登つて草刈りをした。そしてそのとき盆花（キキヨウ、オミナエシ、カルカヤ、ナデシコ等）をとってきたものだが、今は草刈りの必要もなく、盆花も殆どないので庭の花を用いている（柳沢）。

十三日の晩は浅間山へ竹ホラを吹きながらのぼった。若衆はブタをきていない者はほとんどのはり、帰りに柳沢寺は廻つてみる程度であり、山へ登る人は、七日から川をとめて水行を一週間し、早夕飯をすませて山登りに行く。山道では「お山は晴天六根精進我身も即ち六



根精進」などと説えながら毎年同じ道をのぼって行く。行ラくときはボンデンをふり、竹ボラを腰にさげてのぼって行く。よく。竹ボラは大きな竹を好み、どこの家の竹でもたのむとボ神様のことだからといってくれた。太い竹をもらつても機会の浅間山の頂上では石宮の前で五穀豊穣の祈願などして帰れる。山の上で夜の十二時近くまでいることもあった。仏を迎えて寺へは行かなかつた。門火をたいて迎えるると浅間山へのぼるだけであったが、今は山へ行かなくなつた。

「仏はとけ、神かもうな、さわらぬ神にたりなし」などとよんで、

この村は余り信心深い村ではなかった。盆行事も山登りがたえてから珍らしい行事もなくなつた（倉海戸）。

新 盆

新盆のある家だけは提灯を掲げる。そして盆棚につるしたものをするとき、墓に白い提灯（新盆提灯）をこもす。四十九日のこないうちは、位牌はあっても新盆はできない。それを無縁仏として盆棚の下に祀る家もある（柳沢）。

盆 花

盆棚を作る前に相馬ヶ原からとつくる（井戸尻）

八月十六日、または十五日墓まで盆さまをチョウチンで送る。

お供の馬はカイドに置く。馬はナスかキュウリに割箸を足として四本さし、モロコシの毛を尾にし、里芋の茎をきさんだもの（これは馬の力イベ）と共に里芋の葉にのせ、生ウドンを馬に乗せる。これは荷かけの繩である（井戸尻）。

八月十六日朝、家の門口で薬束にマツチで火をつけて燃し、午前中に墓まで送る。それはナス、キウリで馬をつくり、イモ（里芋）の葉に乗せて送り出す。盆棚、供物は近所の川に流す（柳沢）。

ナスなどで馬をつくり盆棚にあげて、送り盆には門に出す。食事は朝ボタモチ、昼ウドン（盆の昼ウドンのことを特にヒルバティーといつてゐる）夜は飯（倉海戸）。

十六日 ヒルバティーのお昼を仏に食べさせてから、盆棚にあげた火で門火をたいて送る家もある（倉海戸）。

九 月

八 朔

あさそばぎりに
いいもんだ
トーカンヤ

十 月

秋 祭

八日は約六十年前から村の小字祭であつた。部落だけの祭をコデマツリといい、幣帛料はとりに来ない。これに對して広馬場全部でやる鎮守祭り、前記のオヒジリ様の祭りはオーデマツリといつて本祭であつた。

この日の朝寺で部落の子供を呼び、赤飯の御馳走をした。當時赤飯は家ではたべられず、栗飯、きび飯の赤飯だったので喜んで行つたものである。そしてお返しに、先祖様に進ぜる意味でトウカソヤの餅を寺にもつて行つたものである。

後に各家の御馳走が次第によくなつたので、子供は行かなくなり、今では寺も呼ばないし、他の部落の者がくるのみである（宮室）。

昔は大字毎に四月十五日に、部落祭りとしての春祭りをやつたが、五、六年前から十月九日に一定した。オタンチと一緒にになったわけである（柳沢）。

十日 里宮の祭典、太々神樂はない、この日相馬山に登る（宮室）。

トウカソヤ
萬鉄砲を子供が作り、次の唱え言をいいながら畠の地をたたきながら、モグラ退治をする。この日あん餅をついて神棚とオエビス様に供える。

九月一日は八朔の節供といい、線が葉ショウガを持って実家に帰る（井戸尻）。

ひるだん

ようもちくわちや

はらでえこ (宮窓)

トウカンヤには餅をつく。この日の夕方子どもが集って薦鉄砲を持ち

家々を廻り、一軒毎に庭を叩き、「トウカンヤ、イイモンダ、アサキリ
ソバニヒルダンゴユウメシクツヤハラデエコ」と叫んだ。

これはモグラが入らぬようにという呪いである(井戸尻)。

十五夜

ウデマンジュウと大根をニワに面した縁側に飾る。子どもがそつと下

げに入る。これは盗みであるが悪いことではない。

この日アラシ(風)除けの黒髪神社のお札を畠や田に立てる(井戸
尻)。

十三夜

飾りは十五夜に同じ(井戸尻)。

十一月

ネズミツブサギ 秋麦まきの終ったときに、手伝ってくれた人に一杯
出して御馳走するが、このとき米の餅をつく。麦まきの終ったことを
「ネズミツブサギになったかい」という(南新井)。

十二月

屋敷祭

一日は、稻荷祭りまたは屋敷祭りをする。

この日は稻荷のオカリナを作りかえる。古いお宮は焼く。灰は人の踏
まないところに捨てる。稻荷には赤飯と豆腐(餅の代り)を進せる(井

油 餅

十二月八日は油モチを作る。夫婦餅ともいいう(井戸尻)。

十一日 餅をついてたべた。由来等はわからない(今井)。

秋葉待

十二月十八日はアキヤマチ、夕方、米は前日といいでおいて三合ずつ持
寄り(昔は四合だったがいつも余るので三合にした。お金では百円宛)
宿は年番制でそこに集まる。概ね男一戸一人だが、アキヤマチの組内は普
通七、八人である。

餅はマルメモチで、この日組内の話を決める。秋葉様に詣り宿に来て
酒を飲みお祝いをする(南新井)。

オイベスコウ

十二月二十日は正月二十日のオイベスコウと同じ、この日はオイベツ
サマの帰つてくるので晩にやる(井戸尻)。

オデシ講

十二月二十三日はオデシ講の日 小豆粥とカヤの穂の第二本をそえて

戸尻)。

稻荷様のとき即ち十二月一日或は十二月十五日、屋敷神様として祀り、
正月カザリを作る(柳沢)。

荒神様

炉、かまどの神様で、まことに靈験あらたかな神様、有難い神様である。
この神様がお腹立ちになると、子供が火傷する。田植が終ると苗が
足らなくとも、もらってきてでも、この神様に苗の束を一束供える(柳
沢)。

事じまし

十二月八日は事じまいといい、竹にメザルをいわえ付け、ニワの真中
に立てる。これは魔物除けである。魔物はザルの目が多いので恐れて逃
げ出する。この日、赤飯が煮ごわめしを似る(井戸尻)。

油 餅

十二月八日は油モチを作る。夫婦餅ともいいう(井戸尻)。

十一日 餅をついてたべた。由来等はわからない(今井)。

秋葉待

十二月十八日はアキヤマチ、夕方、米は前日といいでおいて三合ずつ持
寄り(昔は四合だったがいつも余るので三合にした。お金では百円宛)
宿は年番制でそこに集まる。概ね男一戸一人だが、アキヤマチの組内は普
通七、八人である。

餅はマルメモチで、この日組内の話を決める。秋葉様に詣り宿に来て
酒を飲みお祝いをする(南新井)。

オイベスコウ

十二月二十日は正月二十日のオイベスコウと同じ、この日はオイベツ
サマの帰つてくるので晩にやる(井戸尻)。

オデシ講

十二月二十三日はオデシ講の日 小豆粥とカヤの穂の第二本をそえて

神棚に進せる（井戸尻）。

正月準備

煤はらい ストリといふ。十二月二十三日やるのが多いが、冬至をさかいに良い日を見てやることも多い。新しい竹を切つて神棚から全部はらう。晩は小豆粥を食べ、風呂に入りお飾りを作る（井戸尻）。

煤払いは昔は十二月二十三日にした。正月用意を始めた日である（今井）。

おしめない 煤はきした日に作るのが例であった。今は大体お飾りもしなくなった（今井）。

松迎

門松、ニワの真中、大神宮、便所、井戸、カマド、倉に飾る。松迎えは暮のスストリ以前ならいつでもよい。門松にツトをつける。

カマドの松はそのままおき、初雷の時に火をつけてニワにほうり出す（井戸尻）。

正月の歲神様は山の奥からくると伝えられ「お正月様は萬丈の山のその奥からくる」といい、子供達にも正月が近くなると「あの山の上まで正月様はきているから我儘をいもうな」などという。松迎えは暮のスストリが終つてからである（倉海戸）。

カビタリ餅

十二月中についた（今井）。

餅つきと飾り付け

二十八日か三十日にする。一夜飾りはするなどいって三十一日にはしない（井戸尻）。

ツジューダゴ

十二月三十日に茅に二つずつ、団子をさして、戸口にさした。これは

お正月に鬼が来ないようのこと（今井）。

大晦日

大晦日にニワでナスガラとキクガラを焚く。借金ナスガラ、よいこと キクよにといふ呪いである。
三十一日は「寝ると白髪が生える」といってねむらない（井戸尻）。

信

仰

(俗信を含む)

一、概観

榛東村は、榛名山東麓に位置し、旧桃井村と相馬村の大部分が合併した村であり、相馬村の名の示す如く、村内に榛名山砦の嶮しい山相馬山をもつていて、そのためか、本村の信仰関係は山岳信仰が目立つこと、またこの項目中には調査報告がなかったが千葉氏の伝説地で、北斗星信仰なども他地域より目立つて感じられた。北斗星信仰については、相葉博士が癡観の部で記したと思われる所以のものについて概観してみたい。

山岳信仰

榛名山中この地方の信仰の対象とされている山は、浅間山（木沢山ともいう）と相馬山である。元来榛名神社の里宮地帯であり、古くから榛名山へ登る者が多く、山子田から北の人々は浅間山の信仰が強く、南の部落は相馬山や榛名神社の信仰が厚い。

浅間山信仰は、富士浅間の信仰にもつたるもので、かつて富士講のすぐれた先達がいたが、それより古くから水沢の浅間山にのぼる信仰があった。盆に一週間の水垢離をとり、浅間山にのぼって祖靈を迎える。一般には盆の祖靈迎えは寺や墓地から迎えるのが多く、祖靈を朝夕眺めている山頂から迎える習慣は古い民俗である。日本人は元来死者の靈は肉体と離れて近くの高い山に昇つていて、時を定めて家に田に降り臨むものと信じられていた。正月にも元日にこの山に登つて初日出を

迎える行事があり、最近は一層さかんになっている。このような古い固有信仰の名残のあったことは大いに注目してよいものと思う。次に旧相馬村地区を中心として相馬岳信仰がさかんである。現在では相馬講を中心として行者の登山修業も多く、関東では有数な行場となっていることも注目すべきことである。

遠地の神仏

代講はかなりさかんな時代があった。伊勢講はじめ各種の講があり、どの部落でも五つや六つの代講が毎年行なわれていた。倉海戸などでは「仏はうつけ神かもうな」といわれているが、それでも八つも講の名が残っている。榛名講などは近い関係もあり、部落全員参拝した例もあり、榛名信仰の強さを物語っている。講の方法については他地域と同様であるが、大正年代までが全盛期であったようである。

村や家の神仏

この項には俗信も含めておいた。珍らしいのは網笠様が多いこと。女人講や子供組を中心とした仏教の行事のさかんなことが目立つ。網笠様の祭りは明治二十三年の降靈で蚕を埋めたのにはじまる。これは井戸尻、下之前、宮室の三例が記されているが、網笠様の祭りをこんなに盛大にした地方は少い。當時養蚕にたよっていたこの地方の農家のようすがしのばれよう。

女人講では、二十二夜、二十三夜、淡島様、子供組では地蔵まつり、百万遍、その他念仏講（十六念仏、寒念仏）などがあり、何れも和讃や念仏を唱和する。後世までこれほど念仏のさかんな地方は本県では珍ら

しい。その理由については芸能の概観で記したから参照されたい。

子供組の行事の道祖神焼も地蔵まつりと共にさかんであって、道祖神責めの民俗も残っている（年中行事の項参照）。また道祖神の石像もそう古くはないが立派なものが揃っている。こんなに美事な像の多いのは信仰のさかんであった証拠である。特に近村に比較してよく残っているのは夏の地蔵まつり。上サ・南の部落では今でも青年がこれを行つてゐる。大人の行事が次第に子供に移るのが普通の姿であるならば、ここによく古い姿がのこつていてことになる。

庚申待もなかなかさかんであった。特に下の前の資料がよく報告され

てあるが、他部落でもほぼこれと同様なまつりかたが行なわれていたのである。

このように信仰のさかんな原因はどこにあったのであらうか。過去四

回にわたる本県の民俗調査では、同じ信仰がさかんな場合でも本村の場合とは異なる。本村の信仰には生活苦からくる信仰とは異ったものが感じられる。村人のなごやかな楽しいつどいであり、そこにはこの村が過去四

回の調査の村々に比して豊かな村であったためではなかろうか。適当に水田も持ち、養蚕も手広く、山も近く、共有山も多くもつっていた。仮ほ

つけ神かもうなどといながら自らは楽しんでいたのである。若衆の遊びもはでだった。井戸尻などでも全自動的の脱穀機を個人で買った家が三軒もある。一日に一六〇駄はこなせるこの道具を共同でなく個人が買える経済的に豊かな村であった。そのためか信仰面にも深刻さがない。明るい村柄がしのばれる。

呪い・禁忌・怪奇・兆占については、比較的よく資料が集められた。ここにも前記村柄を感じられるものがある。

富士講

九月一日の晩に火祭りをする。現在の公会堂のところに富士講の碑があるが、富士塚が現在の演習地のところにあった。講の田も六畝ばかりあり煙もある。

先達は羊山滿行の号のある小山馬吉（南新井）という人が有名だが、今井にも有名な先達がいた。ほかにも何人か先達がいた。この人は達は白衣をもつていて、行衣は初めのものを終りまで用いていたので富士登山ごとに印を押し、背中にいっぱい印が押してあり、ぼろぼろになつた。多い人は富士山へ三十三回も登っている。

講員は代表がいゝときはワラジ錢を包んでやり、代参者はお土産をかつてきた。

吾妻様（アヅマサマ）

西山に桃井分に吾妻山という山がある。ここに吾妻様が祀つてある。

五月一日が大祭で村から太々神樂を奉納し、講で近村かるくる。

浅間山

盆の七日から十三日迄の間、この辺りでは小川の水を堰止めて、周囲に注連を張り、その中で毎日水垢離をとる。

八月十三日の夕刻、祈願者は大きなボンデンを（籠屋にたのんで丸い籠を作り、神トウさんに御幣束を作つて貰う）持つてゆく。

「お山は晴天、六根清淨」と唱えつゝ、手に手に、竹ボラという竹の一節の鳴る道具を作つて吹いてゆく。

水沢の人のがね（道草刈）といつて、登山道の整備をしておいてくれる。下る時は裏山へ下りる（六ヶ七区）。

盆の十三日の晩に水沢山に登る習慣があった。これは大体吉岡、棟東附近の人が主であった。昔は七月七日から、新暦になつては八月七日から、村の小川を堰きとめ、メ縄を張り、精進場といつて、毎月一回ずつ、水を浴びた。

二、山岳信仰

当の晩は、竹の一節のものに穴を開けた「竹ボラ」というのを作

り、それを吹き乍ら、又、口々に「六根清淨」と唱え乍ら浅間山（水沢山）へ登った。登りには山の向って左側から上り、降りには右側から下りて来た。松明の火で、山が美しく見えた（九〇一〇区）。

相馬山

頂上のお宮には御婆の姿があった。懶髪で後へ髪を下げていた。

行者の登る山で、靈験が著しかった。ある時、登山者が頂上近く行つたら、山犬が坐つていて通れない。先達の南（和十郎）が御許しを願つたら、急に居なくなつた。この南和十郎という人は病人の患いなどもなおした行者であった（六七区）。

相馬の信仰は余程古いものらしい。黒髪神社はその里宮であるが、これは明治になってからできたものである。（神樂殿の前の小さい家が昔お宮で、今のお宮は明治のものである。）相馬村の總鎮守であつた。

相馬山の山始めは、三月十五日。山終いは十月十五日である。各大字や広馬場全体の総代等が登山し、先達（里宮の山口氏又は行者）が主となつて拝み、御酒など持つて行つて進ぜる。黒髪講は黒髪神社を中心とした講で、前橋や高崎に講元があつた。五月五日が山開きであった。

黒髪神社の講

井戸尻の上の黒髪に黒髪神社の里宮がある。奥の院は相馬獄の頂上にある。現在の里宮は明治十三年に建造されたもので、旧社殿が社務所の奥にある。旧社殿は側面に風神、雷神がほつてあり、江戸中期以降の流れ造りの小社である。この黒髪神社の信仰がさかんになったのは南和十郎という人の功績が大きい。この人は新井の人で御教の信者、相馬山を行場として信仰し、現在の相馬講の基礎をつくった。今は神道集成

派に属している。



相馬講行者の家の祭壇
(總社町阿久津武堆氏)

講の分布と方法

里宮の祭典がある。五月五日はお山開き、十月十五日お山しまい。外に二月の節分、毎月一日、十五日、二十八日、奥の院の祭は五月五日と十月十五日。



黒髪神社入口 (八之海道)

講が結成されており現在東京、新潟、長野などの信者を加え約一千人、県内では高崎、前橋、渋川、伊香保、北橘、大胡、

昔は四月八日が祭典で終日大勢の人がでてごった返しだ。その後学校の入学日が四月八日なので、四月五日に

安中、松井田、里見、室田、金吉等にあり、その名称も地名、代表者名をとったものなどあるが最も大きいのが寛永講（埼玉、横浜、新潟などが多い）日吉講（前橋）、相馬講、江木講、朝日講、斎藤講、阿部講、天田講、山王講、狩野講、根岸講、山崎講、樺東講などがある。しかし、総称的には相馬講とか黒髪講でも通じる。

方法は、講元（主に先達がなっている。行者の家）が神社から節分と

四月五日に連絡

をうけ、代参式

でなく講員全員

をつれて参拝に

くる。この日は

里宮には行者が

数人いて祝詞を

あげ、そのうち

行者の一人に

神様がのりうつ

り、予言をす

る。特に火防、

盜難、養蚕など

の信仰からくる

人が多い。最近

は競輪の選手ま

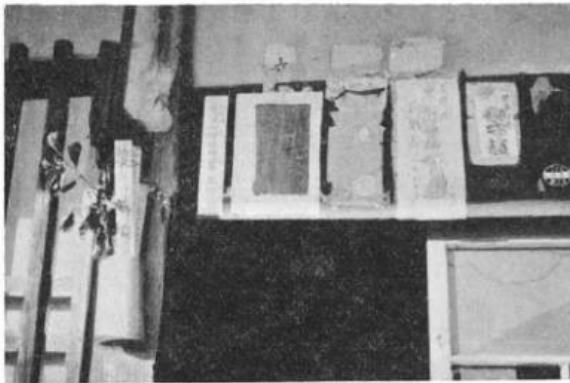
でくる。

五月五日の山

開きの日は、は

じめ里宮で祭典

をし、お供物を



相　　馬　　講

相馬山頂上は関東各地から行をする人が集りお籠りをする。土用行と寒行の二回、土用行は一週間で不食で、朝、昼、夜と日に三回おつとめをする。毎朝暗いうちに一之鳥居までクサリを伝つたりして降りてくる。寒行は二十日間、水行といって一之鳥居で滝にうたれてくる荒行。寒行の食事はソバ粉と醤油だけである。東国でことと並ぶ行場は木曾、三峯山、御岳、八海山などであり、関東の行場としてむしろ遠くの人々の間に知られている（井戸戻）。

巫　　祝

南新井に和十さん（牧口和十郎、明治二十年頃）という人がいて盛に信仰した。

相馬講というのを作り、新井では八幡様の境内で火渡りなどした。御座に立った人が先登で火を渡つた。この拝む中心は御嶽山であった。

この人達の唱え言に

“イッピョウトウシヤ、ホンリソワカ”などいうのがあった。

拝む人達が、たわむれに、有馬から来た十、五六才位の子供を拝んで

持つて相馬山へ登る。東から登るのを表参道とし、途中一枚石というところに行場がある。ここが一之鳥居でここ滝をあびてからぼる。途中三十七靈神と三十六童子の碑がたつてある。三十六童子のところでは全部お経をあげ、御幣をあげる。そのため一之鳥居から頂上まで五時間位かかる。頂上の奥の院へは行者のあとをついて表から登つた人のほかに、裏（榛名富士側）からのぼった人（足の弱い人や女、老人）がいて、合流して護摩をたく、約一時間、灰は信者が頂上の解散のとき持帰る。頂上にはお籠り堂（十畳と六畳）がある。

十月十五日のお山しまいは、お山開きと同様にして正午頃から護摩をする。十月十五日のお山しまいは、お山開きと同様にして正午頃から護摩をする。

行

神つけしたら、偶然神様がついてこまつた事があつた。

「アサ山、ハ山、ハグロノ權現、ナラビノ十日大明神」と唱えて拝み、その十五位の子に目かくをして、オンベロ（幣束）を持たせておがんだら神様がのつたのであつた（九〇一〇区）。

三、遠地の神仏

本村には榛名講をはじめ伊勢講、迦葉山講、峠講、古峯原講、高尾山講、産泰講（吉岡村小倉の産泰様）、成田講などがあつた（倉海戸・南新井・下泰前）。

榛名講



新井で
は大正年
代までは
盛んに行
われた。
五月五日
に榛名神
社に代参
をたててお
詣りして
いた。戦
争中から講をしない部落が多くなった。下泰前では五人一講で四月末に宿では、榛名神社の坊の手代がお札をもって来、大山氏方へ泊り、宿の部落全体にお札を頒ち代参のときの打合わせなどしていった。そのとおりおこもりしてきた。

宿では、榛名神社の坊の手代がお札をもって来、大山氏方へ泊り、宿の部落全体にお札を頒ち代参のときの打合わせなどしていった。そのときお金か米など集めていく。お金は金二、三十円位であった。

古峯講

古峯へ行つた日、村全体の男が宿に集まり、米二合と会費を持ち寄り、食べながら十二時まで話合う。帰りにお札をもらつてくる。

これは部落全體が古峯講を作つており、代参人はタジビキで決め、宿は代参のところがなる（宿、南新井・井戸尻）。

古峯講と高尾山



榛名講文書（関谷塚）

古峯県日光の手前にある
古峯神社—古峯原、コブガ
バラ、コミネサンという一
はお天狗様で火防せの神で

ある。
高尾山は春代参の二人をくじで決めて諦る。お札を受けとると神戸に配るが、このとき四月十日までに帰ってきて、四月十日がお日待ちである。日を定めて一戸ずつ出てお日待料理を作る。宿は代参してきていた人の家を当て、宿に村中の人を呼ぶ。但し代参者二人は春秋一人ずつ宿となり春はオコワ、秋はゴモクを中心御馳走する。

両講については、昔は村は三十数戸あり、村を二廻りして寺の裏の高山上にコミネサンを招いた。最初と合せて結局村を三廻りしたので満講になつたわけである。
こうして次に高尾山に変つたのであるが、戦争でやめた（宮室）。
下の前では春先、二人の代参をたてた。

古事記は火伏せの神、もとは村全体で四人で代参に行つた。のち一人となつた。四月十五日頃出かけ、二晩ほどとまつてきた。今はい。

無野講（峠講）

昔はたいていの部落にあった。宿では、碓氷峠の熊野神社の御札配りも来た。しかし、最早數十年前から途絶えている。御札の外に熊野の午王をもつて来たものであつた。

十二様（十二講）

山の神は十二様で、十一まつりをした。これは月の十二日にするのがきまりだが、一月と十二月の十二日だけした。十二様をまつるのは山商売をする人たち（きこりや車ひきの人など）であつて、一般の人たちはとくにはまつらない。

十二講のときには十二様の掛軸をだし、赤飯をして祝つた。一月と十二月の十二日には山仕事を休んだ。

また、山を買って、木をとる人は、一山買うごとにおんべろをつけて祝つてから山に入った。

なお、山商売でないものも、一月六日には六日山といつて十二様をまつた。この日はもちとか米、かしらしきを十二様にとしんぜた。十二様は部落内にあるのでそこまで供えに行つた（関谷塚）。

十二様のお祭りは特別にはない。十二様とは山の神で、男であり大山祇神という。稻荷様はタナガリで十二様がもとオオヤであった。初午の

日には世話人が寄つて飲みくいする程度である（宮室）。

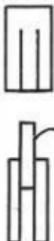
十二講は臨時の講で、薪山などする時集つて、御馳走をたべ、十二様を祭つて山が無事にすむ事を祈つた。山契約（売買契約）の時した事もある。

薪山の山始めの時は、雜木を切つて地上に立て、三尺（三段）纏で結び、酒をかけ、頭付き（ゴマメなど）おさこ（白米）を上げて十二神を祭る（新井）。

四、村や家の神仏など

笠神様

おかげ手のかまどのところの柱に注連をはつてある。これは屋敷稻荷がある。ありませる。まつり（十二月一日）におんべろといふ。まつりにつくる。十二たれといふ。こ



かざりする）までおいてかざりつける。十二たれは稻荷まつりのおこわをふかときゆげでふかす。

釜神様には田植がおわると苗を二たばんぜる。正月の松かざりはかざりかえのときもとらないで、霜のひどいとき燃して外にほうりなげると雷がおらない。またこの松をもしておちやをわかしてのむと訴訟にかかる。

つといわれる（釜熊）。

杓子様（シャクシサマ）

この辺では杓子様はハシカを總す神様として知られている。

青麻様

狩野大助氏の処に青麻（アオソ）様の石宮がある。

地神様

地神様は薪の端などに祀られている。十二月十五日が御祭りで、魚に

アゲを上る。この神様は百姓の神様である。

地神様には「南無堅牢地神善女神」などいう石の塔の立つてある処がある。

稻荷様

稻荷様のオカリヤはさかさ竹、さかさ繩をつかぬ事になつてゐる。オカリヤに必ず前の年の竹を少々使用する家もある。

稻荷と狐

弥吉右衛門さんの處で稻荷祭を急に思い立つてやった事がある。そしたら翌日狐が一匹死んでいた。おがみ屋にみてもらったら、狐が信州の方へ行っていたのを急に察されたのでいそいでとんで来たためノージシキツタのだといった。

天神待

一月二十四日の夜、米二合位持ちより、宿をきめてとまる。天神様の文字を書いて床の間に下がった。翌朝、湯に入つてわかれた。

子供仲間の会合である（八幡）。学校の子供が寄つて天神待をした。二月廿五日或は三月廿五日であるが、それ以前は土曜日にやつた。子供の出た家を借りるのが普通だが、その時の都合で宿を決め、食物を持寄つてたべ、先生もよんだ。

昔は「奉納天満宮」と書いて翌日天神様に納めた（宮室）。



長岡道祖神

道祖神
ドンドン

小屋は二つ
作つた。小
さな方の小
屋をコデ小
屋と呼ん
だ。

地蔵まつり

ク、ヘソクリなどと同じ様な意味で、薺など充る時、屑物などを別にはねておいて、女や外の家人の小道に自由に使える錢としてとつておく事などをいう。小屋は十三日に作り夜となつて十四日の朝もした。子供が村をまわつ

て御祝儀を貰つて歩いた。人別で百円位、子供殊に男の子の生れた家はそれより沢山くれる。

小倉の天井裏に「奉納道祖神大笑」とかい紙をさす。村中へオミゴ

クを配る。

十四日の朝もす。その前村中歌を唱つてまわる。

道祖神が燃えますよ。

早や夜が明けますよ。

鶴のお父さんが鳴きますよ。

宮室の方では「ハイガミ」（幣紙）といって、道を通る人を繩を張つて止め、お金をねだる。

又お産のあり相な家や、特別金のあり相な家へ行き、男の子が生れるよう祈るからとてお金を貰うという（六ヶ七区）。

危病入れ 人別などで子供の意に反すると、子供達はその家にさかさ松をすれこめといふ。すると必ずその家の危病が入るといわれていた

道祖神様は二人並んでいるので、男女が並んで歩くと「見ろ道祖神様が行かあ」といつた（倉海戸）。

昔道祖神様を天神様のところへ移したら伝染病が流行したのでまた旧位置へかえした。

道祖神様は二人並んでいるので、男女が並んで歩くと「見ろ道祖神様が行かあ」といつた（倉海戸）。

下の之前では、小学生から二十才までのものが中心になつて地蔵まつりをしている。時期は八月七日から十五日までである。もとは八月一日から十五日までして、ここでは八月十三日から十六日までで、地蔵まつりは盆月にしてある。

組織は、オヤカタ、コガシラ、ジゾッコの三つにわかれてゐる。オヤカタはジゾウガシラともい、数え二十才のものがあり、年がきたもの

は全部オヤカタになつた。彼らが和讀の中心となり、全部の支配をし
た。

コガシラは、つぎの年にオヤカタになるものになつた。

オヤカタの補佐役をつとめた。

ジソコは小学生以上のもので、オヤカタ、コガシラ以外のものであ
る。小学校三年ごろから灯籠をもつた。和讀をもうのは大体中学の一
年生から。

なお、前年のオヤカタは、最後の晩に地蔵さまを毎戸まわすのを手伝
いにくる。

日程はつぎの通りである。

八月一日はカマノタチアケの日で、地蔵様の子供が全部出て、灯籠は
りや境内の掃除をした。

八月七日の夕食後、観音様のうしろにしまつてある地蔵のみこしをか
ついて、地蔵堂までうつして、この晩ここにとめた。(現在は地蔵様のみ
こしは、小池金作さんのところにある。)

八月八日の晩には、地蔵様のみこしを、地蔵堂から観音堂へ移して、
この晩は観音堂へみこしをとめた。

こうした、地蔵様のみこしの移動を、十二日までつづける。ただ、雨
天の際は中止する。

八月十三日に、お盆様をむかえてから、盆まわりをした。これは十四
日もつとけていた。盆まわりの順序は、十二日に地蔵様のみこしが、部
落の下手にいれば下手から、上手にいれば上手からまわった。各家で
は、地蔵様のくるのをまつていて、庭にむしろを一枚ほどして、おぼ
ん様の香たてを出しておき、お茶がしを用意していた。地蔵様は家の方
へむけてむしろの上におろし、線香をあげてもらう。また、おしむぎな
ども供えてもらつた。それから和讀を申した。そのあと家人がお茶を出
した。各家ではひきわり一升と灯明代として若干の金をもらつた。子供

の新盆をむかえた家では、さいのかわらの和讀を余計にやつた。この家
では、ごちそうもよかつた。

地蔵契約 もとは旧の九月一日、現在は盆が終つてからの最初の日曜
日を利用して。宿は希望者の家の利用した。宿をすると子がよく育
つというので喜んでかしてくれたし、また、子供をなくした家では、子
供の供養といってかしてくれた。

むかしは、朝食後一旦寮(観音堂)へよつてから各戸おけをついて
ひきわりをもつてあるいたという。現在でも毎戸まわつて、馬もちの
家はひきわりを三升、馬もちでない家はひきわりを二升もつた。この
とき子供は「地蔵契約をするんだからおさごをくれ」といって、強制的
にとりあるいた。ひきわりのない家はひきわりに相当するだけの金をく
れた。また、なす、きゅうり、ねぎなどももらった。(現在は米をもら
う。)

お盆まわりのときにもらったひきわりと、地蔵契約の日にもつたひ
きわりを、米屋とか希望者にうりわたして、金に代えて、その金で米を
買った。野菜などは宿の家の提供して汁などをつくつもらつた。

宿では夕刻めしをたいてくれた。庭にむしろをして、ごもくめしを
振舞つた。ここへは下之前中の子供(二十才まで)男女のものが地蔵契
約によばれていくんだといつてあつた。

以前は、一番契約といつて、金がつかいきれないときには地蔵契約の
翌日幹部級のもの何人かが宿へとまつて、一日中ゆっくりあそんだとい
う。このとき、金吉とか箕輪まであそびに行つたものもあつたといふ。
この日が大人の氣をうえつけられる機会であったといふ。

なお、子供が地蔵まつりをする前は、十五と四十二才までの若い衆が
地蔵様をかついだといふ。これを、時期ははつきりしないが、子供たち
にゆずつたものという(下之前)。

地蔵まつり 今は無い。

八月七日から十六日まで（十三日はかけりがくるのでのぞく）。世人が二人いて年番交替する。毎晩どうろうのろうそくをとりかえ。かねと大鼓をたたいて、大人四人がかづぎまわるおみこしには、家々の角々で水をくんでおいたものを地蔵にかける。又各戸ではおさい錢をあげたり、おちゃがしを貰う。村中かつぎまわるのだが、この行事をしないと病気がはやるし、旱魃がある。

「キミヨウ チョウライ ジゾウソン
シヤカノ フウゾウ オクネエシ」

と唱えながら各戸でおはらいをする。

現在地蔵は新井の興徳寺にあり、とうろうは薬師様の一階に保存、みこしは福田さん宅の倉にしまってある。

この地蔵まつりには笠熊だけでなく隣村からもおまいりにきた（筆熊）。

地蔵様の御輿まわし

盆は七日から十六日迄であるが、その前、一日から七日迄子供が地蔵御輿をかついで毎戸をまわる。

各の家では庭へ入って貰う。門（カド）で線香を立てよ、和讃を唱え

る。和讃は七、八通りある。宿は替まわる。

和讃は村の年寄が教えた（宿）。

百万遍

日はきまつてないが、七月二十日から二十五日までの間の日をきめて、半日仕事を休んで午後からした。早いころは七月十八日ごろにした。むかしはコモノヤスミを利用してした。場所は寮。毎戸一人ずつ男が出た。

この日は酒を買って飲んで車座になつて数珠を「ナンマイダ、ナンマイダ」といながらかねと太鼓をたたいてまわした。数珠は桐でつくつたもので、毎戸から出しあってつくつたものである。



珠 数 百 万 遍

里宮神社の神主がオンベロをつくつた。また、毎戸へ悪病（わたりがみ）よけのお札をくばつた。このお札はまつり当番（区に二人いる）が神主のところからもつてきるもので、その当日か、翌日、当番のものが毎戸費用（均等わり）をあつめながら配つた。

数珠まわしが終つてから、五枚のお札を村境にたてた。たてるのは各村境に近い方向のもの。お札は細竹の先につけてたてた。これは、わたりがみが部落へ入らないようにという意味をもつていた。これを八丁じめといつた。むかし、なまいいきなものには、「八丁じめの外へ出たことがあんめえや」といつた。これは、内弁慶で他人様の味を知らないものにいったことばで、よそへ出てみろという意味である。

この日座敷の中で上と下に分れてつなひきをした。

上座には年輩のもの、下座にはわかいものが位置して、のぼりはちまきでした。最後はひきおとされる

ことになつていて、これで一回終る。ひきおとされない

いとまくないといった。

ひきおとすのを三回くりかえす。これを女子供が見物にきた。病気にならないか

ぜにあおうというのできだ。見物人は百万べんの風にあうべえといつておまいりにきた。つなひきが終る

と、おみごく（かし）を見物人にわけてやつた。時間は午後三時から五

時間（下之前）。

七月二十四日、コモの休みにする。大きな数珠をまわしながら念仏をとなえる。それがおわるとハッヂョウジメを村ざかいにたてる。これは悪い病気がはやらないようにするためである。百万遍をするときはネハンのかけし（掛軸）をかけて供養する（道場）。

七月十六日に、十六念仏と同様に唱える。念仏を唱えてから八丁メを立てた（宮室）。

二十二夜待

時期は春が二月二十二日の夜、秋が十月二十二日の夜。場所は妊娠者のいる家。参加者は一軒一人ずつ女衆（でない人もある）。米三合ずつ

もより、若干の金を出した。参加者は中年のもの。お産のできる人たち

で、安産できるといふので出た。家庭

の都合で年寄が出たものもあった。

二夜待ちの組は、一、二、三組が一緒で、一組、四組で一つの組をつくつていた。

当日は、二夜様の掛軸を床の間にさ

げて、あつまつた人たちがおもいおも

いにローソクをあげた。和讃はしなか

った。

知人に妊娠があればローソクをあげ

て、なるべく短くして、それをもらつ

てきて、うむすぐ前にそのローソクを二夜様へあげる気持でつけた。そ

のローソクがもえきらないうちに子供が生まれたという。また、最近ま

でこの部落には、産がもとでなくなつた人はないというが、これは二夜

様のおかげという。



二十二夜様（八之海道）

二夜様の晩には、ホンビキというのをした。男衆は丁はんをよくしたが、女衆はホンビキをした。今から六十年も前までのことである。

一尺二、三寸のひもを三本よってあたまをむすんだものを五本つく

る。そのうちの一本にゼに何枚かつけておく。五本のひもをそろえて

もち、手の中にかくして、たたみの上にぶつつけた。どれにゼについ

てあるかをあてたので、その位置とか形でよび名があった。はじの

き、なかのき、うらのき、おもてのきなどという。柳の木のようになつ

たかたちをしたものはやなぎのきといつたりした。これで蔓子などをかけたもので、金はかけなかつた。

ホンビキには、おひまらの晩の興業としての意味もあつたが、女の腹

から子供をひきだすという意味もあつたといふ（下之前）。

女が集まり、お茶と菓子で夜更けまでしゃべつた（井戸尻）。

お産の神様といわれ女だけの信仰で、身持ちの人が団子、線香をもつて詠る。講はない（宮室）。

二十一日の晩 おひまらといつて月があがるまでおきていて、ごちそ

うたべたり、話し合い、月があがるとおまいりに行つた（籠熊）。

お寺に二夜様の塔があるが、昔は女人講があり、よく集つて念仏を唱

え、祈願した。主に妊娠婦人のための祈願であった（宿）。

二十二夜様の講は、鉦を叩いて和讃を唱えてお祭りをした。石仏は八

之海道の石屋が作つた。

念仏の師匠は浅見常五郎氏といふ、婆さんが十二人位集つて、いつも

練習して唱えていた（新井）。

念仏講

十六念仏といい、月の十六日特に農閑期の一二、三、四月十六日、一回

に部落中一戸位宛廻る。年寄り、子供衆は念仏をあげている部落に遊び

に行く。そここの家ではザクニ（おみごくの意で、人蔘、大根、里芋を主

体として豆腐、油揚などを一緒に煮たもの）を出す。又その他いくらお

こつてもよかつた。

この念仏は線香を立て、オガラ二十一本出しておいてカズトリに使いながら念仏を唱える。一回じゅずが廻るまで「ナンマイダブツナムマイダ」を幾度もくり返し、一回廻るとカズトリをし、線香を立てる。

二十一回ずつ三回唱えて「ゆうすう念仏なんまい」これを二十一回ずつ三回、次で「ジニウオウジッタインママイダ」と二十一回ずつ三回繰返す。これをまた御祈禱念仏ともいった。

死人が出て仏を出すときも念仏をやり、大振舞のときは一戸一人残つて念仏を唱えた。これも十六念仏と同じである。このときは終つて仏様の名を申すことになっている（宮室）。

寒夜仏（イセクイネンブツ）

二十三夜講はたあげをする。

二十二夜講 女の人のあつまりで講を組んでいる人は、岡部マス、岡部トヲ、岡部ダイ、岡部セツ、岡部アイ、羽鳥モト、羽鳥キチ、高橋キチさんたちである（新井）。

昔は念仏の講中があり、順番に宿をして、念仏をした。主に女衆がやつた。

今は葬式の後にだけ念仏はする。これは男の老人が大体やるのである。十三仏の掛物をかけ、鉢と大鼓をたよいて念仏を唱える。

種類、南無阿弥陀

仏、十王十体、融通念

仏、御真言（ウンオン

アボキヤベーロシナノ

ーマカギダラーマニハ

ンドマニジンバラバ

バタリヤ）十三仏等を

唱える（宿）。

今はい。二十年位



念仏供養塔（下新井）

前述あった。女の講で、二十二日の夜、有志の人が講中の人によんで拝んで貰う。淡島様と如意輪様を拝んだ。これはお産を軽くする様願うのである（新井）。

薬師様と弁天様

船尾の寺が焼けたとき、飛んだモエクジが寺の池に落ちた。そのモエクジを薬師様に祀ったといい、今は金仏の胎内にそのモエクジが安置されている。この薬師様は子供のやつた悪戯は苦にしない。事実盛で悪戯をするけれどもまだ伝染病もはやらないと村人は云っている。また薬師様はお産の神様ともいっている。

かつて十五世の僧侶が薬

師様の内をきれいにして、子供を入れぬようにしてい

い、仏様をきれいにして豊

をフンダラゲルと、坊さん

が眼を病んで疫病がはやつ

たという。

はやり眼のとき祈願する

だけ「め」の字を書いて詣

と治る。このときは年の数

だけ「め」の字を書いて詣

る。また「ハナトヲ」番頭

がはやりめになつたので、

坊さんは子供達が遊べるよ

うにしたという。

弁天様の祭日は薬師様の

祭日と同日の十月八日である。国司の僧兵が巡錫のと



宮室弁天の祭

き一山組織で船尾山を作った。千葉常持と争って焼払われ散つて下つた。

た。今^の寺は当時の船尾山の系統である。

焼けた当時は真珠山医王寺といった。天台宗で本尊はどんなん仏でもよかったが、当時こは薬師如来であった。薬師様が寺の前の池に飛んでいた。近所の人がこれをみて堂を建てた。その仏体が本堂の本尊となつた。その後堂が荒れていたので箕輪初代城主伊井直正が土地を寄附し、文禄二年再興した。当時白井の双林寺が禪宗で盛んで、十三世の僧を招いて曹洞宗に改宗中興した。このときの住職は「久室開昌大和尚」といい、出来上つて武州に行つたといふ。その後天明二年頃

続いて二回焼失し詳細は判らない。

尚船尾山から弁天様の池に飛んできたというモエクシは、杉村のように入られるもので、縦最大十四匁、幅最大四十二匁、厚さ五、八匁のものである（宮室）。

オコリ山と念仏堂

信者が生きたまま埋つたところで、この人はうち（小林銀造氏）の先祖である。このしんじんかはさとりをひらき、生きたまま土の中に入り、竹筒をたてておいた。そして土の中で鍾をたたいていたが七日で聞こえなくなったという。この山はあたりがあつて、山へ上るとかならず火事があつたり人が死んだ。そこでオコリ山と名がついた。ある家が火事で焼けたのも当主がオコリ山の木を切つたためだということである。道祖神焼きで念仏堂が何回も焼けたのもオコリ山のせいだという。念仏堂をたつてからはオコリ山をしめるために供養をした。

念仏堂にはボーサマがいたが女ボーサマでこの人は秋父の出だそうである。和讚をとなえながら念仏して歩いた。このボーサマはいつの間にかいなくなってしまったが道場ではオコリ山のあたりをおそれて念仏をつづけてきた。

念仏堂には相板が残されている。

上野群馬郡長岡村念仏堂常什物

願主

一蓮社淨善改禪

寒念仏供養人數
伝 藏 太 七

長右衛門
友右衛門

藤右衛門
惣右衛門

治兵衛

藤左衛門
長右衛門
藤右衛門

オコリ山は今では小林家の所有であるが、ゼニをつけてもくれたい土地だといふ。

明治九年土地のことが訴訟になつたが名義のことでの問題があつた。人たちは今

でもオコリ山の前をオジゲイして通るといふ。あがる

と山がオコルといふので、のぼる人が少ない（道場）。

墓地の墓

墓地には各々お堂があつた。

ジオードー（十王堂）は今は堂がなくなつたが石で十王十体の像が作られてゐる。今は日影の寮で世話をしている。



新井家の墓見聞

八幡の寮は觀音寮といふ

松岡金作氏外五名の墓がある。

浅見の寮も觀音が祀られ、浅見氏一門の墓がある（新井）。

庚申待

下之前に
塔（柳沢）
申 庚



三組で二組

一組のもの
はもともと
六、七軒で

百姓の大き
さがあった。

いうちが入っていた。最近はしばらく庚申まちをしていない。

二、三組のものは、一組は二組分で一かたまりで十軒一組だが、もと
は七軒で、むかしからの家のものが入っている。もう一組の方は、七、
八軒で一組、三組分が主で、二組の方から一軒だけ加わっている。

四組のものは七、八軒であったが、現在は休んでいる。

庚申まちの仕方は講によって多少のちがいがみられるが、その大略を
記してみると。

ホントのサルの日をえらんとするがたてまえだが、時期によっては
仕事の関係でできなかつたので、日時は任意、ただ、イヌの日はさけ
た。

参加者は男の人が原則だが、女子供でもみとめた。

庚申まちの当日には、宿の主人が朝飯前に「今夜は庚申をするから且
那におたみします」

といつて組内をまわった。各家ではこれを

「おごちそうさまです」

といって受けた。

当日の仕度はつねのきのものをきていた。宿で風呂をたいて、オトウ
ニンズウのものがはじめに入つた。そのあと宿の家族のものが入つた。
かたい人は家で風呂をわかして入つて行つた。風呂がすんでから夕飯を
いただいた。オトウニンズウは六人で、六人に不足でも余計でもアイノ
トウといった。したがつて、講組の膳碗箸などは六人分しかなかつた。

不足の分は宿のものをかりた（草刈りのとき馬に六束つけたが、これを
オトウニンズウがそろつたといった）。夕飯がすんでから豆がゆをつ
くつて、これのおしいをした（強いたこと）。つかつたおわんは三合分
ぐらゐ入るもので、庚申の晩にたべた倍になるといつて大変食べた。

一組の場合に例をとると、はじめは年二回、春秋にした。すべての
ものをお出していたが、後に秋一回だけにして、米を四、五合もちょ
せにした。この頃は、近所のものや本家、新宅などを皆さんよびにした
こともあつた。しかし、部落の庚申まちがあるので、組の庚申まちはや
めになつた。

庚申さまには線香やローソクをあげたが、別にとなえことはなかつ
た。

当日のごちそつは、そば、ぼたもち、赤飯などで、これはそのときの
施主によつてちがつた。この晩は泊らずにかえつた。

下の前の庚申待ち

ここでは、各組の庚申まちのほかに、下之前全体（四組は除く）の庚
申まちがある。これをホントマチとよんでいる。時期は春のかいこ前
で、二月か四月のホントのあたり日にしている。

ホントマチの世話人は、もと若い衆がしたが現在は当番一人がしてい
る。以前は四人で、一、二組から出たが、現在は、一組と三組、二組と
四組がぐんで、二人出ることになつていて。この当番は一年交代で、神

社関係の世話をすることになっている。

各戸からは米三合をもらひ、費用は後で計算して各戸へ均等わりにして出してもらつて。宿は、下組の方の当番がはなし安いとしているが、これは庚申様(百庚申がある)にちいためである。

たべものは飯。当番は朝から出て色々の準備をする。部落の人(男衆が)は夕方になって、米をもって宿へあつまる。宿では庚申様のかげじくをかけておくだけで、参會者はべつにこれをおがまない。

なお、庚申様には、土地が二畝ばかりあって、そこには百庚申がたっている。四組の人たちはこの土地をもつてないので、ホントマチには参加していない。したがつて、よそ村から転入してきたものについては、共有地の代りに金をだしてもらつてある。

庚申まち関係の俗信

○庚申様は百姓の神である。

○はなしは庚申の晩といふ。

○庚申様はチブクがきらいなので、その場合には、庚申まちに参加しない。

○庚申ばらは庚申まちのホントの月にさく。

○庚申さまにごちそうをお供えしてから地震があると、庚申まちをやりなおさねばならぬというので、おそなえしたものは、一と二時間でさげてしまう。

○寒中に庚申まちをやると、寒庚申は火にたつて火事になるといつてさける。庚申まちは冬以前にして、節分がすぎるまでしない。

○庚申様の掛軸などは、神棚へはおくないう。

○庚申の月に妊娠した子供は、とびぬけて馬鹿か、とびぬけて利口ものができるという。庚申まちの晩には、今夜ふかんじやねえぞと年よりにいわれた。また、庚申まちの晩に早くかえると、そんなに早くけえつて子をこしらえると、ぬすつと子ができるぞといわれた。

○申どしのものは色ごのみだという。

○チブクのあるうちのものは、「実はわしはチブクをきてるので、箸をとりけえてくれ」といつて、宿の箸をかりて食べた。座席は一人分ぐらゐあけておいた。雑談になればふつうの席についた。

○お庚申時期になると、小葉をうるぬく(間引きする)。小葉が青くなると、お庚申時期という感じをもつた(下之前)。

庚申様は百姓の作神である。この日は犬と猪をさけた。五、六戸で組を作つて、農閑期の庚申の日を中心にして、三日よいぱりして、百姓のことを話合つたりたべたりした。参加するのは男のみである。当日は先ず湯に入つてオキヨメをしてから始める。各人がもち米四合、豆小豆一合、砂糖代りにお金を持寄つたボタモチを作り、特別に大きいオカサネは庚申様に供える。オカサネは別れるとき切つてオミゴクとし持帰る。

祭日は、マメナゲが終つて初めの庚申の日から始まる。一寒い二月に初庚申をすると次は四月になるわけだが、その後は農繁期をはぶいて年間で都合のよい日を選ぶのが普通となつていて。

祭の宿は一番から順番に廻るのだが、一番の家に不幸(盜人に入られるなども含める)があった場合は、一番の家が第一日に庚申の宿をつとめる。そして次の日は自分の宿と結局一度つとめることになる。普通一番以下は一宿をすることになるが、この場合は全部で六庚申、七回の祭りをすることになる。

庚申のいわれは、一番目の宿になった家はお蚕があたるという人もいる。

庚申は作神で庚申がたべただけ余計に出来るという。

さんざたべてからもう一つオシイをたべる。たべないとオトウニンズウ(旦那など庚申様に参加する人をいう)の務めを果せないという。

本来庚申は六本手があるので、六人一組になるのだという。

夕食に寄る宿の家でごちそを作る順番制であるが、最後の家で来年

のくじを引く。くじの一番はオコウシンサマにした。

庚申の禁忌

○なべのスミをかいてはいけない。

○生ぐさいものをたべるな。

○子をこしらえてはいけない。子ができると益人の子ができる。こういって他人の家に泊ってきた。

○ヒノエの日はオヒマチをしない。

○お産して百日たないと列席しない。この場合離れて同じ家内でも遠くの方でたべる。
○庚申はシボクは苦にしないが、チボクを苦にする。(稻荷様はシボクを苦にしチボクは苦にしないという) そして若し列席すると乳の出が少なくなる(宮室)。



柏木沢字輪寺前の庚申標

これは何組があり入り組んでいる。春秋二回位、庚申の日に祭る。当番の家に集り、蕎麦など作つて、沢山たべ、強い



宝曆11年の庚申像三猿(道場)

道場の庚申様の銘文
石工大野亥右衛門
宝曆十一年辛巳十一月
吉詳日

長岡村道場組中
(道場)

食いする(新井)。

六人ずつ一組になっていた。各組に掛け、共同物の膳碗、箸一揃づつあり、順番に庚申のお祭りをした。配給の頃から中止となつて終つた(宿)。

村に三組ある。一組は六軒以上の男からなる。初庚申は寒明け後の庚申の日である。庚申ヤドは順番で経費はヤド持ちである。この日の晩ヤドに集まり、庚申様の掛け物(絵と字)を前にして、赤飯と魚で会食し話をする。この時うんと食べる程作物がどれるといって、三日前からあまり食べない者がいる。

庚申サマに地震があるとやりなおし(中の前)。

道場の庚申も昔はさかんであった。今は戦争前はホントの日、申の日(春の四月)にまつった。六人組をつくり、七、八軒で宿をまわるが十二本あつて一年の農事のことをつかさどる。庚申様はうりもとにした。庚申様はうりもとにした。

升もちをくつた。庚申様は子どもを生む人(チブタ)をいやがつたといふ。この辺では申の日には髪の毛を洗つちやいけないといふ。大宮コウチ堂ノ入にもある。

蚕神である。明治廿三年五月廿三日大きなヒヨウランがあり、蚕が飼えなくなり穴を掘つて蚕を埋め、そこにキヌガサ様を祀つた。五月廿三

キヌガサ様

日その厄にあった人は桑をもってお参りしている。

養蚕をしているときは、葬式に出た人はケガレてい

るからお祓いすることになつていて。ネンジュウバライ（シントウさんが皇太神宮様と一緒にもつくるお札、縦八寸、横一寸程のもの）で表に「神靈一年戒津物、但両親陵可愛」と記してある）をして、イワシの頭をなめてからでなければ家には入れない。このイワシの頭はお正月様に供えたイワシの頭と尾を、節分に豆をいりながら桃の二叉の枝にさして焼きながら「アラムシの口を焼く、テントムシの口をやく、ウリバイの口をやく、ズイムシの口をやく、カツクイの口をやく、クリコウサク四十二色の害虫のムシの口を焼く、トットットツ」といながらつばきをかける真似をして、トボグチにさしておいたものである（宮室）。



下新井の秋葉様（左）と衣笠様（右）

の。

四月三日には聖宮神社の神官がきておまつりをした。部落の役員（区長、議員、農事組合長、養蚕組合長など）や各種団体員が参加して、午前十時頃おまつりをはじめた。この世話は部落の当番がする。

祭典がすんでから、おみきをいただいた。むかしは大変さかんで、太々神樂をしたこともあり、養蚕道具（蚕座紙が主）をおまいりにきた人にかしつけたこともあった。蚕座紙は翌年倍にしてかえしてもらった。これは蚕が安くなつてかえさない人ができたのでやめにした。

また、各戸から米一合ずつあつめて、うち一合は聖宮へ祭典用としておさめ、のこりの一合でもちをついた。もちは当番がいた。おそなえをつくって神様に供え、それを分けて氏子にくばつた。お札もくばつた（下之前）。

明治二十三年に降雹があり、見渡す限り青い葉がなくなつた。勿論蚕にくれる桑もみなおとされてしまった。蚕は舟休みから起きたばかり、しかたなしに蚕を集めて埋め、そこに網笠様をまつたのがはじまり。明治二十年にたてられた網笠様が旧相馬村地内に本田、中の前、下の前、井戸尻と四ヶ所もある。井戸尻では毎年四月三日祭日としている（井戸尻）。

（下之前）

宿の稻荷神社の発生と興隆

宿部落の西はずれに稻荷神社の社殿がある。比較的新しい造作であるが、構造形刻等実に手のこんだ立派なものである。この神社は靈験著しく一時は參詣者が多かった。神社の宮司久保田氏はこの社の発生と密接な関係がある。久保田氏の

数代の先祖の人々、婆さんが機織りして、イザリ機で手網を織りその夫の爺さんが高崎へ売りに行った。冬の事で網を売って帰りに飯塚田園に来ると、粉雪の降っている中に大ころが一匹ふるえていたので、可愛相に思ひ、娘に入れて帰つて来た。家で出してみると、それは犬ではなくて、白い狐であった。仕方ないから神社の裏の山へ行つて放して來た。

その狐が、その家の老婆さんと仲善しになつて、何でも教えたといふ。老婆さんはノリキになつたのだがこの人は余り利口ではなく、錢勘定など出来ない人だったが、その婆さんが拌むと、狐が何でも教えてくれた

といふ。病気、盜難その他心配事があれば皆指図をしてくれた。御札は別にほしがらず、お包み程度であった。その家のての稻荷を祀つたのである。

遠くは甘楽郡、下野の足尾、勢多の花輪等から御詣りに來た。次の様

な云い伝えがある。

勢多郡の沢入だが、花輪の旅籠屋での出来事だそうだが、昔年貢の金をもつて宿つた客が、その宿屋で盜難にあひ、さて責任は宿にあるといつて、宿屋に当りちらした。宿屋では困つて、こゝの稻荷様へ来て拌んで貰つたら、何時何日に出してやるかという返事だった。その夜、宿屋の屋根の上にその金がのつていたという。そんなわけであの辺の人が最近拌みに來ていた。

勢多の方には柏木稻荷講という講社があり、先代のシントサンは春など祈禱に出むいた。昔は地頭が願かけなどした額がかゝっていた。神社の出来たのは文久年間の事という（宿）。

昔はこの村の鎮守は清水氏が権名山からうけて来た満行宮であつたが、こゝの稻荷の方が久保田氏の熱心で立派な御殿が出来たので明治十四年頃合併した。昔の稻荷様は今の社務所の辺にあった小さな御宮だった（柏木沢・宿）。

関谷塚の靈符まち

関谷塚は四班に分れている。このうち一班は北口ともい、二・四班は前口ともいっている。靈符まちは、北口と前口とに分れてやついていた。靈符まちの由来はよくわからないが、靈符さまはだるまさまであるといふ。百姓の神、運の神、厄の神などとしている。二班の三侯輝吉さんの屋敷内にはだるまのような形をした石碑が立つている。

招卦靈子

靈符草

（よこ）
安政七庚申歲
講中 三月吉祥辰

開谷塚 開塚

持卦靈部

（よこ）
安政七庚申歲
講中 三月吉祥辰

北口の靈符まちの様子を記してみよう。

二月八日の午後三時頃から準備がはじまる。靈符まちに参加するのには男衆が原則で、男のいない家では女衆が出てもよかつた。宿は家並により、世話役は隣組長がした。宿へもつて行くものは、米が一升程度、金百円、野菜若干。米は余るので、これを売つて金にかえている。

この日のごちそうは五目飯。酒も出た。御神体のようなものは別になく、掛軸もない。むかしは、十二時頃から八時頃まで靈符まちをしていたといふ。

前口でも、以前大正の末ごろまでは靈符まちをしていたが、事情があつてやめて、膳碗組にかえている。現在では、二月八日に膳碗組の決算報告をし、食会をしている（別項資料参照）。

なお、塙沢馬吉さん（九十四才でなくなつた）のはなしによると、靈符さまの石碑のあるところには、塙沢さんの先祖が埋葬されているのだといふ。この先祖は、武田信玄の部下といい、箕輪城が攻められたときに戦死したので、ここへ埋葬したものということである。塙沢さんは、

よくここへお参りにきたという。

四、呪い禁忌

雨乞

雨が降らぬと船尾へ総出で酒を持って行つて飲み、水をくんでくる（井戸尻）。

長岡の獅子が先頭にたつて船尾淹までいく。六、七月田植時期に雨が降らないでかわきが続くと、村民一同船尾淹（フニユウのたき）まで上り雨乞いをする。淹にうたれながら

シリコムフリコム フリコムフリコム

ブチワレ……と太鼓をたたいてはやす。

雨降りがないと長岡の獅子をだせやといふ。雨乞いをして降らなかつたことはない。ある年など雨乞いをすませて帰途についたがものの五分とたないうちに降りだし塔の辻にくるころほどしやぶりで、ながされるようだった。腰まで水につかって帰ってきた。道場の辻では「小幡の三ぞく雨」といって麦束三束まるくうちに降つてくるという。最近、高庄線が桃広の下にてきてから、雨のふり方がかわつて夕立雲が南に流れるようになつた（道場）。

雨の降らぬ年があつて、有志の人達が、船尾の淹蓋へとび込んで拝んだ。帰つても雨の気がなかつたが、煙草屋へ入つて皆して酒を飲んでいたら大夕立がして来た（大正）。又、或る時は先親僧正が雨乞のゴマを焚いて拝んだ事があつた。テンチャしたら大雨がふつて来て、一軒家がつぶれた事がある。

「ひとまるやかきのもとまできたれども

あかしといえはすでにひとまる」

ととなえながら七十七才喜寿の祝の火ふきだけで吹くと火事が消え去るといふ（笹熊）。

秋葉様はほとんど全村にわたつて火防の神として信仰されている。

アラシ・風除け

十五夜とは別に四月のツムジ（埃りが立つという意味）の時にニワの真中に鎌を立てる（井戸尻）。

あさまつ（あさまの方から吹いてくる風）がふくと鎌をたてる。あさまつを立てるときと女うどうでまくりはたまげることねえ。といふ、つよい風だ

が長いことはなく、しゅうねん深くないことをいう（笹熊）。

鎌を立てる

大きな風が吹いた時鎌を棹の先につけて立てた（九・一〇区）。

その他の呪

○コレラの流行した時、柿や李などを打おとし、又鉄砲をドン／＼打つてまわつた。これは悪魔を退散させるためだつた。

○猫が死ぬと死体を三本辻へもつていて埋けた。

○忌中祓の時もサンダラフ（灰）に御祓いとを立て、三本辻へもつていつた。神棚にひいた筆ももつて行った。

○八丁注連は七月二十四日に村の四方へ出して立てた。昔は寺で大般若講をやつた後にしたものである。

○死にそうな人があると、井戸をのぞきこんで大声でその人の名をよんだ。長い間病んでいて死ねない人は、寺からお土砂というものを貰つて来てのませると、まもなく死んだ（六・七区）。

○耳病の祈願 東神社へ底抜け杓子が上られていた。これは耳のわるい人が願かけして、一つ借りて、後で二つなすようになつてゐた。

流れかんじょう 明治の頃、新保の御堀で、水の傍に竹を立てよ、赤い布をはり、小杓子を刷てあった。産婦の死んだ時、早く浮ばれるようとて、その杓子で赤い布に水をかけた。冬至にトウナスをたべると中氣にならない。土用のうしの日は魚などたべる。油気が必要なのである。また土用の汗をひくようにと油味噌もたべる。

三杯汁は馬鹿がすうといふ。

オヨーロコの三切はつけるものではない。バクチはミキリといふ。

年越の夜の豆は初雷にたべる（南新井）。

むかでやへびのまじない。

家の中に長物が入らないように、いもの葉にたまつた水で墨をすり、その墨で紙に「ちはやぶる、うづき八日は吉日よかみ、ながむしのございばいかな」と書いて、トボロにさかさに貼ると、長虫が家の中に入らない（雀籠）。

民間療法

○とびひができるたら其の上に水という字を墨で書くとなおる。

○とげをぬくにはいろは歌のトケの二字をぬき三度唱てふくとしぜんにぬける。

○めかごができるたらふるいを戸井に半分みせ、なおればぜんぶみせる。

○こうでがおきたときは、男子は女の末子に、女子は男の末子にもめん糸かみこ糸でしばつてもらうとなおる。そのときアビラウンケンソワカと唱えごとをいう。

○いぼができるたらやくしやま（薬師様）のお弟子でいぼをこする。なれば、一つつくつてふやしてやる。

○やけどはあぶらをぬる一「ひもどしのまじない」という。
○歯が抜けたら、下の歯は便所の屋根にかけて。便所神様がはえますように」と上の歯がぬけたらがしの下にかけて。かまがみつさま、歯

がはえますように」という。

○つめは夜きっとはいけない、世をつめるという。足爪は九日、手爪は六日、七草のせりをつけた水にひたして爪をきる。

○七夕の朝ねぶたでめをこするためがよくみえる。

○寿命をのばすには日の出前に七髪の毛をあらう。

○中風になつたら、もうそろ竹の露をあたまにかける。あたまのいたいのがなおる、七か日の朝十時前がいい。

○かっけになれば、朝露をふむ。

○じんぞう病はどうもろこしのけを焼いてせんじてのめ。

○あつけ（日しあ病）のときは胡瓜のしんをもんでこめかみのところかひたいにつける。又すげ笠をかぶつてひしゃくで三回かけるとなおる。

○肥がせになつたら米ぬかをぬる。そのこぬかは、あぶらの入つた茶碗の上に半紙をかぶせ、それをもしてやしたこぬかをつかうとなおる。また下水の中にひだすとなおる（雀籠）。

禁忌

ゴマは目が悪くなるから作れない。理由不明。しかし、阿弥陀さまはゴマが好きなので供えててもよい。

一貯倉は正月に餅をつかない。キユウリも作れない（戸井尻）。

忌み田

牛さき田、昔、暴君があつて、牛に人を殺させたとか、牛の頭をさいたとかいって、嫌がられた土地があり、柳沢寺に寄附されていたが、後に柳沢寺で長岡の人に売った。

十区のある田 この田も、縁起をいって嫌われた事があったが、偶然牛の鼻取が落雷にあって死んだ事があり、又人がそんな話をした事がある（九・一〇区）。

怪奇兆占

岩倉屋敷

昔罪人を貰めたといわれる代官所跡に岩倉屋敷というところがある。オカタの家などともよんでる。ここに狐がいて、狐の子が夜出でては妻を荒らしたという。

オトウカの食物

高橋氏の先祖の中に病氣でねていたおばあさんがあった。その人のタモトに動物の毛があった。その毛を持って星寝をしていたらグレたこと言い出し、それから美味いものを食べても太らない。みんなそのけものの腹へ入ったのだろうか。おばあさんの腹に入らなかつたという。それからやせて死んでしまつた。

オトウカ山

オトウカ山と呼んでいるところがある。オトウカにつかれたのでその山の穴へ連れていった。サツマイモの焼いたのを持つて「キイにもくれる」といったので「そんなうめえもんくれるか」と言つたら穴の前で倒れてしまつた。それからオトウカにつかれたのがなつた。

オトウカの行列

上の堤の所でドウシングボウを中心にして坊さんがぞろ／＼いるのを見た人がある。

柏木にもツカノコシにオトウカがいた。

孤つき

孤がついた時は、山子田の小学校の裏のチャヌキの不動で、背中に大という字を書くとおちた。

昔はよく孤が人にのつた。中にはノドウカ（野狐）がついて、堤で餌などを食つた人がいた（九・一〇区）。

馬のたゝる話

大正の頃、ある家、人少になり、馬に食物もろくにやらず、馬肥も出してやらなかつた。しまいには馬糞の踏み草と糞が高くなつて土間と平らになつてしまつた。そして遂に馬が死んだ。オカミサンが病氣になつたので、南無妙法蓮華經の人みでもらつたら、その人が拌んだところ、馬が出て来て、『俺を干殺しにしたらだ。ゾウズをもつてこい。腹がへつてたまらない』といふ。ゾウズを持つていつたらそのオカミサンが、一バケツも飲んでまもなく死んだという。

オサキ家

オサキのいた家というのが、今絶えた。この家は昔、呉服や生糸などの商をし、横浜へもつて行つて一代で身代を作つた。おそらくそのためにオサキがいるという噂が出たのであろうが、その後、幸運に見放されたか、不運づきで、外で病氣になつて帰り、家の入り口で死んだり、番頭に持ち逃げされたりして亡びてしまつた。

その後、この屋敷はうまく立たず、士官学校の時、こゝで工場を作つて菓子を売つたが、この人も失敗した。又其の後、進駐軍の来ていた頃はパンパン屋を經營した人があり、小さな囲い座敷など作つたがこの人は失敗して今は荒地になつてゐる（九・一〇区）。桃井の某氏の家にオサキがいた。お鉢をたたくとオサキが集つてきたという（井戸尻）。

寮のはけもの

昔、寮に淨西坊といつた坊主がいた時、夜々ベケモノが出た。『メミフ、ハツクリ、ハガフタツ、オツカナイカ淨西坊』といつた。朝になつて調べたら、この坊主が古下駄を集めたので、下駄のオバケが出たのだ

狐のタタリ

これは最近の話、学校の上の午王頭川の石河原に白い狐が出て蟹をとつた。狐だ、ところどいう事になり、狐籠が追出して、学校の上の蛇が見の森に逃げたのを追つて、断崖を上るところを打つた。

この打つた人の奥さんがなくなり、教えた人のお母さんが病気になつた。

寝床にて油揚をはしがり、とび上つたりなどした。

高崎の靈友会の親方をたのんでみてもらつた処、『おれはトーカ山の稻荷の眷族だが、俺の女房を殺したからだ』といった。

人玉

シンシ屋の主人、その妻の弟が東京へついていたが、夏の夕方八時頃、南の方（学校の方）から赤い火の玉が飛んで来て後の方で消えるのを見た。次の日、弟の死を知つたといふ。

人玉は、余り高くなく、人家の高さより一寸高く飛んでいた。赤く丸い尾を曳き、相当早かつたという（宿）。

縁いたち

縁いたちに切られるという事があった。ひよと転んだりすると、突然足のスネなどに大きなキズが出来て、これは不思議に血が出なかつた。

一例、北原の通りで、バスが通つた。通行中の子供がどううめぐりして倒れた。バスの西側をオートバイが通り、その間に空氣の変動ができて、間の子供の足が切れたらしい。血が出なかつたから、縁いたちだとわかった。車掌運転手が騒いで医者へつれていった。これは過失の事故でないので、その様に話がついた（九・一〇区二ヶ）。

予兆 占い

日の出、神社、山登り、蛇の夢は良い。

井戸に水なく、川に橋がない夢は悪いことがある。

カラスが鳴いた時尾の方向に悪いことがある。

火事の前にネズミがいなくなる。

アリのオトクリ（行列して引する）があると雨が降る。

その年の竹が前年の竹より伸びると大雨になる。

嫁の行列同志が行交う悪い。嫁の行列と葬式の行列が行交うことは

嫁が遊びに出ると雨

夜爪は世を詰めるとして夜爪を切るのを嫌う。

夕方の虹は陽照り。

夕日が北にまわると雨が降る。

船尾の演壇に朝霧が立つと夕立がある。

ニワトリが朝早く刻を告げると天氣。

雀が早く騒ぐと雨。

蜘蛛がはつきり見えると天氣（井戸尻）。

（俗信補足）

○七夕の朝、ねむの葉で目をこすると早起きができるという。

○うえつけをすませたあと苗ばいに入れると、指がくさるという。だから、苗ばいは自分より手前においておくという。

○自分の行く方向がわからないときには、一本辻に立つて様をたてて、棒の倒れた方へ進む。

○めっぽ（めかしいご）になったときは、井戸にふるいを半分みせて、な

おつたら全部みせるという。

○うるしにかけたときは、あぶらけを顔につけて、生でたべるといいと

いう。

○しづれの場合には、人さし指につけをつけて、あご、はな、ひたいの順になれる。

○たぬきとかきつねにはやかされるおそれがあるときには、つばでまゆげをしめしておく。

○夜つめと竹ぼうきをまどの下でもすときちがいになるという。

○からすのなき声がわるいと親戚の人がなくなる（山子田）。

○山鳥は御祝儀にはつかわない。これは、山鳥が山にいるときに夫婦別々にいるので、これをたべると夫婦わかれをするといつて忌む。

○きじやうさぎは、祝儀、不祝儀の両方につかう。

○からすがぎやあぎやあいうのを騒動がらすといふ。これがなくと騒動がおこるといふ。がつごう、がつごうとしつぼをもちあげてなく場合に

は、からすの尾のむいた方角になにか縁起のわるいことがあるといふ。

○けろう（渡り鳥、今はいなくなつた）がなくと雨がふるという。子供がけろうのなきまねをするとき雨が降るぞと叱つた。

○かえるがなくと雨がある。

○ちようちようが家中へまいこむと雨がふるという。

○蛇が木にのると雨がふるという。

○くもが朝けに下ると金ぐもといふ。十時すぎに下るとお客様ぐもといふ。

○夜下るとどろぼうぐもといって、たたきつぶせといった。

○へびの夢をみると金が入るといふ。

○ミミズがなくといふ天気になるといふ。

○きりぎりすは、かまのくわあけまでに遅せといった。

○せみは盆時分になると、仏様がくるからとのう。ちようとかせみは人間が生まれかわってきたのだから、盆前にはころすなどいつた

（閑谷塚）。

○左膳のことはたつ膳といふ。死んだもの膽として忌んだ。

○釜をたたくとおさきがくるといって忌んだ。おさきが来て身上をひいて行くといふ。

○赤飯に汁（おさゆ）をかけてたべると、死んで行くときに雪がふると

いう。

○おえびすさまにしんせたものをたべると、縁遠くなるといふ。誰かが

先にたべてからやればいいといふ。まだ世に出ない人は食べてはいけないといわれている。

○小正月のおかゆをあいてたべると、苗木の代だしのとき風がふくいう。

○ねでて食べると牛になるといふ。

○辰の日に田植をすると、その穂が葬式のときのたつがしら（の糊）になるといふ。おかげをまくときにも同様のこと（桃泉）。

○夕方西の空があければ翌日は天気がよい。前橋と高崎の電気がまたときをすれば、翌日風がふたり、天気になるといふ。電気がよく見えなければ翌日は雨といふ。

○月がかさをなぶつているとき、その中に星がみえなければすぐ雨がふるといふ。星が一つあれば一日後に雨がふるといふ。二つあれば二日後に雨がふるといふ。かさの中の星数が、雨のふる日の数を示すといふ。

○えごの花をふんで（花が散つてから）豆をまけといふ（広馬場）。

○辰の日と犬の日には田植をしてはいけない。

○仏事のだんごは犬にくれるといふ伝承があるが、犬の日に田植をする

と、犬にくれるだんごの米になるといふ。

○さんりんぼうの日にいぼをついてはならぬ（これは垣根をゆうときのなわのむすび方のこと）。三講りを亡ぼすといふ

で、近所の人からいやがられる。また、さんりんぼうにかわりものをす

ると近所の人からいやがられた。とくに、この日、もわなどをついて近所にくばると、その家の身上をつぶすといふことができられた。

○こうでの時は、手首を、男の場合は女に、女の場合は男に糸でしばつてもええよ。

○ちん毛はおぶすな様が子供が倒れたときにひっぱっておこしててくれる

というので、のこしておいた。

○子供がすこしのけがをしたときには、そこを、ちんぱいばいぶーといつてふいてやった。

○子供がこぶをこしらえたときには、そこをなせて、××(その子の名前をいう)のこぶにならねで、からすのこぶになれといった。

○雷様がなつたときに、遠くの桑原、遠くの桑原といえばおちないといふ。

○雷がおちたときには、ためをかけると消えるという。

○あつけになつたときには、すげ笠をかぶせて水をひしやくでかけ、笠から水がもれればなおるといつた。

○鼻血が出たときはぶんのくどをたたいて、ちん毛をひつぱつてもらひ。

○やん目のときは倉海戸の阿弥陀様にお願生をかけられなおるという。

○子供のちんぽがはれるのは、みみずに小便をかけたためだからといつて、みみずをみつけてきて、洗ってやればよいという。

○歯が痛いときは、桑の根に針をさせばよい。

○つばめが低くとぶと雨があるという。

○冬の天候を見る場合には、武尊山に雲がかかっているとその日は風がふくという。

○浅間山に朝げ十時までに雲がかかると夕立がするという。

○小幡の三束雨という。これは、小幡にたつた夕立は必ずくるという。

○麦を三束もまるくうちにやってくるといつた(長岡)。

○むかしから、親の意見とそなびの花は、千に一つのむだはないといわれている。なすびがかかるようになると、秋が早くなって、不作になるといつた(花が黄色になって実がならない)。

○蜂のき下に巣をつくるとき台風がある。

○くもが高いところに巣をつくるときは台風はないといつた、ひくつく

るときは台風があるという。

○山鳩は夕方の気象をよくきかせてくれるといつた。山鳩がはげしくなくと雨が降ってくるといつた。山仕事をしている人も、仕事を早くさりあげてくるといつた。(関谷塚)

△資料3▽ 南無地蔵尊

下区子供一同

○帰命頂礼一つとや人に知られぬ妻を持ち袖に涙を・・・ 包むつらさよ・・・

二つとや一葉の松を頬むとも一道かよいは・・・ 男たのまじ・・・

三つとや見る程恋地が止みもせ見るほど恋地が・・・ 益るつらさよ・・・

四つとや四間の座敷の油火が消え明りつ・・・ 男たのまじ・・・

五つとや何時か今かと待つれども今宵の月は・・・ 西へかたむく・・・

六つとや無理矢理結びし女つさよ秋風たなねば・・・ 結ぶつらさよ・・・

七つとや何がみくらの身も残し只の一歳の・・・ 妻いて恋しさ・・・

八つとや弥生の月の出づる心静かに・・・ 待ち給うとよ・・・

九つとや此處で逢わば極楽のみの御前で・・・ しかと逢うべし・・・

十つとや床屋で・へあらたさよ何時か世に出でて・・・ 君に手をぞえ・・・

○帰命頂礼此のお茶は我等の新茶か古茶か宇治の茶か旅の疲れで飲み知れぬ宿に

帰りて物語りお茶の御恩は・・・ 富士の山とよ・・・

○帰命頂礼此の酒は新酒か古酒か牡丹酒か旅の疲れで飲み知れぬ宿に帰りて物語り酒の御恩は・・・ 富士の山とよ・・・

○帰命頂礼七つ子が高天ヶ原にて置を刈る置を刈りては何にする置を刈りしはみのにするみのじやあるまい笠にする笠はどこ笠都笠置ではやる三度第三度の笠を何にする笠都地蔵が・・・

○帰命頂礼十七が今年始めて田を植えて雨も其の田の出来の良さが七尺穂が五尺何たら駒にも八穂一駒八穂で八石とれるなら俺のお宿に食いつつ貯み番には誰がなる一に小金二につばめ三にうぐいす・・・

二につばめ三にうぐいす・・・ ほとときすよよ・・・

○帰命頂礼此の寺は七里大門七曲り曲りに門がある門の番には誰がなる一に小金

子が小石集めて塔を組む一輪組んで父の為一輪組んで母の為三輪組んだる

其の時は兄や弟我が身の為ほど邪険なものはないつまでもくとてしゃくて組んだ
る塔を・・

みならずすとよ・・

カヒコハジユウマソロコバセ

○帰命頂礼櫻名山三国一のお山なり一夜に出来たる富士の山野の水笠に清くして
するが峰にさしかかる天神峠で眺むれば掛岩やづら岩筆も及ばぬすずり

○七福神

キメヨウチヨウレイメギリキテ

岩其の他名所は數知れぬ峯にはお地蔵が・・おるらあるしとよ・・
○帰命頂礼天笠の地蔵はさつが天降る何が所願で天降る何も所願はなければも余
り此の世が邪険さに念仏すすめに・・天降るとよ・・

キサラギヤマノクヌスキヲ
フネニウタセウタセテイマオロス
ホンノホバシラオシタチテ
アヤニシキノホラアゲテ

（金仏和讃）

○チャボメワサン

イザノリタマヘカミガミヨ
イチニダイコニニホテー

キミヨウチヨウレイメギリキテ

サンニビンヤソンジローリン
イツツイブセノワカエビス

キミヨウチヨウレイメギリキテ

ムツツホクロクノリタマヘ
ナナツナニハノビタイテン

オチヤノチソウニアブカリテ

ホウライサンヲカザリオキ
ビシヤモソルレンガカヂワトリ

オチヤノチソニアブカリテ

ホクロタジンガロツモチテ
コノネイブトナガムレバ

オチヤノオレインニオコウ

コレノニワニツキタマ
コノフネツケバムラハンドヨウ

ヤドニカヘツテモノガタリ
キミヨウチヨウレイメギリキテ
オチヤノチソニアブカリテ
シンチャカコチヤカウヂノチヤカ
タビノツカレデノミジレス
ヤドニカヘツテモノガタリ

マシテオイヘハナホハンドヨウ
ホクロタジンガロツモチテ
コレノニワニツキタマ
コノフネツケバムラハンドヨウ

カイコカイメノコダマセラ
タマノテハコニレオイテ
コレノオイヘサシアゲテ
ウマノヒトリノヒネンズレバ

○タヤウワサン

キミヨウチヨウレイメギリキテ

オニワヒレングヲナガムレバ
ヒラキシレングガ十二本
ツボミシレングガ十二本

二十四本ノソノナカデ

ヒラキシレングハチリモセデ

ツボミシレンゲガチリカカル

ヤハリワガコモアノゴトクタ

モハヤナクマイナグクマイ

サアサアカヘリテチラマイリ

ナムアミダブツ

○コウジンサマ

キミヨウチヨウライアリガタヤ

カナソイフシユゴスルコウジンハ

左ノオントニユミワセチ

右ノオントニヤワツリテ

アタマノハライトニヨヤニテ

オイヘハハンドヨトイリタマウ

ソモソモイセノオンガミヨ

ナイタウデンガ八マツシヤ

ゲタウノオミヤガ四十マシヤ

リヨウダリヨウデンアワセテ

百二十一シヤノオタチアイ

天ニハセノシメラハリ

チニハアラゴモハシラカセ

十二ノミコガアツマリテ

ヌリノタイコヤフイツヅミ

ダイダイカグラヤコカグラヤ

カミツイサメルチョカグラ

ココロダニマコトノミチヲマモルナラ

イノラズトテモカミハマモラン

○ニヤサマ

キミヨウチヨウライアリガタヤ

二十二ノヤマチマツ人ハ

ヒミズアラタメショウジンシ

ココロニアタシモタズシテ

シンジンケンゴニミラモチテ

ボサツフハイシタマフベシ

ミヨウレンボツノゴガンニハ

アマタノ女人ノ身ガハリニ

チノイケジゴタニオチントキ

スデニイラントシタマハバ

アラアリガタヤフシギヤナ

イケヨリレンガアラハレテ

シウントナビクミホトケガ

ソノママレンゲニナシタマウ

左右ノオントニミドリゴツ

イダキアゲサセタマイツツ

右ノオントラカホニアテ

女人ラスクバンホウベント

カシジタマヘテアリガタヤ

左ノオントニマネキツツ

ワレヲネンズルトモガラハ

ゲンジミライワタスケベシ

サテマタゲンジノゴガシニハ

女人ノミノウヘノコリナク

血シヤタケツカイ血ノミシヤ

ナガ血シラ血ノヤマヒニ

クリカシガラマシマシテ

タチマチカイキエサスペシ

子ナキ女人ニ子ラサブケ

カイタイシタル女人ニハ

サンゼン、サンゴノダイナンラ

アンザンニシテトラスベシ

スヘ音ウキユウトマモルベシ

カルヨニウマレアフミノ

アナウヤト

オモハデタノメ

トコエヒトコエ

アンザンシゴノオンガミヨ

チヨマンサイニイタルマデ

マセラセタマウテアリガタヤ

ナニハヅノナントサクヤ

コノハナフユゴモリ

イマハハルウメトサタヤコノハナ

○アワシマサマ

キミウチヨウライアリガタヤ

カタニアハシマダイミヨウジン

オトシハ二十五サイナリ

ツキノ三日ヤ十三日ガゴエン日

ワレラソノ日ニギングレバ

イカナルチカタノヤマヒニテ

オイモワリキモロトゼニ

スタイルトンゴセイガン

チ、トハ、トノチノミチノ

チノミチタノムチノミチノカミサマ

○サンタイサマ

キミウチヨウライアリガタヤ

サンタイサマトモウセシハ

女人一ダイマモリガミ

ワケテシソジントル人ハ

ブクトクジミヨウサズケベシ

カイタイシタル女人ニハ

サンニムカヒシソトキハ

シンリキヨメテ手ヲアハセ

五シキノミスガタアラハレテ

タチマチアンザンエサスベシ

ウマレキタルオンコニハ

ウジョクメ、ワサズケベシ

アンザンシゴノオンガミヨ

チヨマンサイニイタルマデ

マモラセタマウテアリガタヤ

ナニハヅノナントサクヤ

コノハナフユゴモリ

イマハハルウメトサタヤコノハナ

○イワフネサマ

キミコウチヨウライシモツケノ

イワフネデゾウノメスフネハ

フネハシロカネロハコガネ

キソノホハシラオシタテテ

アヤヤニシキノホツアゲテ

キンランドンスノマカラハリ

デシンオヤマコノフネニ

ノセテヤリタイゴクラクヘ

ゴクラクヂヨウドノマンナカニ

天カラジヤクロノハナガフル

コノハナテニトリミタマヘハ

ハナジヤゴザラスミナロクジ

ナムアミダブツ

○エビスマ

キミヨウチヨウライエビスマ

イワノデバナヘコシツカケ

七クノタケヲテニトリテ

ヤンシャノイトニギジンノハリ

メデタクタイラツリアゲテ

オチヤツヒカヘテワラヒカホ

「南無地藏尊」

北群馬郡棲東村広馬場字下之面所有

「念佛和讃集」

新井 小山房 吉氏 所藏

言

語

伝

承

伝説・口碑

常将神社

千葉左衛門尉常将を祀っている。常将には子供がなく、榛名山に願をかけたところ、望みどおりに子供が生れた。子どもを教育するために山に登ったという。ところが天狗がさらっていなくなった。いくら探しでも、子どもが見当らない。そこで若を返せといふわけで山の坊さんに戦をしかけた。この戦で寺は燃えしまったが、それに関して陣をしいたところを「陣場」といい、五万騎の兵がおし寄せたので「五万騎橋」とい、ゴマギの材料をとったので「ゴマギ山」という。

また戦のとき火をかけたら「あいみつわかはここにあり」と雲の上から姿を現わし、消えていた子どもがでてきただので申し訳けないと常将の奥方は自害をしたという。そのため「ジガイダ」という所があり、奥方は弁天様に祀られている。その子あいみつわかは、黒髪山に祀られた。もと寺のあった所は「堂の入り」という。「うえのたいら」というところは、この地を高野山にしようというわけであったが、百谷あれば高野山になるのにどう數えても九十九谷しかなかつた。また地定めもあちこちしたがどうしても九十九谷しかない。百谷あると柳沢山は高野山になつたのだという（柳沢）。

今、常将神社に祀られている千葉左衛門尉常将という武将が、子どもも船尾山

がないので、船尾のお寺にお祈りして、二十一日間断食して、申し子に「相馬」という若君が生まれた。この子が七才の時、寺によこしたら、十月の紅葉見の会の時に、天から黒雲がでて相馬君を包んでとび去ってしまった。このため

常将は寺と問題を起して、遂に戦争になりました。寺を焼いてしまった。

相満若君を祀つたのが相馬山である（新井）。

ジゲ工沢（自害沢）



足
の
様
土
王
仁
寺
相
満
若
君
が
相
馬
山
で
あ
る
(新
井)

柳沢(船尾山)の上から出土された土器の足の様子。常将が不入を焼いた。その時の、武将がジゲエをしたのでこの名がある。下縁のとのさまはこの子を木戸皆戸にあげました。その中にジゲエした人の顔がものすごい面相でうつったので、逃げがりその中にジゲエした人の顔がものすごい面相でうつったので、逃げかえり、奥方は引間にうつした。

千葉の妙見様をまつて供養した。引間は、陣場から引いたので引間

という。ジゲエ沢にはいつも水がないが、ジゲエした場所のやしき（堂の入の奥）の大門の石垣の下からはいつも水がこんこんと湧きだし、四五〇万石もたまるという（道場）。

相満

千葉の城主常持は、子どもがないので、水沢へ千日の願をかけたところ、観音様があらわれて、「お前達夫婦は前生においてかたき同志の蛇体であつたから子どもはできない。しかし、たっての願いだから、子はさするが、七才迄の命と思え」といわれた。

そして相満「若」という子をさづけた。相満が五才の時、頭がよすぎるもので、本沢寺へ上げて、一人前に仕上げようとした。七才迄仕こんだところ、はからずもその年の春、いつとはなしに、姿見えずになってしまった。住職はあわてて、千葉のところへ使者をだしてたずねだ。千葉はもってのはかということで寺へ交渉した。住職の方は慰したわけでないから返答もできず、それではというので、戦争をしかけたが、なかなか寺がおちなかつたので、万止むを得ず、焼き打ちにした。するとその燃え上がる焰の上の雲の中に相満の姿があらわれた。それを馬上でみて、昔みた夢のお告げを思いおこし、山子田の蛇が見が原の地蔵様の半道（約一千メートル）上の五万騎といふところへ、軍勢を五万騎集めた。当時の住職はよいよだめだというので、弓をもち、矢を射て、この矢のおちたところに觀音様に行つてもらいたいといった。矢のいぬかれたところが塗原である。敗戦の帰りだけに自害したのが自害沢である。

又、カゴトシの古い寺は柳沢寺の本家寺で東光寺であるという（宿）。

ピクニ田

むかし美しい尼僧が倉海戸の某家をおとすれ一夜の宿を乞うた。その家の主人は乞われるままにその尼僧を泊めた。ところが尼僧は意外にも小判を所持しており、そのことをその家の主人がうかがい知った。その上尼僧の美しさにも心をうばわれた主人は、いかにして自分の望みを果

そうかと心を砕いた末、まず腕力にうつたえて尼僧を犯した。しかし操をうばわれた尼僧はそのはずかしめを自害によって雪いだ。一方望みをとげた主人は得意となり、うばった金で土地を手に入れた。その土地がビクニ田であり、その後、この田にまつわる凶事が次々におこった。この田を耕作するものも死んでしまうということになり、この田の所有権も転々とした（倉海戸）。

五輪様

桃井城址にある五輪の塔（俗に五輪様という）はオコリに靈験があるといふ。

薬師の手

宮室の宮昌寺の池に、水沢寺を千葉三郎が焼いた時に、薬師様の手が飛んで来たといふ。

字輪寺

字輪寺は水沢寺をわけてもらって来たのだといふ。

長者

山子田字神保の天神山は、柳沢寺の住職が桃教寺の隠居寺へ移ると、金をたくさんもつて埋めたといふ。この山は桃教寺の裏にあり、金九升五合埋めてあるといふ。また、この地に「朝日さす、夕日かがやく雀のみ宿、黄千枚、数千枚」という歌が伝えられている。

牛ざき畑

倉海戸に牛ざき畑といつてつくり手のない畑がある。ここは昔、御殿女中が殿様にお膳を運んだとき、中に針が入っていたので、殿様は怒つて、その女中を牛にまたがらせ、八ツ裂きにしてしまった。その場所はたたりがあるといふで、続けて耕作する人がなく、次々と耕作者が変つていき、作る人がなくなつていった（倉海戸）。

御堀

御堀は今、湯浅氏が住んでいるが、ここは古く桃井氏の古跡であったといふ。周囲をめぐる堀跡が歴然としている。



桃井幡摩
守直常の孫
かに尚義と

いう人がおり、この人が桃教寺殿という法命をもつて、桃教寺は現在山子田に残つ

ている。
尚義の孫に当る貞職が湯浅氏を名乗つて以後、この地に住みついたと
いう（新保）。

苗木

榛東は苗木の産地だが、その起源は遠い。ずっと昔から苗木はこの地方で仕立てられていた。

昔吉井の殿様がこの地方を治めていた頃にも、杉苗を一万本差上げたことがある。

吉井様の御山作りに使用したのである。その時は御礼に三ツ組の盃や

印籠などをいただいた。山林は昔から広大で甲府から奥に広い山があつた。又、中島の松といって大きな松があつて有名だった。（小松の倉よ

り大きかった。柳沢寺からうしろはみな御林で後に官林になつた。家は一軒もなかつた。村の方も南は宮室、笛熊の方まで山があり、東は大籠、八幡山、不動山へつづき、北は小倉まで山つづきだった（新保）。

大木 礎石 染谷川

一番大きい木は、山子田の常侍神社の杉で一丈六尺まつった。
けやきは丈一尺ぐらゐのがあつた。お堀の三の鳥居の杉も大木であつた。これは湯浅寿男氏のものであつた。

中前のにある。天神様の硯石という。高さ四尺、広さ二疊敷などの石で中央の小さな凹みに水がたまつていてかれないので、この水をつければよいがとれるといふ。又眼を洗うと眼病がたちどころになおるといふ。

染谷川の左岸の堤上にある。

八之海道にある。九・九平方メートルばかりの湿地。天明の噴火の時（説尾山の火災の時）かわらの堂からアミダ様が流れこんだ。それで池に足を入れると念仏のようにあぶく。水が常にあり、安政の大干にも水は絶えなかつた。いつのころか「雨が三年、干が四年」という

土地のやすかつた話

明治のはじめ、徳川の終りは、土地はおそらくやすかつた。その話をいくつか。

三角山は今、タネ下の大尽のものだが、そのずっと前、甲といふ人が質において、乙といふ人がその精算のとき、一文余分にまちがつて計算してとつたので、そのおちどで四、五反の山をおしつけて、乙にわたしてしまった。高橋某さんは蛇が見の山を取り手がないので貰つた。今はその山何町歩という山林である。
カヤバのヤキバは欲しい人がないので別の高橋某さんが貰つたといふ。

七年の困窮の時はもらい水の人人が列をなしたという。田植の晩には苗枯れがするから足は洗わないという。

めくらどじょう

山子田の倉戸の川にめくらどじょうがいるといいういつたえがある。これはこの近くにびくに田があるためという（山子田）。

片目うなぎ
宮室、宮昌寺の門前に弁天池がある。その中にすんでる魚はみな片目であるという。明治の末頃、池さらいの時近隣の者が、うなぎを二三四捕獲してよろこんで持ちかえったところ、それがみな片目だったでおどろき、又ふしげに思つて、何かの祟りがあつてはと、との池にはなしたという。今はかれはてている。弁天の祠あり。

庚申の井戸

長岡の道場の沢の測壁にある。ぞくに庚申塚という所なのでこうよばれる。天明の浅間焼けのあと、どの井戸も水がたえたが、この井戸（泉）だけはかれなかつた。

庚申様の木

上野の庚申様のところに大きな木がある。この木を伐ろうとして手をかけたら間もなく死んでしまつた。一度ばかりそんなことがあつてから

神天山
誰もその木に手をつけなくなり、庚申様の木とよんでいる（井戸尻）。

ここには金が埋めてあるという。

朝日さす、夕日かがやく雀の宮取り。ということわざがある。昔五郎兵衛という人が掘つた事があるといふ。堀があつてたたくと音がする（新保）。

行人塚

小林祐吉氏の先祖に禪海という人があり、穴をほって中に入り、二十日間鍊をたたいて入定したといふ。この塚は今も残つてゐる（道場）。

オコリ山
小林氏の先祖、生きたまゝ穴に入り鉢をたたいて七日たつと息をえたといふ（新保）。

堂山

新井に堂山というところがある。ここはむかし新田義重の子孫今井五郎の住んでいたところといふ。その居住の跡が堂となり、その跡を今堂山といふ。

今井五郎の滅後、山子田に延命地蔵を移しそれが今興徳寺の本尊になつてゐる。ここはむかし、新井の鬼門除となつてゐた（今井）。

広馬場

この地名は、むかし桃井氏の馬場であつたために起つたといふ。

物見塚

戦国の頃、信玄勝負の軍が碓氷峠に来たのを遠めがねで見、箕輪城で白米を流した。

武田軍は、白岩の觀音に勝てば銅の觀音様を鑄てやると、白岩の人を

だましてスパイをつかつた。箕輪の人はだから白岩の人を嫌つたものである（新保）。

物見塚見2

昔、箕輪城を武田信玄が攻めた時、相馬ヶ原の西にある物見塚から城をみていたので、そこを物見塚と呼ぶようになった。そのとき、城の用水を引きたわけなのに堀が白く光つて見えた。水がまだ堀にあるとは不思議と思って見てゐるうちに、鳥の群がその中におりた。これをみて信玄は敵が米を堀にまいて水に見せたのだといふことがわかり、攻撃して落城せしめた（井戸尻）。

井戸跡

井戸尻に郷藏跡とよばれるところがある。昔殿様の米を積む倉のあつたところだといふ（井戸尻）。

弘法大師

弘法大師は船尾の流にかかる、その流れを南に流してやろうと考えて一心に拝んだ。そうすると拝んでいるうちは南へ流れたが、拝みがすむと北流して、どうでも南の方へ水を引けなかった。

又、弘法大師は靈場をけって九十九の寺を建てようとして一心に拝し、幣束を流へ投入したら木の枝がさかさに幣束をはじいたので流へ入らず、九十九の寺が建たず、高野山へいったという（宿）。

とんび石

むかし富士山が噴火したときにとんできた石という。むかしはあたり一面かや原であつてなにもなく、鳥のとまるところもなかつた。そこで、とんびがこの石をみつけてとまって、ビーヒヨロ、ビーヒヨロとなっていたといふ（桃泉、岩田好治氏）。

地名の由来

○薺石（トンビイシ） 大きい石があり、薺が虱をはたいていたというのでこの名がある。

○水場沢 不明、桃泉開墾に上るところ。

○幕岩 形が幕をひいた様な岩なのでいう。

○堂の入 柳沢寺の屋敷跡といふ。

○ウツボ沢 不明、伝説があつた。

○ガラメキ 不明。

○笹平（サ、ビラ） 十二様があり、開墾者の鎮守様となつた。

○東山 武尊とお天狗が祀つてあつた。大々神業などした。後常磐神社に合併した。

○井戸尻 伊与久徳太郎氏の下に井戸があつて、水が下の堤に出ている。この下の部落なので井戸尻といふ。

○十日市 大字山子田字十日市、不動山城のあつたころ市がたつた場所か、城跡のすぐ西の土地をいう。この付近からはカナクソもでる。なお

倉屋敷という地名も近くにある。

○閑の口 不動山城の用水をここから取入れたのだろうといわれている（倉海戸）。

○山子田の七海戸（谷戸） 倉海戸、上倉海戸、山ノ海戸、乙倉海戸、島海戸、葦海戸、七郎海戸。

桃井庄十三力村

新井、山子田、長岡、小倉、有馬、池端、塗原、陣場、下の宮（南下の下）（後不明）

双つ岳騒動

伊香保と外の十三カ村で双つ岳の所有を争つた事があつて騒動になつた。奉行所で対決する事になつた。お奉行様が竹を一本もつて出て、皆が頭を下げて立つて投げた。明治村に武藤忠兵衛といふ男、剛腹者でオジギシナイン人だつた。その竹を見つめて二つ共拾つてしまつた。フタツタケを貰つたといふわけで判決がついた（新保）。

不思議な話

○漆原に竹切りにいつたかえり、酒一杯のんで帰ってきたがいつともちがつて家が静かだつた。誰もいないと思ってデイにふみこむと、おやじが血だらけの顔をしてたつて立つた。バット明かるくなつたらなんのこともないみんなで語りあつて立つた。

○イザリばたをおつてゐるところへ（昼間）馬のくつがふつてきた。

○金古からの帰りぐるぐるまわつてなかなか家に帰れない。同じ道を何回か通つた。天神坂までくると人にぶつつかつていくものがいた。家へかえつてみたら背中にしょつて立つた油揚が一枚もなかつた。

○松の沢からボヤをおろしてくるとき夕方になつてしまつた。スイノイをかぶつた女がついてくるので声をかけたが一こともいわずにきえてしまつた。

○二十五日の日に金古の映画館で人が死んだ。墓のチョウチンがその時

火だるまになつてやけた。

○うらの竹やぶで火の玉をはたきおとした。おやじはこんにやくのようなものだったといつた。

○田植がおわった頃、たんぼに水見にいった隣のオッチャンの頭の上をカネダマが通りすぎた。オッチャンはその晩死んだ。

○八幡に地芝居があつた時だつた。たぶん九月だつたと思う。東京の方から伊香保の方へむかって火の玉がとんだ。あとで東京のおばの死んだらせがきた。

○ビングン山の稻荷の信心家のはなしだが、馬四十頭を次々にいのりころしたといふ。

天神坂のはなし



(下新井) 天 神 坂

その他

柏木沢 小豆がとれるが豆かとれない。

広馬場 豆もとれるし小豆もとれる。

長岡八景

クモイの桜（こしょかけ桜） 大宮神社の北くもい坂にある。若いちは立っているが年をとると腰をかけるといふもい坂はむかしは人々のよくやすんだ場所。

なにしおを 雲居の桜咲きにけり

心のゆきて おらぬこそよし

立見の風 中組、大宮コウチの辺は三国山脈から吹きつける風がつめたい。寒い風を立道の風といつて。風当りのよいことをいう。

三国より清き朝風吹きたり

身もすがすがし立道の風

庚申塚の井戸 堂の入はザンゲ沢をさかのぼっていくと、桃広にでるが、更に上つて、十二の北に至り吾妻山の下にある水源地、湧水のでるところ。

水清くいつもかわらず湧き出づる

神のめぐみの庚申の井戸

むかし江戸の有馬兵部大夫といふ人が天神坂までくると馬からおちてしまつた。兵部大夫は大へんいかつて、「わたしの知行所にこの天神をおくことはいけない」といつて天神宮を天神山にうつしてしまつた。

天神坂には鳥居だけはあるがお宮がない。それ以来、馬に乗ってきたものは天神坂では下馬することになつた。兵部大夫はのち天神様のいかりにふれて、職をおわってしまった（新井）。

あけてうれしや黄金の波

四ツ谷の稻荷（草壁稻荷ともいう） 三ツ家の南、田の中にある稻荷。

東京で道がわからなくなつたとき、四ツ谷の稻荷にねがつて道をおそわ

りかえられた。

へびの目

むかし、へびには目がなかった。あるところにきれいなむすめさんがいた。そこへ、へびが毎晩いい男になってかよいつづけた。かよいつづけたそのあぐくに、むすめさんが妊娠した。それであ、どうもこののりまつらん



東光寺の月 堂の入沢の北長岡の長くねを北にまがると小高い丘にでる。ここに東光寺がある。閑東をみわたせるという。月の晩は特によい。

西橋名、東は赤城

間は利根

ながめうるわし東光
寺の月

台の雲 自害沢と堂の入沢の間は丘陵になつていて三五〇と四〇〇 m の標高、高台になつてるので天氣のよい日にはよく見渡たせる。

台に立ち、閑東平野を見下ろして

不動の滝（不動は神業師にあり） 堂の入沢を上ると滝がある。ふだんはから滝だが、雨期後はきれいな滝となる。十二メートルぐらい。はるなよりおちてながる滝不動 いのりまつらんよきごりやくを

むかし、へびには目がなかった。あるところにきれいなむすめさんがいた。そこへ、へびが毎晩いい男になってかよいつづけた。かよいつづけたそのあぐくに、むすめさんが妊娠した。それであ、どうもこのごろ顔色もわらわらしるので、どうしたんだ。べつに近所の若い人がわたしにいるわけじゃない。むかしのことで、べつに医者もあるわけじゃないんだからね。近所の人がみて、おなかに子供がやどっているといつた。そうしてたところが、夜になるくるその人が、それが、どうもいい男じやあるんだけれど、目がほそくて、目がみえないようなんだそうですね。それが、へびですね。そうしたところが、わたしは子供をやどしてあるんだけれど、家にはいられないし、どうしても、もらってもらいたい。どこのどんな人だか、今夜にかぎってはなしてくれ。親にあつてはなしをきめてくれといつたら、自分はこういうもんだといって白状したんだつて。そうしたところが、ちよつと、着ていた着物のはしに針をさして、糸を長くして、そしてついて行ったんだつて。しらばっくれて、男にわからぬように、ついて行った。いいかげん行つたら、お寺の大きな石垣の間にいちやつたんだつて。はいる前になつたら正体をあらわして、へびだつた。ところが糸をなぐくしておいたから、ずっとはいっても……。一休お前はおぼほにこんな大きな針をさされて（針の毒つて、うんと毒なんだつてね。そのへびの体にはね）、お前はこの針をさされてくれれば、お前の命は今晩かぎりなんだといつたところが、おれは死んでもいいけど、人間の体へたねをやどしてきた。おれの身代りはうんとできるつて、そういうつて、中ではなしたんだつて、むすめはあつけにとられて、糸の先をもつたきりで、石垣のところへ自分の体をくずしちやつたんだつて。ところが中で声がするんだつて。ところが、人間つて利口なもんだつて。子供なんかね、五月の節供にはしょうぶ湯をたつてね、それをまたいではいれば、子供なんかみんな出ちゃうと。そうすれ

ば、人間の体からぬ、人間で出ないで、ふつうで出て、そしてすてられれば、お前のたねはたえててしまうつていわれたってね。それできいてきてね。そしてなんだそですよ。そして、きいてきたとおりにした。あくやしいとおもつて、泣きはらした目がへびの目になったんだよさ。自分の子はへびの子ではなく、人間の子にうまれるのだったら、みんなのみえな子をうんじこまるよ、あたしにて、人間の子にうまれてくれつて。しょうぶ湯へはいつたんだってね。それでまたいだら、たらいの中へね、こしゃつと出た子が、たらいいっぱいあつたそです。よ。へびの子が。それをきてきたとおり穴をほつていけたという。人間だったら、ぜひ自分はめくらになつてもいいから、子供に目をくれといつたら、そのときにたらいに出たへびにはみな目がついていたつて。それでへびには目があるんだって。それと同時に人間のむすめが一人犠牲になつて、へびの目をつけたという。

それで今でも、四日の晩にはしようぶ湯をたつて入るもんだといふ。もしものことがあつても、湯に入れば自分の体は清められるんだつて。

話者 柳岡せつ（明治三十五年、広馬場のうまれ。このはなしは、小さいとき、おばあさんから聞いたものという。）

子供のあそび

じやんけん じやんけんはかはかほつかいどう、ほつかいどうはさむいよ、じやんけんほん。じやんけんには、グー、チョキ、パー三種がこうひつて、手を出す。じやんけんには、たとえば「グーなしよ」とある。多人数でじやんけんをするときには、たとえば「グーなしよ」といって、まちがつてグーを出したものはのぞいて勝負を始めた。

タンマ 遊戯の時一中止のときなどは、なわとびのときには、やすんだという。

まま」と オママゴト、○○ゴツコなどという。

お手玉 ナンゴという。えごの実や小豆を布の袋の中にいれてつくつた。

あやとり アジトリという。はしご、川、屋根、さかな、ひこうき、まつば、くまでなどある。

軒先や道、庭のあそび キシャゴ、ナンゴ、スゴロク、カルタ、人形ゴツコなど。

ボ、オニゴツコ、ナワトリビ、ブツケ（メンコ）、ウマノリ、石けり、子とり、手拭おとし、やなぎのどんぶりばち、坊さん坊さんどこ行くのかんからかんけつとばし（かくれんぼの一種）。

山でのあそび

木のぼり、ブランコ。

川、川原のあそび
水あび、どじょうとり、シジミとり、かにとりなど。

植物をつかつたあそび

草木の枝、葉、実などをつかつての売りやごっこ。ナズナ、スギナ、ノノヒルをつかつての手細工。

すぎなをつかつて、つみ木（つみきんしょ）というあそびをする。これは、すぎなのがふしをついで、どこをついだかあてさせるもの。

麦わらの先をいくつかにわつておしまげ、その上に雨天の実をのせて、反対側のはしを吹いてまわした。

いもつるをこまかくじいて、うでわやくびかざりをつくつた。れんげの花をあんで、くびかざりをつくつた。

しの竹で、紙でつぼう、杉の実でつぼうをつくつた。竹で、かしの実、じらんぼの実でつぼうをつくつた。

竹や桑の木で弓をつくつた。つるは桑の皮でつくつた。

笛、つばきの葉、竹の子の皮、しひびーびーなどでつくった。つばきの葉はまるめて、その先をかんで「ぎんちやんちや、赤いべこかつてくれるから、びーとなれ」という。

めっぽじさは、つたの葉や桑の葉柄をつかつてした。

虫などのあそび

鬼むし、かぶとむし等のすもうとり、とんぼの羽根をきつてとばした。り、しつぼをきつてむぎわりをさしこんでとばした。せみの羽根をきつてとばした。

かはぶーんとばかりなかない。きゅーんとなく。

かぶとむしやかなぶん(ほうじくとい)に糸をつけてとばした。

雨がえるのしりにむぎわらをさしこんで、空氣をいれてはらをふくらませた。

大きいくものしりをきつて、腹の中から糸をとりだして、Y字形の小枝にまきつけて、糸の量をくらべた。ちゞぐも(土ぐも)をとつた。このときに「ちゞぐも、ちゞぐも、下に火事があるから天上のぼれ」という。せみは、くものすを4—形の木にかけてとつた。

土や石のあそび

石なげ、砂あそび(山、池づくり、土まんじゅうくり)、土まんじゅうをつくるときに「石よりかねよりかたくなあれ」という。砂山をつくって、四方からトンネルをつくった。早く通じた方がかちとした。砂を腕の内側にうすくして、片方の指三本ほどつかって、砂の上をなす。こうしてへびの模様をつくった。すねをつかつても、同じことができた。

棒倒し(砂とり) 砂を山にして、その頂上に棒をたてる。双方から砂をとりっこする。このときに棒を倒さないようにする。棒が倒れた方がまけとなる。つぎに、また方の砂を山にして、同様のことをくりか

えす。

五目ならべ 地面に葦の國をかいて、小石を基石にして、相手の石を両側からはさんだときになら。石を沢山とった方がかわ。

遊戯のあそびにまつていうことは

おはじきは、各自五とか十とかだつてするが、きまられた数だけおはじきがない場合には、おねがいすることは(ガラスのおはじきを一つ指の先でまわしながらいう)。

「天神はたらけ、天神はたらけ、身上がり終ると奉公に出すぞ」これをくりかえす。勝ちがむいてくると「天神がついた」という。(筑郷方面でしていること)。

あそびをやめるときには、「いちぬけた、にぬけた、さんぬけた……」といって、順にやめていく。
「かくねんぼをしていてくらくなつたときには「かくねしょばあがでるからやめた」と人がいうと、ほかのものそれにしたがつてやめた。

かくれんぼ

「かくねしょするもの、この指とまれ」といつて、だれか一人、人さし指をつきだして、ほかのものがその上に、人さし指を出してかさねて行く。つぎにつぎにかさねていって、とどかなくなつたものとか、一番おそいものがおにになる。

また、かんからかんけつとばし(單にかんけりともい)という方法もある。これは、じゃんけんでもオニをきめる。地面に○をかいてその中にあきんをおく。オニでないものがそれを○の外へだだす。オニはそれをひろつてきて○の中に入れ、足でふみつけて十かぞえる。その間にほかのものは適当な場所にかくれる。一番はじめにみつかつたものは、オニに名前をよばれて○の中へ入つてかんをふみ、三つかぞえる。しかし、その前に、ほかのものが来て、かんを○の外へだせば、つかまつたものは、オニでなくなる。

かげふみ

十五夜の晩にした。人にふまれないようにはまわりながら、人のかげをふんだ。

念木

くぎうちとか、ネットタイという。

男の子のあそび。三人でする場合には△、四人の場合には□をかいてする。それぞれ角のところを出発点として、くぎを地面につきさして、線でむすんで自分の陣地をひろげていった。他人がすすめないように閑門などをつくつて妨害した。

石けり

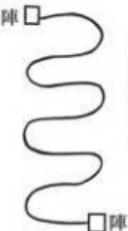
ためという。ガラス製のものをつかった。

片足とび

しんごといふ。

指相撲、兵隊さんねてる、おきてる（おしまげている指をあてるもの）

エイゴオニドン



二組にわかれ、それぞれの陣にいる。ヨーティーの合図で、両方から一人ずつとびだす。線の上を通る。途中であつたところでじゃんけんをする。また一方は、自分の陣地に、またといつて合図をする。合図と同時に、つぎのものがとび出してくる。これをくりかえして、早く、相手の陣をとつた方が勝ちとなる。

陣とり

二組にわかれ、それぞれはなれたところに目標をきめておく。たとえば電柱だと立木など。その目標のまわりを、味方のものでかこんでいる。たがいに相手の出方をまつて、陣地からはなれる。相手を先にたた

けば、その相手を捕りよにすることができる。早く陣地をとびだした方が、おさえられて捕りよになってしまふわけである。こうして、早く相手の陣地（目標）にさわれば勝ちとなる。

泥棒巡査

二組にわかれ。片方が泥棒組、片方が巡査組になる。巡査はなげわをもつていて泥棒をつかまえる。つかまつた泥棒は木につながれたりしている。これを泥棒側で巡査のすきをみてたすけだすあそびである。

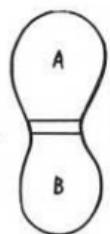
字かくし

地面の上に字を書いてうめる。いろいろとまぎらわしいことなどをかいて、相手をこまかす。早くあてた方がかちとなる。

石かくし

石をきめておいて、地面に穴をはって石をかくす。相手の目をごまかすために、方々に穴をあけておいたりする。早く石をみつけた方がかちとなる。

ひょうたんおにどん



*オニ

オニはじやんけんできる。オニはひょうたんの外にいる。ひょうたんの中に人がはいっている。オニは線のまわりをまわったり、橋をわたったりする。オニは「橋をしめた」とか、

「橋をひらいた」とかいう。その都度中にいるものはAからBへ、あるいは、BからAへと移動する。その際に、オニの手がぶれたものがオニになつて外へ出る。こうして、ひょうたんの外にいるオニが、中のものを追いまわして、つぎつぎにオニにしていく。全部のものをたたいてオニにするまで、あそびをつづける。つぎのオニになるものは、一番はじめにオニになつたもの。

わらべうた

動物のうた

かまぎつちよ かまぎつちよ わたしのかあさん めくらじやないよ
とんぼ とんぼ 目をまわせ
これは、とんぼをとろうとして、ひとさしゆびでぐるぐるまわすと
きにいう。

ばつた ばつた はたおれ
ばつたのあとあしをもってうたう。

かたさせ すそさせ
寒さがくるぞ

虫(こほろぎ)のなきこえという(山子田)。

あそびのうた
じょうり きんじょきんじょ
あたまが かんぐり かんぐり
火のもとようじん

おくいのくにの
くるまさき はなさき
おれれんのれん
(これはぞうりとりのうた)

まりつきうた
さかやれどん よつやれどん
すぐわかさか 通りみち
さらさらおちるは お茶の水
お茶のお水の まんなかで
十七しまだの あねさんが
おかごにのろうと まごついた

ひーで ふーで みーで よーで
いーつが むーで なーなが やーで
こーのが とうで とうからくだった
おいもやさん おいもはいっしょ
おいくらだね

三百三十三もんめ
いまちつと まけないか

ちんちやらっこ ほいよ
そんなにまければ そんだもの
お前のことなら まけてやる

ああうれし こううれし
となりのおじやん ちょいとおいで
となりのおばやん ちょいとおいで

くだりやまくだつて
のぼりやまのぼつて
めーたかめーねか
めのかくし

おなんこ(お手玉)

いちばんはじめは一の宮
にまた日光中禪寺
さんまた佐倉の宗五郎
しました信濃の善光寺
いつつは出雲の大社
むつつは村々鎮守様
ななつは成田の不動様
やつづ八幡の八幡宮
ここにつ高野の弘法様

とおは東京博覧会

(この間に不如帰の武夫と浪子のうたが入る)

じゅういちいちやはいちむすめ

じゅうには二宮金次郎

じゅうさんさかづき手にもつて

じゅうしは新年おめでとう

じゅうごは伊香保の温泉道

じゅうろくロシアの戦いに

じゅうしち七夜はしちむすめ

じゅうはち浜辺のしきうさぎ

じゅうくは九州熊本城

にじゅうは日本の天皇さん

せんちょう、まんちょう

ますますいっただん、かしました(姫熊)。

めぐらおに
中の中の地蔵さん
坊さん坊さん、どこ行くの
わたしはたんばへ稻刈りに
わたしも一緒につけさせ
お前つれればじやまになる
あとちよんまげ、あててごらん
いしか、おにか、とうろうか(関谷塚・箕郷生まれ)
かごめ、かごめ
かごの中の島は
いつ、いつ、でやる
夜中の晩に
つるとかめとすべつた

うしろの正面、だあれ

じゃんけんこう

勝つてうれしい

花いちもんめ

負けてくやしい

花いちもんめ

となりのおばさん

ちょいときておくれ

鬼がこわくて行けないよ

おなべかぶつて

ちょいと来ておくれ

おかげかぶつて

ちょいと来ておくれ

それもそうだが、どこの子がほしい

あの子じやわからん

この子がほしい

この子じやわからん

この子じやわからん

この子じやわからん

この子じやわからん

この子じやわからん

A B A ○○ちゃんほし

A B A ××ちゃんほし

AとBの二組にわかれ、交互にいう。Aはじゃんけんをして勝った

方がいい、Bは、負けた方がいう。

名前をよばれたものが双方から出てじゃんけんをする。負けたものは、かつた方へとられる。人を沢山とった方がかちとなる(広馬場)。

年中行事・季節のうた

道祖神がもえますよ

はーやはーがあけますよ

よるよなかにさんざべべこきやがつて

おーきるやー

お正月の歌

お正月は来る来る

バンジョウ山の腰まで

赤い飾に白い餅に

松葉にさしてもつてくる

(宮室)

おおさまむこさむ

山から小僧がとんでくる

十日夜はいいもんだ

あさそばきりにひるだんご

ようもくつちやはらでえこ

(葦熊)

おてんとさまおてんとさま

俵一俵やるから顔を出せ

(山子田)

冬太陽が雲の中に入つたときにはう

(山子田)

ほらほらはたけの

すいかの皮でもとつとけつけとけ

正月時分の

なんでもないときや

よつぼどちょうほだよ

かーかーからすのかんざぶろう

足洗つてどこ行く

遠く山の火事消しに

おしくらごんべ

おされてなくな

懸 懸

そうじや そうじや そうじやまちの

そんちようさんが死んだそうじや

葬式まんじゅうでつけえそうじや

おいらが行つてもくんねえそそうじや

なかのあんこはねえそうじや

おめえの学校ぼろがつこう

つかえぼうが十三本

一本ぬいたらめっちやくちや

馬鹿かばちんどんや

おまえのかあさんでんべそ

うちじゅうそろって大でべそ

(葦熊)

子守りうた

ねんねん子守りはつらいもの

雨降り風吹き宿はなし

ひとの軒場で日をくらす

(関谷塚)

ねんねんねこのけつ

がにがはいこんだ

ひっぱりだしても

ひっぱりだしても

またはいこんだ

(山子田)

背中でがきやなくめしはこげる

(倉海戸)

労 作 う た

糸ひきうた

糸は千度きれてもつなぐ

ぬしときればつなげない

糸はきれるなぎぐりはまわれ

糸目が出ない所にひまが出る

はたおりうた

人のかれしをとるやつ

犬にかまれて死ねばよい

人のよび名

目上の人に対する苗字でよぶことが多い。子供の時から知っている人には……ちゃんによぶ。

わきからよめにきた人は……さんとよぶ。よび名は丁寧にしている。

村内で名前の同じ人がいる場合には、名前のアタセントをかえてよぶ程度（桃泉）。

親しい人は××ちゃんによぶ。××さんともよぶが、ちやんとよぶ方がふつう。年寄りになると、××さんとよぶようだ。
××やんとよぶ場合はあまりないが、まれにはある。
むかし、年寄りが目下のものを見下してよぶときに、××こうといつた。

女人のよび名は、もとは、××さんといったが、最近は××ちゃんとよぶのが多い。また、女人のよび方には、名前の上におをつけた。たとえば、とめさんをよぶのに、おとめさんというように。しかしこれは七十才ぐらいから上の年寄りに対するもので、今のわい人の場合にはつかわない。

村内に同名のものがいる場合には、年寄りの方をふつうによび、わかい方は、その家の屋号などをつけてよぶのがふつう（長岡）。

方 言

ここにあげたことばは、今回の調査中に折にふれて採集したもので、

系統的なものではない。上が標準語で、下が権東村のことば。

てんぶら

うどん

汁

煮こみうどん

すいとん

一回分の食事

午後の間食

かゆ

雜炊

垣根

便所

炉

腰かけ

庭の植込み

手拭

ほおかむり

子供を背負う帶

着物を短く着ること

かえる

ひきがえる

づばめ

おたまじやくし

かまきり

おたま

かまぎつちょ

かなぶんぶん

しゃくとりむし

蚕

かたつむり

ころもあげ
おめん
おつけ、おいしい

にこみ、おつきりこみ
おしんこ

ひとかたけ

おこえ、こじはん、こじょはん

おけえ

ぞうせえ

くね

ちょうづば

いるり、いろり

こしょかけ

つばやま

てねげー

はつかぶり

もりっこび

つんつるてん、つったけ

げえろ

がんたく、おひき

つばくろ

おたま

かまぎつちょ

ほうじく

かっくい

おこさま、けえこ

でんでんむし

へび
ひる
みみず
あり
士ぐも
つくし
おおばこ
どんぐり
くわの実
桑の木の切ったもの
のびる
まつぼっくり

ひーる
めめず
ありんご、あり
ちゅぐも、てっこぼっこ
つくしんぼ
がいろいろ、げえろっぽ
じらんば
どどめ
くわせ
のひろ
まつかさ
でーこん
ねんじん
ごんぼう
おこうこ
なつば
はっかけばな
こおりんほ
はあて、ふっこし
からばいし
あかねば
にぎりこぶし
べろ
まいけ
がら
まきめ
ぎつちよ

ふきでもの
ひざ
くるぶし
目をあいて眠ること
うなづくこと
大食
縁起をかつぐ人
けちん坊
のうなし者
よく出あるくん
いつも母親につきまとっている子供 腰ぎんちゃん、あまえん坊
夜おそくまでおきている人 よおっぱり、よおっぱれえ、よたか、
口ごたえ
でたらめ
おべつか
乞食
やけど
あかんぼう
炊事をする人
末子
押す
こわす
すべる
おだてる

できもん、くさ
ひさっこぶ
くるみ
うさぎねむり
ほっくり
おおぐい、おおまくれえ
おんべかつぎ
しあん坊
七厘
ですっぽぎ
腰ぎんちゃん、あまえん坊
よおっぱり、よおっぱれえ、よたか、
じょうくち
でまかせ、でたらっぱち
おてんたら
ものもらい、どうしんぼう
やけつり
あかっこ
おばんし
ねこのしっぽ
おっぺす
おっこす
つんのめる
組合長にさせられること、
おだてもっこ（おだてにのって区長とか、
かがむ
こち
こせだま、重影様にはこせだまをまつってい

る

という。

ねずみ
山の頂上
木の頂上
昨日
くしゃみ
ぬかづけ
夕ばえ
ふざける
いもり
いど
あな
にわとりのくそ
家へ入る道
餅
こたつ
やきもち
メンコ(子供のあそび)
バチンコ()
石けり()
おはしき()
かぶとむし
おにむし、つのむし
小さいものから順にほし、ぶた、なた、の
こ、へいたい、つの(つの)まがりともいう

よもの
てんべらちよ(小さいときにつかつた)ち
ようじょう
きのてっぺん
きんな(上サ・八幡下)
はくしょん、へくしょん
どぶづけ
ゆうやけ、ゆうぞら
しゃじける
えど
えもり
あなんご、あな
とんのけえしよ、けえしよ
けえど
もち、あんも(子供がいう)
おこた
小麦粉を水でこねて、はうろくでやいたも
の・油でやいたものをじじやきといいう小麦
粉のこねたものを、金網の上でやつたもの
をばばやきといいう

家族の呼び名

場所によっては、ぶた、のこ、なた、くま
がい、あつもりといいうよび名もある。この
ほかに、子供が堆肥の中から生まれたとい
つているまんじゅうむし(くそつかぶと)
といいうがある。
体の色で右のそれぞれをあかがね、くろが
ねとわける方法もある。あかがねといいうの
は、背中に赤味のあるもの、くろがねとい
うのは、背中に黒味がかったるもの。
ねとわける方法もある。あかがねといいうの
は、背中に赤味のあるもの、くろがねとい
うのは、背中に黒味がかったもの。
祖父母のことを、おじい、祖母のことをおば
あといいう家もある、父のことは、とつちや
ん、母のことはかあちゃん、家によつては
父のことをとうとか、ちゃんといいうのもあ
る。兄のことはあんちゃん、姉のことはねえ
ちゃんといいう。嫁のことはよめこという。
おじのことはおじこ、おばのことはおばこ
といいう。見知らぬ中年の男のことはおつち
やんといいう。

芸能

一、概観

仏教関係の芸能

芸能関係の資料は非常に少なかった。これは、本村が芸能関係が特に少いわけではない。調査の重点がこの部門に及ばなかつたためである。本村の芸能中特に注目すべきものは、夏の地蔵様（地蔵待）まつりをはじめ百万遍、念佛講など中心とした仏教関係のものがさかんであつた。特に地蔵まつりの際唱えられる和讃はその数も多く、子供から大人まで唱え層も厚い村である。これについては既に都丸十九一氏が「地蔵行事とその和讃」で、また笹沢淳策氏が「相馬村の地蔵祭り」（資料の部参照）で詳報しているのであえて調査員がふれなかつたものである。

しかし、第二次民俗ともいえる仏教行事にともなうものがあらゆる点でよく残っている。二十二夜待、念佛講、百万遍念佛など今なお各字でよく行なわれ、葬式のときのアーティンブツなど近村に比してよく古い姿を伝えてくる。

このように仏教芸能がよく伝承されているのは何故であろうか。各字の墓地などに残るリョウにはかつてリョウ坊主と称する人々が住んでいた。この人々は身分的には低い地位におかれながら、明治の頃までは村の仏教行事には大きな役割を果してきただけではなかろうか。また、柳沢寺を中心とした信仰の強さにもよるもので、桃井附近十三ヶ村（桃井莊の区域を示すものではなかつたか）に十三仏がまつられていること、幸若舞のもとといわれる桃井直常の誕生地としての伝説、或は船尾山縁起と称する語り物（最近は本書の中に道行きなどあり、その内容などから稚子舞との関係なども考えられている）など中世的な姿がかなり後まで伝えられてきたことなども大いに注目すべきであろう。残念ながら今回の調査では唱導者の問題にまでほとんどふれないでしまつた。信仰の部に記された「オコリ山と念佛堂」の項に行入様のことが記されてあるのみで終つた。オコリヤマがある字名が道場であり、時宗とりょウ坊主の関係など興味ある今後の課題であろう。

神事芸能

本村のこの種のものとしては神楽と獅子舞がある。神楽は南新井の資料しか得られなかつたが、下之前を中心とする広馬場地区の神楽はかなり優れたものである。その系統も神代神楽の系統に属するもので、毎年宮室のお聖様の春祭りには行なわれている。面も多く保存され（二十数面）、座の数も多い。かつてこの土地の人々が大久保など近村へ指導に行つたこともあり、近村神楽の指導的役割を果した。

新井の神楽も神代舞の系統と思われる。現在は巫女舞は絶えてしまつた。かつては巫女舞も二座あつたが、最近の職業事情などから行なわれなくなつたのは残念である。

獅子舞は新井、八幡、長岡、柏木沢などに伝えられていた。現在は長岡、柏木沢だけが舞え、新井八幡は後繼者の養成がなく中絶している。

興業物

興業的なものでこの地方の特にさかんであったものは競馬である。競馬はもと年の始めの占に用いられた。その意味では神事芸能にも入る。明治の末年から昭和の初年にかけては全般的に競馬がさかんであったが、群馬郡内では柳沢寺の競馬は群馬町觀音寺、高崎市柳原の競馬となる。最もさかんなものの一つ。昔は各村とも正月の年始日が定められており、大字山子田は正月五日が年始日であり、この日に盛大に行なわれた。満州事變以来の社会状勢の変化、馬から牛にかわった農家、常設競馬が嵩崎など近くに出来てきことなどの諸原因で各地のクサツケイバもなくなつた。

なお、青年団が剣舞をさかんに演じた大正末年から昭和の初年に、本村の青年はやはり近村の指導的役割を果していった。群馬町金古方面の青年会などよくまれていったことがある。

二、仏教関係の芸能

盆踊り 昔はさかんで、特に明治の末年は流行った。大正の初年はまだ太鼓だけではやっていたが、そのうちに八木節が入ってにぎやかになった。毎年中秋盆後二晩位の農家の広い庭をかりておどった。八木節も盆踊りのときにやつたが、チャッポコとよんでいた。囃がそのように聞えたら、八木節の上手な人のあだ名でチャッポコという人がいた。棒をつくつてやるようになつたのは明治の末年からで、始木主水などの口説節の音頭、踊りは八木節以前は六ヶ足の拍子のものであった(井戸尻)。

三、神事芸能

太々神楽

明治初年に元総社の明神様の氏子からならつたといふ。八木原の神楽

は新井で教えたものだ。今できる舞は、
おうべ、種まき、猿田彦命、岩戸開、一本刀、両刀、八幡太郎、銀治
屋扇(オイペス)、カタホコ(ナギナタ)、カツコ(太鼓)、イザナギイザナミ(南新井)。

獅子舞

新井は稻荷流で八幡にもあったが今は新井の組だけ、もとは鎮守の八幡様への奉納は両組交代でした。
はじめに両組の獅子頭を八幡様に備えてからはじめた。四月十五日と十月九日(九月十九日)に舞つたが、鳥居を早く入る競走でよく争つた。主に秋の祭りが多かつた。

舞いの種類は、ポンデ
ン、花吸、網斬り、橋掛、
女獅子隠し、マリ、三拍

子、飛遠い、劍などの舞庭
ができた。もとは二十七庭
があった。

一人立四人組で、カンカ
チ一人、頭は三人、棒二人、
人、オンベフリ一人、笛五
人(昔は二十人位)でま
つた。

舞う人は、特定の家との
きまりではなく、好きな人は
誰でも加えられた。もとは
惣領でなければ出来なかつ
た。練習は九月四・五日か



新井の獅子頭

長岡には判官流の獅子舞がある。

四、興業物

競馬

昔は農家の馬が集つてよく競馬をした。これをハサッケイバといい、正月から三月にかけて社寺の祭りなどに行なった。中でも柳沢寺の競馬はさかんで、昭和の始め頃までは毎年正月五日の年始日でした。場所は寺の北の山が十町歩ほどあったのでここでした。馬場の形も円を廻るのと直線の鉄砲馬場とがあった。馬は近村のものも出たが、勢多郡方面からもきた。駒形、富士見など、南部からは大類村方面からもきた。また、村の馬も近村の競馬に出かけた。

近所の競馬の行なれた場所は
笛 熊 正月十八日 鉄砲馬場
里 宮 正月十一日 鉄砲馬場
金 古 正月 七日 まわり馬場
観音寺 正月十七日 まわり馬場
競馬見物、近村は勿論で、碓氷郡松井田新堀まで見にいった。近所の馬が出ると応援に出て、勝つと賞品の旗などかついできた（南新井）。

クサツケイバ

ハタツケイバ（旗競馬）ともいう。六尺程の生の杉の木に、大巾五反位の旗を賞とした。一等賞にはこれに加えてタンス、時計など沢川の商店から寄贈された。

明治の末年から昭和四、五年頃まで行なわれたもので、正月五日ネンシウケの日に客寄せにやつたのが一番盛であった。このクサツケイバが次第に桃井村一円のものになつた。それまではこの日は部落のネンシウケの日であった。勿論入場は無料で、カケゴトはなかつた（柳沢）。

芝居

祭りには、村の舞台に他村からよんだり、或は渡世人、団体をかつてきて芝居をやつた。これをコモツバリシバイ、コジキシバイといつた（中組）。

劍舞

昭和の始め頃流行した。なかなか上手な人もいて本能寺、川中島、捨子行、白虎隊などをした。踊りは一人ですとの組んでするのとあり、刀と扇を主として用い、時には槍を用いた（倉海戸）。

△資料4▽

相馬村の地蔵祭り

真夏の太陽が権名の峯に没して、日ぐらしの声が消える頃になると此地蔵祭から神太鼓の音とともに悠長な歌声が流れてくる。

此地蔵名麓相馬村に、古くから伝えられて、子供達の地蔵和讃を唱和する声である。冬の道祖神祭りに夏の地蔵祭りと、年中行事のこの祭りも、かつては各部落とも行なわれていたものであろうと言わわれているが、これに關した記録もなく、村の長老達の知る範囲に於ける現在迄の祭りの様子を攢めてみたが、何か参考になる事があれば幸と思い報告するものである。

一、広馬場、南 上サ

南 上サと二部落合同で祭りを行ひ。

言い伝えによると地蔵尊を安置する御輿は、室町五年より天明七年の三十三ヶ年間の日時を費し、托鉢によつて建立された水沢寺の建築に從事した大工（名前不詳）によつて刻まれたものといわれる。觀世音菩薩を安置する中宮の作りとこの部落の地蔵尊を安置する御輿の作りは同じ型であると言う。

(1) 祭日

○ 祭りの始まりは何頃か詳でないが以前より大正十二年頃までは八月一日より八月二十四日まで雨天を除き毎夜夕刻より深更まで御輿をかづぎ和讃を唱和しながら遠く部落外まで練り歩く。

○大正十二年頃より以降現在に至るまでは八月一日、七日、十五日の三日間となる。

○祭りの練習（特に和讃の唱和）は其の年の当番の家を利用したり地蔵堂に集つたりして一週間位行う（昔も今も変りなし）。

(b) 祭りに参加する人

○古来より大正十二年頃までは十五才より四十二才迄の男子とし、

○正十二年以降現在は十五才より三十五才までである。

○祭りを行ふために当番（別に親方とも云うが）を二区合同の祭りだけに各区とも一名選出するが、選出方法は古来より地蔵契約（後で述べる）の既、推選の方法によつて決定している。

（註）御輿の重量が約二十貫もあるので子供達ではかつぐ事が不可能なため子供といふよりも青年年の祭りのようになつたものであろう。

(c) 祭りに使用する道具

横笛（現在は使用せず）大太鼓、鑼、ちよらん、燈籠（切り子、万燈）と御輿であり参考までに図で示すと次の如きものである。

年月日一本

(イ) 大念仏

（切り子）



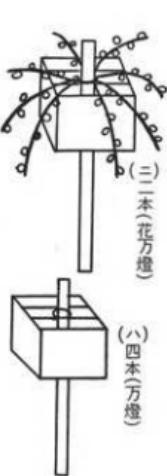
地蔵連中
南上サ



(ロ) 六本（大念仏という）

(二) 一本（花万燈）

(ハ) 四本（万燈）



(d) 祭りの様子

○祭りの行列にもはつきりした順序があり古来より今日に至るも變りなくやつてゐる。行列の順序は次の通りである。

行列の進む方向
■ 路面
● その間に茶菓と和酒を唱和する人達

④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬

■ 路面
● その間に茶菓と和酒を唱和する人達

○夕暮迫る頃少し早目に夕食をすませた人々が集まると燈籠や提灯に火を灯し出発する。この行列は部落の大通りを悠長な和讃のリズムに乗つてするする

と続くのであるが各戸では思い思いの供物（金錢・おさこと称して米や麦）をもつて辻々に出て待つ。御輿は長年に亘る事とて大体止る所を所に止めある如く此處で和讃を唱和し次の場所へと大通りを進んでいくのである。

この行列は進行中田畑の多い野道に出ると田植和讃を唱え橋を渡る際は橋讃を、又部落から部落へ移る際は旅和讃を唱えていくのであるが、和讃の唱和は前にも述べた様に至つて悠長である。例えは大念仏五遍返しと言ふ和讃

（これは南無阿弥陀仏を五回唱う）など文字の数では僅か三十三字であるが唱和するのに約五分もかかると言うのであるから、其の調子が如何に悠長であ

り悠長もおして知るべである。この行列は大体に於て部落の大通りをり遙するのであるが、求めによつては、其の家の庭に入り和讃を唱和する事もある。今ここにその時の様子を述べてみよう。

先ず行列はその家の門につくと大念仏（南無阿弥陀仏の五遍返し）を唱え次に地蔵経といふ和讃を唱え、然る後庭に入り和讃を唱和するのであるが、この際この家の家主はお茶（まれには酒を出す家もある）を煎じて地蔵連中をもてなす。お茶を馳走になるとお茶和讃を（酒を馳走になつた場合は酒和讃）唱え、最後にお礼和讃を唱えて御輿をかつぎ大念仏を唱えながら帰る。

其他特定にうたわれると言う和讃もないのが部落の名門と言われるような家へいった時は挨拶（御祝儀とか言うが）として次のような和讃を唱えると言ふ事である。

○船命頂礼御當家のお庭の様子を眺むれば、一に泉木二には、づげ三に三階梅の花この花開けば村繁昌ましてやお家は尚繁昌とよ、なんまいた……

この様にして八月一日より二十四日迄（現在は一日、七日、十五日の三日

間)のお祭りが済むと八月二十四日地蔵尊の縁日に地蔵契約と称して御馳走を飾り会食する(五目飯、醤油飯などが多い)。この際来年度の当番を決定し祭りに対する一切の件を申送りすることになっている。

(4) 和讃(原文の儘ぶりがなあるものはぶりがなをそのまま附した)

(1) 地蔵和讃

○大悲大慈の深きこと地蔵菩薩にしくはなし
○無始より吾等流転して何か生死を離るべし
○六趣輪廻の有様は車の廻るが如くなり
○一念忘し初めより無明くらま門に入り
○長夜の眠りも深ければ夢の驚く事もなし

(2) 地蔵和讃

○退別五裏の悲しみも生老病死の苦しみも此の時誰おか頼むべき、そ
の苦を誰が助くべき、ただ願わくは地蔵尊(現在はこの(2)のみを唱え
る)

(3) 社和讃

○帰命頭札この社は又路の社とて道三筋、所願御地蔵のしいの道。トヨ

(4) 茶和讃

○禮命頭札このお茶はどこのいざくの名茶やら旅の疲れで香む知れぬ、宿
へ帰りて、物語りお茶のお札は極楽のみだのお前でしかと申さん。トヨ
○帰命頭札このお茶は新茶か古茶か手作の茶か旅の疲れで香むしれぬ。又
お茶のお札は富士波瀬、宿へ帰りて物語り、これぞ御地蔵のいとくわ
る)

(5) 旗和讃

○帰命頭札七つが今年初めて初旅で花の諸園に腰をかけ、憩み煙草につ
き煙管一吹き吹けば富士の山一吹き吹けば筑波山十五夜お月のとみだれ
星トヨ

(6) 田植和讃

○帰命頭札七つが今年初めて田を植えて、然も其の田の出来の良さ、から
が七尺穗が五尺、いかなる馬にも八は一駄、八はで八石あるなれば是が
せどの藏七つ トヨ

(7) 酒和讃

帰命頭札この酒はいくの謹の名酒やら旅の疲れで呑み知れぬ酒のお札は
富士の山宿に帰りて物語りこれもお地蔵のいとくなり トヨ

(8) 高野山

帰命頭札高野山無名の橋とて橋一つ善ある人は橋広し惡ある人は橋狭し只
金仏で渡るべし トヨ

(9) 権名和讃

帰命頭札権名山鞍掛岩に九十九岩、御神前は御袖石、あみだが鎌を拌むに
は拌むとすれば雲かかり、如何なる邪険の雲だやら雲は邪険はなけれども
心邪険で拌れぬ、拌む御縁の地蔵尊 トヨ

御縁和讃

○帰命頭札此術は白銀の橋、橋板に向うの橋づめ見て見れば鬼が八人立並
念佛申して渡るには鬼さえ除けて礼をなす。只金仏で渡るべし トヨ

御礼和讃

○帰命頭札めぐりきて御大切なる広庭の坪の草木踏み散らし

○帰命頭札地蔵尊不重宝なる我々が、大勢集まりめぐり来て御大切なる広
庭の坪の草木踏み散らし、ななめならずのお茶にあづかり

○帰命頭札有難や札は言葉で尽くされぬ。何處で申そう極楽のみだの御前
でしかと申そう トヨ

二、広馬場下の前

祭り様子など前に述べた部落と大体同じようであるから簡単に述べることとす
る

(1) 祭日

○従来より八月七日、十三日、十四日、十五日の四日間とし毎夜各戸毎に贈
る(各戸贈りは大正末期頃よりでそれ以前は廻らぬ)

○祭りの用意は八月一日に行い、練習は八日より十二日まで毎夜部落の大通
りを往復しつつ行う。

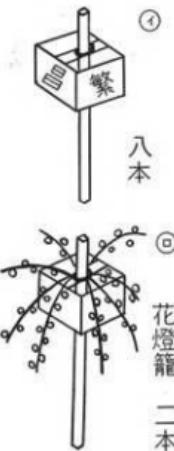
(2) 祭りに参加する人

五、六才(澄籠がもてるようになると)より二十才までとし年長者(二十才
の人)が親方といつて世話をす。二十一才になると顧問といつて一年の応
援のため参加する。

(八) 祭りに使用する道具

燈籠十本、太鼓、笛、鐘（現在は笛なし）

① 八本
② 花燈籠 一本



(九) 祭りの様子

○ 行列の順序は次の通りである。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ 漆器（鏡、太鼓）

〔御用〕 銀の匂いものこの通りで和服をよむため

○ 行列が大通りを通り、通る時は和服を唱え乍ら進むが地蔵尊に供える事はしない。各戸毎に題るので其の際自由意志によつて供物をする。お茶などの接待をうけた際はお茶和歌を唱える。特別に唱える和歌と言えばその位であり、平常は親方の指示によつて唱和し順序などもない。然し從来より、この部落に於ても一部の組は子供たちも参加せず御興も廻らない。ようであつた正末期迄は地蔵尊に供えるものもきめられていて一般は二升（麦の引き割り）馬持ち三升であつたが現在は自由意志であり農家のみが地蔵契約に使う小麦粉を若干ずつ供える事になつてゐる。

地蔵契約については以前（大正末期迄）は醤油瓶といつて瓶の中へ油揚げと醤油を入れ味をつけたものを作り部落全体の子供を招待したが現在は集められた小麦粉によつてパンを作り御供物として分ち与えられてゐる。地蔵契約の日は決定されていないが大体二十四日の地蔵尊の縁日に行い、時には九月一日頃行う事もある。

（10） 敷和 読（原文のまま）

帰命頭札

一つとや人に知られぬ妻を持ち袖に涙を包むつらさよ

二つとや二葉の松を頼むとも二通りには男たのまじ

三つと見る程恋地がやみもせざ見る程恋地が増るつらさよ

四つとや四間の座敷の油火が消えつ明りつ物を思わす

五つとや何時か今かと待つれども今宵の月も西へ傾く

六つとや無理矢理結びし女つさよ秋風たなれば結ぶらさよ

七つとや何がみくらの身も睡し只の一錢の妻ぞ恋しき

八つとや弥生の月の出づる迄心静かに待ち給うとよ

九つとや此処で逢わざば飯糰のみだの御前でしかと逢うべし

十うとや床やで育てし新さよ何時か世に出て君に手をそえ

（2） お茶和歌

帰命頭札このお茶は新茶か古茶か字治の茶か旅の疲れで飲みしれぬ宿に帰りて物語りお茶の御恩は富士の山とよ

（3） お酒和歌

帰命頭札この酒は新酒か古酒か牡丹酒か旅の疲れで飲みしれぬ宿に帰りて物語り酒の御恩は富士の山とよ

（4） 高天ヶ原

帰命頭札七つ子が高天ヶ原にて菅を刈る菅を刈りては何にする菅を刈りてはのみにする。のみじやあるまい笠にする。笠はどこ笠、都笠、都ではやる三度笠、三度の笠を何にする。岩舟御地蔵が踊る笠とよ

（5） 田植和歌

帰命頭札十七が今年始めて田を植えて而も其の田の出来のよさ、丈が七尺穂が五尺、何だら駒にも八穗一駄八穗で八石重れるなら俺のお宿に倉七つ倉の番には誰がなる、一に小雀二につばめ三に鶯ほととぎす とよ

（6） 寺守讀

帰命頭札この寺は七里大門七曲り曲り門がある。門の番には誰がなる一に小雀二に燕三に鶯ほととぎす とよ

（7） 賽の河原

帰命頭札極楽の賽の河原見てあれど一つや二つや三つや四つ十にも足らぬ

幼子が小石集めて塔を組む一輪組んでは父の為二輪組んでは母のため三輪組んだるその時は兄や弟や我が身の為鬼ほど邪険なものはない。つめやつめやと、てしゃくとして組んだる塔を皆くすとよ

(8) 権名山

帰命頂札様名山三国一の御山なり一夜出来たる富士の山、野の木笠に清くしてするが時にさしかかる天神跡を眺むれば鞍掛岩やつづら岩華も及ばぬ親岩其の他名所は数知れぬ事にはお地蔵がお立ちあるとよ

(9) 地蔵和讃

帰命頂礼てんじくの地蔵菩薩が天降る何が所願で天降る、何も所願はなけれども余りこの世が邪険に念仏進めに天降るとよ

三、柏木沢、新田
新田部落の地蔵尊に就ても何時頃からこうした祭りが行われているかの記録もなく唯長老の知る範囲の過去と現在行なわれている様子のみを述べる事にする。

(1) 祭日

○八月一日より十六日まで毎夜行う（今昔とも変らず）地蔵契約十七日ときめられている。

(2) 祭りの練習に一ヶ月前よりしている。

(3) 参加する人

十三才、十四才、十五才の者（今昔變らず）

(4) 燃籠に花をつけた花燈籠は大正の末期までは使用したが現在は使用せず全部

(5) 燃籠に花を書く、一本のみ大念仏と記し和讃を読むものが使用する。

(6) 燃籠の順序等もきめられていない。

(7) 祭りの様子

各戸では毎夜御輿が来るとき代として、（賽錢若しくはおさごとと呼んで）

其の昔宿場であつたこの部落は南北の大通りに人家がありこの大通りを毎夜和讃を唱え乍ら毎戸を廻る（現在は一晩おきに廻る）

米麦を供える十五日の夜ともなれば隣部落の本田の地蔵祭りの行列がこの

部落の一端を通つて行くのであるが、この際は本田部落の親方は新田部落の

部落長の許可を得て通る。この際たまたま新田部落の地蔵祭りの行列と道路上で走る事があるがこの時にはお互に御輿を置き相対して儀式挨拶の和讃を唱え合うのだそうであるが、現在はこうした事もないようである。尚この際唱和することと祝文を調査する事が出来なかつた事は残念であるが後の機会に報告することにしておこう。

(1) 権名山
帰命頂札様名山鞍掛岩に九十九岩、御神前には御袖石阿弥陀ヶ岳を拝むのは拝むとすれば雲かかる、いかなる邪険の雲だやら雲に邪険はないけれども

(2) 六恨
六恨けだつの道に入り七辺めようの赤月はこち六代の空晴れて「七かく八

(3) 地蔵尊
帰命頂礼地蔵尊、一念迷い切めより、無妙の暗闇闇に入り、七夜の眠り深ければ「夢とどろく」事なく、トヨ、なんまいだ

(4) 阿弥陀如来
南無弥大慈の阿弥陀如来、大悲ほうげんめぐらして、光明へんし、へだてなし「十方世界を」あわれみて、トヨ、なんまいだ

(5) 白鳩
帰命頂頭白鳩が、門の扉へ果をかけて「門さえ開けば」月と輝く、トヨ、なんまいだ

(6) 輪音の車
輪音の車は止まらずに、何年振りの夢乗せに、さんがい流転迷い来て「し

(7) 布和讃
帰命頂札道すじに、地蔵菩薩の偉徳には、危き難をのがれくる「これも地

(8) 間地蔵
帰命頂札道すじに、地蔵菩薩の偉徳には、危き難をのがれくる「これも地

そ「南無の六字で」さらりと、あくトヨなんまいだ

(9) 島田さん
帰島頭札、島田さん、何も所願はないけれど「可愛い男に」顔見せに

トヨなんまいだ

○註 和讃は原文の傳取疑する意味の解せぬところがあり、後日の研究調査によつて解決したい。

四、柏木沢、新屋敷

この部落の地蔵尊は一説によれば柏木沢、本田部落にある不動寺（天台宗）に安置してありしものを部落に移すと聞く。其の他の事に就ては不詳なり。

(1) 祭 日

○八月一日より十六日の夜まで毎夜行う。大東亜戦激烈なりし昭和十九年頃よりこれ迄の祭りはせず、八月一日、七日、十三日、十四日、十五日、十六日の六日間となる。

(2) 祭りに参加する人

大正の初年より昭和十九年頃までは十五才より二十五才迄、其の以前に於ては十五才より三十才迄、現在は部落の祭り世話人（目代、当番ともいう）のみである。

(3) 祭りに使用する道具

燈籠八本、太鼓、鐘

(4) 祭りの様子

早々と夕食をすませて地蔵堂中が集ると御輿をかつぎ和讃を唱え乍ら行進するのであるが主として部落の大通を一遍する。新益の家へは立寄つて特に和讃を唱える。この際この家ではお茶などの接待をする。（お茶和讃）、御輿への供え物は毎夜の事だけに自由意志によつておさご（米菴）賽錢を供えるが十六日の午後になると、地蔵堂中が囲つて部落一せいに半強制的な寄附を受ける。この廟の寄附は、一般は麦のひき割五合、馬持ち一升が基準となつてゐる。十六日までの努力が済むと前に述べた部落の如く地蔵約を行つてゐる。この廟食事はとらず頭頭（念仏頭）をたべ、お茶をのんで解散するのであるが、契約の日は一定せず十七日若しくは九月一日までの都合良き日に行つた。これも当地方では善惡の關係で忙しい時期におかれであるためである。

今述べた祭りの様子は昭和十九年頃迄に於けるものであるが、大東亜戦、続いて敗戦の混乱した時代となり、食糧難のため生産者たる部落の農家さえも米、麦その他の穀物が自由に出来ない状態におかれた為、この祭りも現在のようになり、その段におかれている。

○頂礼は出さず、和讃も唱えず、ただ八月一日、七日、十三、十四、十五、十六日と六日間部落の公民館へ御輿を安置し部落民が参詣するのみである。現在この祭りの直接奉仕者は部落の目代（当番とも云う）といつて氏神の祭典などに部落を代表して奉仕する人達によつて行なわれてゐる。

尚この御輿については文政十一年に建立されたと云う柏木沢の稱荷神社の建築に従つた大工、青山弥太郎、青山己藤太、兩人の作であると言われてゐる。頂礼世の中は、ろうじやう、ふじやうの世のならい、きのう生れて今日は早や、無情の風にさらわれてゐる。今も念仏で助け給えや地蔵尊 トヨ

(5) 和 謳（原文のまま）

○頂礼世の中は、ろうじやう、ふじやうの世のならい、きのう生れて今日は早や、無情の風にさらわれてゐる。今も念仏で助け給えや地蔵尊 トヨ

○頂礼岩舟に水はなれど舟はうかぶ、舟は白銀、櫂は小銀鈴音、生死は掉のやく、地蔵頭顱がかじをとる、かね打ち、しよもくをかいとして、南無

の六字を？にあけて、うたう念仏でこいで行く、とよ

○頂礼子の谷むかんの太夫、安津盛（敦九）は十六才の花の春 とよ

○頂礼岩舟に水はなれど舟はうかぶ、舟は白銀、櫂は小銀鈴音、生死は掉のやく、地蔵頭顱がかじをとる、かね打ち、しよもくをかいとして、南無の六字を？にあけて、うたう念仏でこいで行く、とよ

よ
頂礼地蔵尊 何が所願で天降る、何も所願はなけれども、余り世間が邪見に念仏すすめに天下る とよ

○頂礼（以後この和讃上ナ南部落の和讃に同じ）

○頂礼七つ子が、柳の下で糸をとる。釜は白銀わく黄、銀糸あいとで運の

糸シテこれが地蔵のけさとなるとよ
○頂礼機業に、あかざの門が三つござる。金銀力であかぼこそ、南無の六字

でさらと、あくとよ
頂礼（他部落と同じお茶和讃）

頂礼参り来て、この家の屋根を眺むれば、九間八つむね、ひはだぶきと、
くねが松でもあるならば君の御前でめたかるべしとよ

五、柏木沢、今宮

地蔵菩薩の像は明治三十年頃迄菩薩をおそれで部落の世話人が家に安置し保管
したというが、たまたま火災に逢つて消失してしまい現在の仏像は火災後（明治
三十年頃）作られたものであると言う。

（祭 日）

八月一日より十六日まで今昔変りなし。

（内）祭りに参加する人
昭和十五年頃までは十四才より二十才まで。二十才の者が親方といつて世話を

をする。二十一才になると顧問として一年参加する。

○昭和十五年頃より今日に到る迄十二才より十五才まで、十五才を親方十四
才（三年次）十三才（二年次）十二才（一年次）と呼んでいた。

年令の小さい者は祭りの際燈籠を持ったり御輿をかつしたりする。三年次親

方ともなれば御輿について和讃を唱えたたりする。

（内）祭りに使用する道具
前述の部落に同じ燈籠（六本）太鼓、鍼、笛（現在なし）

燈籠を「さし」と呼んでいる。

燈籠に書く文字
今宮地藏連中

國家安芸、商売繁昌、養蚕栽培

（内）祭りの様子
五穀豊饒などと書く。

七月二十五日頃より集つて和讃の練習をする。八月一日朝一時頃燈籠、御輿
等を川に運んで洗い清める。川の水のきれいな時に意味で夜明け前に洗い



清めると言う。この願洗う場所は昔より決められているらしく例年同じ場所
で洗うのであるが、洗う物によつて場所が決められている。川上より御輿、
御輿に使用する物燈籠、燈籠の柄の如くなつてゐる。洗い清められた物を
午前中かかつて飾りつけを済ませ夕刻より祭りが始められる。御輿の廻る方
法は前に述べた部落と同じように部落の大通りを和讃を唱え乍ら進むのであ
るが、辻々に御輿を降り、休み此處でも社と地蔵や地藏和讃を唱える。近所
の人々は思い思いに供え物（穀物が主であり金錢）を持って来て參詣する。
この際お産が軽くなるようにと耕の布を御輿の幕に寄せる者も多い。新盆
の家や其の他の仏の供養にと和讃を依頼する事も多くこの時はその家の御輿を
運び庭先にて和歌を唱える。十六日の祭りが済む前に地藏連は各戸を廻り
寄附を受けるが穀類が多く古くは決つて麦だつたという。馬持ち二升、其
の他一升）、祭りが済むと十七日に地藏契約を行い部落の子ども達を招待し
て五目飯を振舞う。

現在は五目飯の代りにパンなどの供物として分ら与える。この際男児はもら
いにくるが女児は来ない。女児のいる家庭へは届けてやる習慣がある。

（内）和讃

○頂礼地蔵尊何が所願で天降る何も所願はないけれど余り世間が邪見さに念

仏進めに天降る とよ なんまいだ

○頂礼悔は散り桜は枯れる世の中に何とて松はつれなかるらん なんまいだ
○頂礼尋ねゆく吉野の山の色見草、花と木の枝に花は散る とよ なんまいだ

○頂礼七子が今年始めて田を種えて而も其の田の出来の良さ丈が七尺、穗が五尺、何とて小馬に八ほであるなれば、これを御世戸貯、七つ倉の番所が誰々ぞ、一に小雀二つにつばめ三つに鶴はととぎす とよ なんまいだ
○頂礼十七が柳の下で糸をとりては何にする、糸をとりては、はたにする、はたを織りては何にする、岩舟御地蔵の膳の網 とよ なんまいだ
頂礼悔若しらず東の土となるしに神をおいては三月十五日大念仏申す と
よ なんまいだ

頂礼八幡宮のお宮なり金銀金具で一光り、よろい、かぶとの光りやら、ご
くちくつろげは、なりあい刀の光りでしやかがやく とよ なんまいだ
頂礼地蔵ヶ谷にこぶこぶ岩其他名所の教知れず其の外種々の御岩こし
とよ なんまいだ（篠沢淳篠氏「上毛民俗ノート8」より）

北群馬郡榛 東村の民家

一、解説

ヒロマ型マドリ

こんどの調査では古い建築年代のものと考えられるものを村当局に選んで頂いて、當時教育



山子田 湯浅勢兵衛家（昭和27年撮影）

てきた本村が、混淆の度合が互に対等に混りあうのでなく、ヒロマ

型の根基があつてこれのなかで田ノ字型マドリが若干入りこんだという程度なのではないかと感じるほど、古いスマイという程のものがヒロマ型だったものである。

いうところのヒロマ型とは、クイチガイマドリ、不整形田ノ字（又、四ツ目）マドリと呼ばれるマジキリをしたスマイの呼び名である。図1・2などがそれに当る。

整形田ノ字型とは四ツ目マドリ、十字形マジキリとも呼ばれて、マジキリの境目が十ノ字形にしきられたスマイを指す。群馬県下の東部地方から中夫の南部地方が田ノ字型の地帯になっており、北部から西部地方に亘ってヒロマ型が分布している。その中間に当る地方が二つの型の入り交った地方なのである。勢多郡の南部から群馬郡の中央にかけて巾の広い帶状の地域が混淆地帯をなしている。日本においては東北地方から信越地方にかけてヒロマ型、関東地方の平野部から以西が田ノ字型、それぞれの地域によって粗密の差はあるが分布している。このようにみてくると榛東村のスマイの平面が、どのような位置に置かれているかが見当がつくわけである。そして実地に当つてみると、ヒロマ型の色彩が濃く浮いてくるわけである。

農家建てのスマイの平面は一般に長方形になっている。その長辺を二つに分して一方をドマ、他方を室の部分とする。ドマのがわから寄りつきの室を他の室よりも広くとる。そうした広い室すなわち広マがあるからヒロマ型の名前ができた。田ノ字型ではヒロマという程の室をとらず、その広さが平均している。一般に混淆地帯でのヒロマと他の室の広

さの差は大きくなないが、3・4・6・8帖の広さが普通の農家のスマイでの室である。これに対して、10・12帖などを作ると、梁間（奥行）の深が大同小異であるから、その室の裏が腰間室がせまくなる。このため室の境界が田ノ字形のような整ったシキリができるので十の横割が画る。本村で見たのは12帖が多かった。

ヤネ

日本の民家のヤネ型は三つの基幹型がある。切妻・四注（寄棟）・入母屋である。草葺やねでは切妻はあまり多くない。県下ではコヤ（小屋）か、草葺の棟にとりつけた煙抜きやグラの他に切妻は見られない。板・瓦葺では四注造のヤネが少ないと対称的である。本村もこの点例外ではない。

草葺イリモヤ（入母屋）造りは県下の東部地方では非常に少いが、この地方を除いた、他地方には散発的ではあるが多くなる。本村は、その棟の両端に煙抜きの小孔（ハフグチというには小さい）を開口したのも各地で見られる。イリモヤの赤ん坊で、まだイリモヤに育ちきれないとか五分の三とかいうところまでハフの脚元を下げた妻ハフのみごとなになれば、超大人であるがこの地区で、そんなのは寺社の妻にも見られない。赤ん坊に近いようなものハフグチの形が見られると、一応イリモヤ造りと呼んでいる。本村内のイリモヤも、數ではヒケをとらないが、赤ん坊程度から中供ぐらいまでのものだけのようである。

ヒラ入り

ヒラというのは棟と平行のヤネの流れをいう。ヒラの方からスマイに

出入するのがヒライリ、ヤネの方から出入りすれば妻入りという。信州の中仙道沿いなどには妻入りが多いが、県下に入ると妻入りはほとんどなくなる。本村でも同じで、みなヒライリである。

ツキアゲ（突上）ヤネ・キリオトシ（切落し）ヤネ・セガイ造り

ヤネのヒラを軒ばかり矩形に切りとったように葺き、コヤ（小屋）の採光通気を計つてヤネ裏二階にし、窓をつけたのがキリオトシ、キリオトシの部分にヒラ勾配より緩く別のヤネをつけるとオモヤ（母家）のヤネ斜面より高い軒になる。ヤネが突きあげられたようなでツキアゲヤネ。このヤネの附根は棟の下にあって棟を作らないが、もし棟を作つて、オモヤの棟の上にそれより高い棟ができると小棟をヤネ裏から突き上げたようになる。これはツキアゲヤネ。これらの構造でヤネのきり口や軒などに添う桁を出して、化粧軒裏や二階のユカを化粧材で構造したのがセガイ造りである。ツキアゲヤネと伴うものばかりではないが、県下では、セガイをツキアゲヤネ構造に附合したのが多い。本村ではツキアゲヤネの軒をセガイにしないで、二階ユカのダシゲタ（出桁）でトボの上から、表てエンガワの一部までの天井のあいだに小エンを作り出しうニカイダイといい、ニカイダイをセガイとよぶ。本村ではニケエダイの呼び名が行われる。

山梨県の西部南部、先年來有名になった富士五湖地方の忍野村など都内地方がツキアゲヤネの本場である。県下では三国街道（佐渡街道）を中心にして、両側一帯の地域にツキアゲヤネを見ることができる。利根川の東・多野・碓氷郡、利根・吾妻郡などに散発している。ツキアゲヤネの軒の両端には下から通しの柱を立て、エンガワ柱の間に一致させる。本村はツキアゲヤネのスマイの密度が県内ではもっとも高い地域の一つである。

建物の名どころ

同じ地域では建物の名どころの名称が多くは一致しているが、ときに

ちがう場合がある。下ダイコク柱という名、ウマヤの境に立ち上ダイコクと同じ面か、わずかにいちがう程度の位置に立つ。この下ダイコク相当の柱をショウコクと呼ぶのがあり、またザシキとゾウベヤの十文字境の柱をショウコクと呼ぶのもあった。この柱をショウジャ柱という家もあった。

名どころの呼び名は混同したり、脱落して消えたりすることが多い。年寄りがいなくなるとリレー収集の機会が少くなるためであろう。

一、マドリ

橋東村ではスマノのマドリ方を、ヒロマ型を基幹型として慣行されてきた。田ノ字型も行われてはいたが、ヒロマ型には及ばなかったと思われる。ヒロマ型は不整形マドリで、家の常居の室をヒロマとして広くとり、ネマ（寝間）やその他の室を從属的に附加したようなマドリ方をしたスマイである。

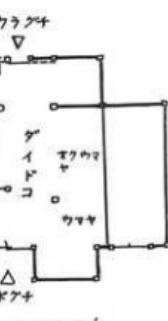
村内での管見によると、ヒロマ型のなかに3室マドリ、4室・6室マドリのスマイを見ることができる。この他に室があったかも知れないが、それは見ることができなかつた。2室とか1室だけのスマイは以前にあつたとしても、時世は移って、それらは既に絶えてしまつたものである。もちろん近年のいわゆる住宅と呼ぶスマイは本調査の対象としてはまったく考慮しなかつた。ヒロマ型の3・4・6室の例を幾つか拾つてみた。

ヒロマ型3室マドリ

新井地区征熊の真塩ヒデ家は標式的な3室マドリである。左ズマイ

で、ダイドコに接してザシキ12帖がある。これに隣接して、表てがわにコザ8帖、裏がわにナンド6帖相当がある。このマジキリでコザ・ナンド境のシキリはザシキの横腹に突き当るから境界は十文字形にはならない。片品・上野・六合各村の報告中にもあげたように、

クイチガイマドリの形になる。3室マドリが古い型とは言えないが、この家では古様のかおりが残つてい



(二階)

る。やはり新井一下新井)の羽島定七家が、いまは田ノ字型4室マドリになつてゐるが、その寄りつきの帖とその裏がわの6帖は、当初は2室に分れず一つの室になかつたかと思われる。この仮定によるところは3室ヒロマ型となつて、真塩家の場合とよく親近な形となることが考えられる。なお別項に記す湯浅敷兵衛家にはスマイの背面に中門突出部をもつているが、真塩家でもわずかであるが背面突出部をもつてゐる。ともにカツテ・ダイドコの部で、上越線沿いの新潟県内でカツテ中門とよぶものに当る。真塩家が、三国街道に沿つた地にあることから一応関心をもつことが許されると思う。

小林祐吉家と高橋伝

一郎家とはアガリハナをマジキリして室に昇格させている。本村のなかでしばしば他のスマイに見たところである。



写真2 真塩ヒデ家庭
【上】オモヤとドゾウ正面
【中】
【下】

アガリハナからの転化であることは、上ダイコク柱の位置が、豈

數の室の端になくて、

豈の室に開われた位置に立つことでもわかる。アガリハナを豈敷として、ドマダイドコロに括げる例は養蚕地帯では普通にみるところで、勢多郡の芳賀・下川淵村では多數例を採集したことがある。このためにトボグチの大戸が開閉に支障を来し、大戸を廃してトボグチを移動して普通のヒキドに換える。小林家も高橋家もトボグチが動いたことが、ウラグチの延長からはずれて、ケイマとびの位置になっていることも知られる。

右スマイ、左ドマのスマイ(図2の2)も室の呼び名は大同小異である。一倉英雄家ではザシキの裏がわの他でヘヤと呼ぶのをオカツテ4帖としているが、もしかすると筆者の聞きとりもがいてあつたろうか。一倉七五郎家のゾウベヤ、清水六太郎家のオクリノマは他でオナンドと呼ぶのが多い。英雄家と七五三家でオナンドは他で多くはヘヤと呼んでいる。これらが小異に属する。青山ヒサ家は往年水沢親音の往還に面して、當時旅籠渡世の家である。ここではシヨウコク柱という名があり、これは室の方にあるのでなくウマヤ柱の列のうち、下ダイコクに相当する柱である。

図2は4室マドリを集成した。図2の1は左スマイ、右ドマのスマイである。図2の2は右スマイ、左ドマ、図2の3は左スマイのスマイである。狩野孫次家(山子田・倉海戸)小山元吉家(新井タボ)は室配置が酷似している。架構上ダイコク柱の位置と、オセヤとゲヤの取り合せ関係にわずかな相違が見えるぐらいである。狩野家のヘヤは当初ユカ(床)がなくドマであったといふ伝承があったそうで、複元的に考へると、本村の古いスマイの様式を伝えているかと思われる。むかし、この村のスマイがドマを常居としたことが、江戸時代のどの時期に相当するか、本村、ひいては山東麓地方などの住居史を解明する鍵を投げている。

室の名称は3室マドリと似たりよつたりで、ザシキの裏がわのナンド・ヘヤと呼ばれる。ヒロマといつてもザシキは12帖10帖で、そう広くない。ヘヤが4帖、県下の他をみてもヘヤ4帖が多い。六合村ではネベヤと呼んでおり、この室の発生した当初の機能が実名称になつてゐる。ヘヤはネベヤの省略であろう。

図2の3青山敦俊家は、右ドマ、左スマイであったが、そのドマの方を現在の箕輪・赤川線の道路敷とされてけずりとられた。このドマの部分が雑貨店のミセになつた家、もと酒屋でもつたので、よりつき15帖の奥に8帖、6帖がある。この家では西エンがカネノテに室を廻る様式で青山ヒサ家や6室マドリの家に見ると同じ性格である。

コザ・オクノマにトコ・タナが、アカリハナ方向に向いており、ヘヤ・オナンドにはコザをへだててニワに向いたトコ・タナがある。タナはほとんど袋ダナでチガイダナはどこのスマイにもない。またタナが、

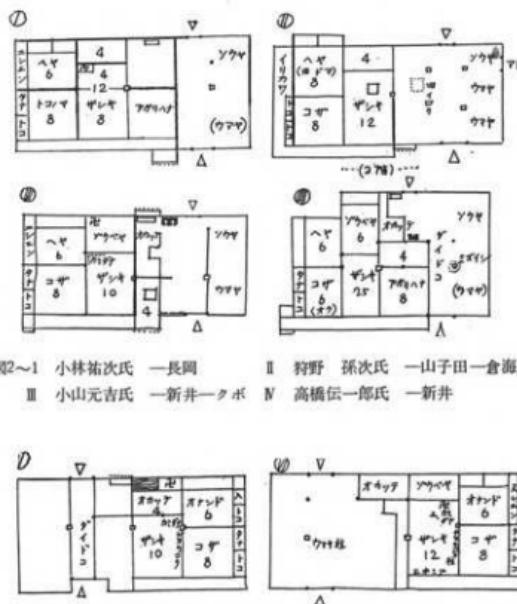


図2~1 小林祐次氏 一長岡
Ⅲ 小山元吉氏 一新井一クボ

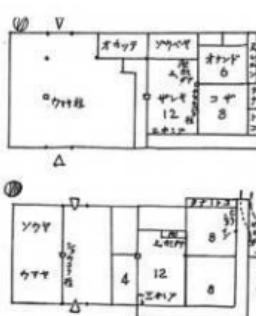
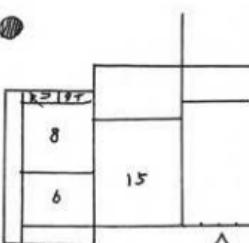


図2~2
V 一倉 英雄氏 一広馬場一南
VI 清水六太郎氏 一広馬場一南
VII 青山 ヒサ氏 一柏木沢一宿

図2~3
IV 青山 敦俊氏
一柏木沢一宿



オシイレになつたのも処々でみた。
ヒロマ型6室マドリ
このマドリのスマイとして、山子田湯浅弥兵衛家の旧スマイを逸することはできない。既に取りこわしたものであるが、記録だけは残したい。広い蔵に囲まれたこの家は榛名山麓の村々で特異な風格を示してい

た。
木造葺葺、二・三階造り、ヤネ大ヒラの前面に向う千鳥ハフの棟をみせ、その下にツキアゲヤネをあげる。オモヤの棟に対してその上に十文

字に棟を乗せる。この棟の背面はカブトヤネで2階マドをあける。2階上に中3階を置いた。

建物は南北向き、右ドマ、左ズマイ、カブトヤネの部分は前に述べたようにカツテ中門の突出部である。

表てがわにザシキ・ナカノマ・オクリ、その裏がわにヘヤとオクノマがある。ザシキは16帖もあるが、これは最初2室で12帖4帖であったのが一つの室になつたものであろう。オクノマの西からエンガワが廻り、

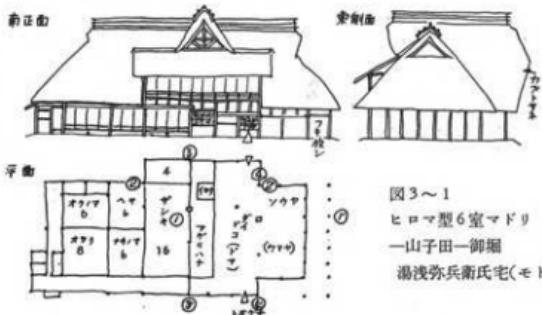


図3~2
ヒロマ型6室マドリ
一山子田一御堀
湯浅元江氏宅

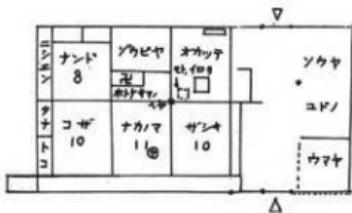


図3~1
ヒロマ型6室マドリ
一山子田一御堀
湯浅弥兵衛氏宅(モト)

南オモテの方へカネノ手に通つていて、裏がわの中門突出部に4帖とカツテがあり、ダイコクのドマ統きに表てのトボグチに通じる。トボとウラグチは対称の位置にある。

オクリにトコ・オクノマにトコ・タナがあり、オクリのトコの奥ユキが浅く古様を示している。中門ふうの突出部は邑楽郡板倉町のマガリとは幾分ちがい、上越線沿線の新潟県中南部地方に見るカツテ中門と同様の様式に近い。この部分は当初のものか否かは疑わしく、後補に成ったものとも思われる。突出部の棟がオモヤ棟と十文字に置かれるが、この方が上位にあり、同時に棟あげしたというより別の時期にあげたとみることがしぜんである。

中門突出部を除いた平面は、後記する隣ヤシキの湯浅元江家のスマイと酷似したマドリになつていて、元江家ではヨリツキ14帖、ゾウベヤ4帖とマジキリがしてあって、弥兵衛16帖が、12帖・4帖であったことを示唆している。

元江家は6室を、ヨリツキとゾウベヤ、ナカノマとヘヤ、オモテザシキとジョウダンと呼んでおり、家格を室の呼び名に残している。

ヒロマ型マドリで共通に気づくことは、クイチガイ部分の柱マを1ケン(間)にとつたのが多い。他の地方で半ゲンのものが多いために比べて土地ふうなのである。ダイコク柱の位置が、室の境から少しづれているのも他地方と幾分ちがうことである。上と下のダイコク柱が同じ列にある家では棟も表てがわにされている。それでオモヤの背面のゲヤが広くなり軒が低くなつてくる。

田ノ字型4室マドリ

田ノ字型4室マドリの地帯が、末端地区になるに従つてだんだん少くなるようとする場が本村だといつてよい。その末端の性格を示すようなスマイの例があつてもいい地域である。図4は不備な図であるがそれに応えたスマイである。

【上】ヒロマ型の広馬場一倉家
ダイドコの上とオカツテ



図4~1

田ノ字型4室マドリ

- I 山子田一神田 高橋 滌氏宅
- II 新井一下新井 羽鳥定七氏宅

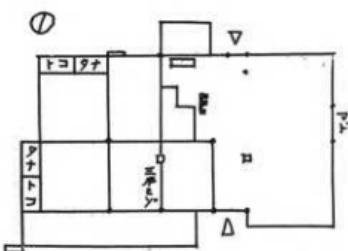
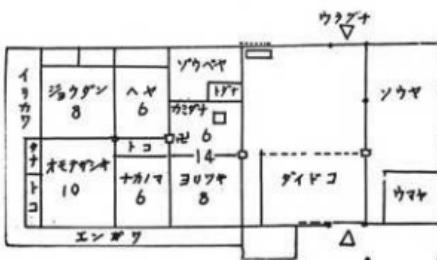


図4~2

田ノ字型6室マドリ

- 山子田一御堀 小山重見家



【下】田ノ字型の新井 高橋滋家のゴザとナンド



高橋滋家は山子田神田にある。アガリハナが室の形に昇格しているほかは、普通に見る田ノ字型である。注意すべきはダイコク柱の位置である。なぜ室境の交点から半ゲン後ろに下げて現位置から1ケン後ろに立てなかつたのか。図4~2小山重見家のマジキリがその疑問に答えているようと思う。もしこの答えのようにマドリが変るか、または、もとそうあつたのが現状に変つたかであるが、高橋家はヒロマの匂いの残る家である。

新井下新井の羽鳥定七家(図4)も田ノ字型4室になつてゐるが、同じように考えられるマドリである。

室の名称はヒロマ型のマドリと、ほとんど同じである。

田ノ字型6室マドリ

山子田御堀小山重見家が一応6室になっている。ザシキ・オカツア、ナカノマ・ホトケサマノヘヤ、ゾウビヤ、コザ・ナンドと組みあわさつている。ナカノマとホトケサマノヘヤは別室にしてあるが、当初は一室であったと見られる。また、ザシキは、最初のアガリハナを抵して壁を改めて、改造したものである。裏がわがオカツアで、ダイゴク柱の位置がザシキの反対位置にあるので、本村マドリの慣行からも室の呼称は6室マドリの呼称を転用してきたものであろう。それ故に小山家の当初のプランは4室であり、ナカノマとホトケサマノヘヤは一室で、つまり16・4・10・8のヒロマ型であったといえよう。

ヒロマ型マドリのザシキ

ザシキとよぶ本村のヒロマは、調査の範囲では7帖から16帖までの畳数で、12帖の場合が多くた。標準が12帖ほどで、それ以下はヒロマ型としては狭い部類である。古い建物では柱シンシン（真々・心心）6尺か、6.5尺で2寸はキヨウマ（京間・本間）の寸法である。

ザシキに仏壇と神ダナが下の戸棚とカモイに張った棚が上下に置かれている。表てがわに正面を向けるのが多くみられた。湯浅元江家で仏壇が東面したのと、小山元吉家の神棚がカギノテに吊つてあるのが特例であった。

コザ・ナンド

コザ・ナンドには、みなトコ・タナがつく。トコは6尺ドコで奥行の深さは3尺が普通である。なかに2尺ぐらいの浅いものもある。コザをトコがあるからトコノマという小林祐吉家、ナンドは奥にあらうのでオクリノマという清水六太郎家、オクリが湯浅弥兵衛家、ザシキをオモテザシキと呼ぶ湯浅元江家もある。しかし多くはコザであった。

ナンドとヘヤは同数ぐらいで、湯浅元江家でジョウダンと云つていたが、上段にはなつていない。タナはほとんどみなフクロダナ（袋棚）で

表1スマイの概観

	ヤ キ	ド ラ	ヘ ヤ	室	トコ 所 在	フ ク ロ ダ ナ 所 在	書院 造作	仏 壇 向 き	神 ダ ナ 向 き	ヘ ヤ の 小 間
新井 真下ヒデ	草屋二階	一	右手ヒロマ	3	ヨザ	ヨザ		ザシキ	南	
長岡 小林集吉	* *	ツキアゲ ナキ	*	4	トコノマ	ヘヤ	トコノマ	ヘヤ	*	*
山子田 肇野孫次	* *	二段フキ アゲヤホ	*	2	ヨザ	ヨザ	*			
新井 小山元吉	* *	ツキアゲ ナキ	*	*	*	*		ソク ベキ	南	ザシキ 田と風。
* 高橋伝一郎	* 平家	ラ ツキアゲ	*	*	(オタ)	(オタ)				
広場 一倉英雄	*		左手	*	トコナンド	ヨザ		ナカ ツテ	南	ビシ 南
* 一倉七五三作	*		*	*	*	*		ザシキ	*	東 スレイン
* 清水六太郎	* 平家	*	*	*	オクリ ノマ	オクリ ノマ				—
池本沢 青山ヒサ	* 二階		*	*		6	6 ヒラシヨ イン	12 ヒラシヨ イン	南	西ユネ カネニ 通
* 青山教俊	* 平家		右手	*		8	8 ヒラシヨ イン			ダ
山子田 湯浅弥兵衛	* 三階	ツキアゲ ラ ツキアゲ ナキ	右手	6	オクリ ノマ	オクリ ノマ	オクノ			ダ
* 湯浅元江	* 二階	キヨタ シ	*	*	オモテ ダナ	ジヨウ ダナ	オモテ ダナ	ジヨウ ダナ	東 ヨリ	ダ
* 高橋滋	*		田ノ字 型	4	ヨザ	ヨザ				—
新井 羽鳥定七	* 平家		*	4	ヨザ	ヨザ				—
山子田 小山重見	* 三階	ツキアゲ ナキ	*	6				ナカ ノマ	南	ニシム

表2 スマイの名どころ

	ウマヤ	オタク	フクダイ	トコロ	アガリハナ	タタキ	カツチ	ザシキ	船	そのうちがね	ナカノマ	そのうち	コザ	そのうち
新井	真下ヒデ	ウマヤ	オタク	—	ダイコ	アガリハナ	—	オカツチ	ザシキ	12	—	—	コザ	ナンド
長岡	小林 錦吉	+	—	ツワニ	+	8	+	—	12	4	—	—	トコノマ	ヘヤ
山子田	狩野 孫次	+	ウマヤ	+	+	—	—	—	12	4	—	—	コザ	8 (ヨドイ)
新井	小山 元吉	+	—	+	+	—	アガリハ	4	オカツチ	10	ゾウ	6	—	+
+	高橋 伝一郎	(ウマヤ)	—	+	+	—	8	+	7.5	+	6	—	+	6 (オカ)
広島	一倉 英雄	ウマヤ	—	+	+	—	—	—	10	オカツチ	4	—	コザ	8 オナン
+	一倉七五三作	ウマヤ	—	+	+	—	—	オカツチ	12	ゾウ	4	—	+	8
+	清水 六太郎	(ウマヤ)	—	+	+	—	—	カツチ	(ゾウ)	8	4	—	ナカノマ	ヘヤ
柏木沢	青山 ヒサ	ウマヤ	—	+	+	—	4	—	12	4	—	—	8	6
+	青山 敦俊					—	—	—	15	7.5	—	—	6	8
山子田	湯浅 佐兵衛	(ウマヤ)	—	ツワ	ダイ	トコ	アガリハ	—	カツチ	ザシキ	16	4	ナカノマ	ヘヤ
+	湯浅 元江			+	+	—	—	カツチ	ゾウ	14	ゾウ	5	ナカノマ	ヘヤ
+	高橋 浩					—	8	—	—	6	6	—	—	8
新井	羽鳥 定七				ダイ	—	—	—	8	6	—	—	コザ	7.5
山子田	小山 重見	ウマヤ	—	ツワ	ダイ	トコ	—	オカツチ	—	10	オカツチ	ナカノマ	ゾウ	ナンド

チガイダナやジブクロ（地袋）をつけた家はなかった。ナンドの外がわにエンをつけて、左スマイの家ではニシンエンという。右スマイの家では妻がわをトコ・オシイレにした一倉英雄家がある。この場合背面にエンをつける。このようなエンガワの中でニシンエンなどからコザのトコの背後をまわって表てエンガワに廻る家もある。青山敦俊家、狩野孫次家、湯浅元江家、青山ヒサ家、湯浅家は江戸時代の家格のニシンエンのところをイリカワとした狩野家、湯浅家は江戸時代の家格の名残りを伝えたものである。

これらマドリに関連したこととを表にしてみた。（表1-2）

二、ヤネ

古い建物という注文で見て歩くうちに気が付いたことは、言い合せたように草葺であったことである。古いとは言うものの江戸時代の末から明治にかけてのものが多い。例外は湯浅弥兵衛家の江戸初期と見るべきものだけで、真塙ヒヂ家、羽鳥定七家は中期までがようやくといった処でそれも無理があるかもしれない。それが草葺なのは古いスマイの慣行が、草葺に多く遺存されたという偶然であろう。薪材料は茅場がなくなつたので麦藁がこれに替つた。

村を概観して瓦葺とトタン葺の切妻が少くない。草葺ではイリモヤ（入母屋）造りの比率がかなり重く、四注（寄棟）造りは最初考えていたよりも少い。比率を数えたのではなく、感覚的にイリモヤ地帯と言いうほど目に入つてくるのである。妻のハフが割合に大きくなるのもこれも感受のしかたからであるかも知れない。湯浅弥兵衛家（現在とりこわし）のオモヤの妻ハフと、正面ツキアゲヤモニ上に聳立する向う千鳥ハフ、関谷塚の柳岡一男家、神田所見の家、など立派である。妻ハフは薬のハフグチを少し反りのある木枠で囲い、三角形をこしらえただけで、

ハフ板はほとんど使用していない。だから拌みにゲギョ（鰐魚）を吊るといったのは皆無である。ただハフダチに蓋をするという程度で、キツレ（木連・狐）格子も見られない。棟は杉皮らしいもので抑え、これを

- ⑤ 一山小田 柳岡 一男家
(煙抜きヤグラとフキアゲふ)
うになつたキリオトキヤネ
- ⑥ 一広馬場 一倉家
(一段フキアゲヤネ)
- ⑦ 一山子田 御堀所見
(切妻造の妻の二重架と見セ)
(スキ)



丸竹で留めたのが多く、浅見一郎家のような棟の頂上にカサギ（架木） ようのものを、その末端を反り上らせたりしたのは大へん少い。棟の納まりも箱棟に造ったのが少くこの部に板の小さい合掌をつけたのが多少



①



②



③



④

⑦ 写真 4ノ1 屋根

- ① 一山子田 湯浅弥兵衛家（正面）
- ② タ 猪野 孫次家（ケエドから フキアゲヤネ）
- ③ 一長岡 小林 瑞吉家（人母屋ハフ）
- ④ 一山子田 湯浅 元江家（キリオトシ）
(ヤネ)

見える程度、なお棟端に島留りなどという舟形の小片ををつけた高橋家
のようのも少く、利根川の東にどこでもつけているのに対照して地域
差は僅かな距離内なのにこんなに大きいものかと思わせる。



写真 4 / 2 上左 上右 中左 中右 下左 下右	入母屋造一屋根一煙抜き —広馬場宮室 小林多作家の大きな屋根と煙抜き —山子田神田所見 グシイツムイの煙抜きとハフ —広馬場 清水六太郎家のハフ —新井八幡所見 煙抜きとハフ —柏木沢下之前 田島伊勢雄家の煙抜き 同家
--	---

ヤグラは大小さまざままで一つあげたもの二つあげたもの巾が棟の大部に亘るものなどで、高橋滋家や柳岡一男家のものは巾の広い例煙抜きのなかには、イリモヤ造りのハフもこの類にはいるが、そのほか、ヤネのヒラ中途に横巾の広い一字形のものある。広馬場下之前の田島伊勢松家の道端で目につく。勢多郡各地にも見えるから分布は広い。

ツキアゲヤネと
キリオトシ

湯浅秀兵衛家のオモヤの表でヒラの向う千鳥ハフの開いたトボグチといふアゲのマグチ(間口)は6ケンほど、そこに5ケンの窓を開いた。トボグチ元からオモヤ軒まで出たツキアゲについては構架の項で触れたい。ツ

棟にあげた煙抜き

ヤグラは大小さまざままで一つあげたもの二つあげたもの巾が棟の大部に亘るものなどで、高橋滋家や柳岡一男家のものは巾の広い例煙抜きのなかには、イリモヤ造りのハフもこの類にはいるが、そのほか、ヤネのヒラ中途に横巾の広い一字形のものある。広馬場下之前の田島伊勢松家の道端で目につく。勢多郡各地にも見えるから分布は広い。

てみるツキアゲと同じような造りである。外がわに小エンを設け、セガイ造りとしていることも記した。棟下から直ちに起るツキアゲヤネは浅見一郎家ではコヤニ階でなく、普通の二階建のよう天井も高くなる。養蚕農家は建物の一部改修で得られる二階の利用価値に双手をあげてとびついた結果、キリオトシとともにたちまちに普及した。高橋伝一郎家は吾妻部下に見るよう、北裏がわヒラにツキアゲを造り小山重見家ではヤネヒラの表て裏にツキアゲを作った。両面のものは、弥兵衛家のものと同じ構想に成る。浅見家のツキアゲヤネはヤグラと一体になる一步前であるとも考えられ、このよな形は毎能と向い合せの群馬町内金古間瀬年丸家に見られ、一般に三国街道に添う地域に分布する。この形からはツキアゲヤネができると思われる。前橋市箱田町・川曲町・群南村西大類に既にその例がある。

一般に分布圏の一地区に限られるものもあるが広域に亘るものもある。ツキアゲヤネ・ツキアゲムネの様式は広域に亘る類である。

キリオトシも広域に亘る範囲で、県内各地方から、甲州郡内地方にまで広がって、ツキアゲヤネの分布圏とはほぼ一致する。本村内ではキリオトシが少いが湯浅元江家のようにキリオトシとしたのがあり、まだ目に触れないものもあると思う。

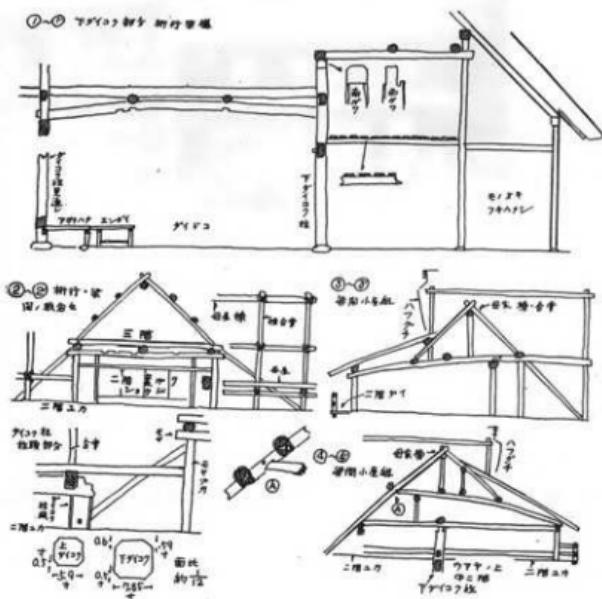
カブトヤネ

四注造りの妻を半ばきりおこすとカブト形ができる。弥兵衛家のほみごとであつた。ヤネの表てヒラをきりおとした場合は、両妻と背面でカブト形になる。この類が村内にある。

三、構架

草葺ヤネのスマイは、在来のしきたりで、ワゴヤ（和小屋）組とする。建物のケタニギ（桁行）がわを中央から二分してここをダイコク柱

図5ノ1 御堀 湯浅弥兵衛家（架構見取り図）



を中心とした柱列を立てる。その一方をドマとし他方をユカ上の室とする。ドマの部は壁がわから1ケン半のところを、リョウカン（梁間）方向に仕切り、下ダイコクを含む柱列を立てる。この二つの柱列のあいだをドマとしてダイドコという。側方をアガリハナとカッテとし、下ダイコクの列をへだててウマヤ・オクウマヤ・ソウヤと対する。ダイドコの

表にてトボ、裏にウラグナを対称の位置に聞く。

このダイコク・下ダイコクの柱列は、外壁の列柱とともに、桁・梁と組合せて木材として建物の軸部骨格を形成する。梁は梁間方向のものも、室の天井裏にも組んであって、二階以上の部分を支撑する。この大きな荷重を承けるために古くは掘立ての柱であったが礎石を下におく石場建が行わるようになつてみにこれにならつた。本村で現在掘立ての柱はスマイとしては見ることができない。

ダイドコの上部の桁・梁は、化粧材として下から見上げることができる。一筋二筋の梁の場合もあり、5-6筋も架した場合もある。湯浅弾兵衛家には6筋通してある。

柱と梁の連結は、オリオキ（折置）組としたものあり、キヨウロ（京呂）組としたものもある。古る家には折置組が多く用いられていて、ワゴヤの常としてチョウナハツリが行われる。カンナをつかつた梁は一本もないと言つてよい。

瓦葺でもワゴヤを組むのが普通で、その切妻造りの妻は梁やナカビキ（中引）牛染しの木口をミヌキ（見せ貫）の上に、白漆喰の壁面から出す。ナカビキの7寸8寸、ときに尺に及ぶ巨材をみることもある。こには二・三重梁をシンシ梁として反つた曲線を見せることもある。

湯浅弾兵衛家

この家の構架はも早や見ることができないので、記録しておきた。図5) ドマの上には桁行方向に6本の梁を通す。下ダイコクにホゾ（枘）留めになった渠はダイコク柱の柱列の上の大きな桁に載り、その外がわを通る一筋、またダイコク柱にアガキ（合欠）で接する一筋は、この桁を越えザシキも越えている。これらの桁と渠の面はチョウナハツリで木肌落したウネリのある巨材を用いていた。そしてこれは興家建のワゴヤに共通した手法である。ダイドコ上で渠の下面にシグチ（仕口）跡が残っているのもあって（図参照）、以前にそこに柱があつたものをどの時期かに修理して取り除いたものと見られる。それがいつ

の事なのか修理の回数も伝えられないなかつた。

コヤグミの中は二階と三階で、マジキリをしていない。下ダイコクの柱頭二階ユカの上に少し出ただけで、モヤ（母屋）を繋いた梁についている。その柱頭はホゾを出していているから、二階の現状以前に柱頭を入れた梁が通つたわけである。下ダイコク真上にオモヤの棟の端がある。妻の下に、表てがわのモヤからノボリ木が斜めに上つて、水平材の役割りをしている。これによって柱と東の省略がしぜんに行われていることは珍らしい。上ダイコクの柱頭もモヤ東のあいたの繋ぎ渠に達して終つている。上・下ダイコク柱はそれれ不規則な面取りで、面比12内外、面を意識してチョウナをはつたものか、つまり計画的に造り出したか否かはわからない。

合掌はモヤ・ヤナカ柱を獨立らげで留めている。ウマヤ二階と二階のユカは、板を並べて張つてあるが三階は竹スノコにしていた。

ツキアゲ屋根は5ケンの窓を開いており、背面の中門突出部の二階にそのまま繋がつていて。その壁面に2ケンの窓を取り付けて、採光通気をはかっている。

オモヤの棟の下に近いモヤからツキアゲヤネは棟を出し、その軒桁に付く両側の柱の表てツラ（面）はエンガワ柱のオモテヅラ（表面）と同じ面にある。

通柱の列

弥兵新家のスマイのコヤ組と異り、下ダイコク・上ダイコクなどの柱がコヤの二重渠に達したのが幾例かあり、他の地方の多くのスマイに見られない偉觀を呈している。（図5ノIIとIV）

IIは真塙ヒデ家の場合の見取り図である。棟に届いた通柱は県下の平坦部では全く見られないものである。特に変つているのは、下ダイコク相当の位置に、ウマヤビタイトでもいう大きなシキバリ（敷渠）から立上つて棟に達した柱である。地上に脚元がないので通し柱としては不完全であるがこんな例を他に見ない。ダイコク柱とザシキ隔柱はともに棟



写真6

ダイドコの構架 ドマカラの見上げ

上より

一山子田 湯浅弥兵衛家
(下ダイコク柱部分構架)

同上家 (ダイドコ天井見上げ)

一新井籠能 真塙ヒデ家

(写真のウマヤビタ
イに立つ柱は樺木に
とどいている)

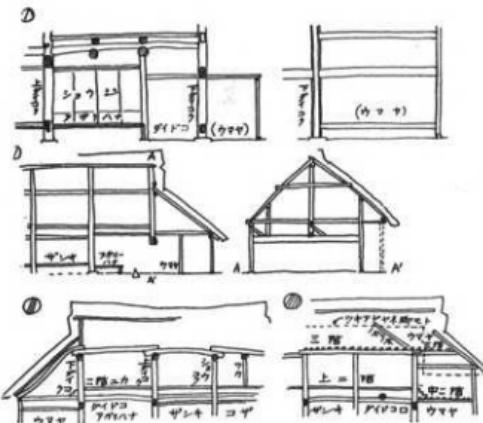


図5の2

- I 一長岡 柳岡一男家 (架構見取り図)
- II 一篠熊 真塙ヒデ家 (")
- III 一南 一倉英雄家 (")
- IV 一山子田御堀 小山重見家



に達している。その下ダイコク相当柱の梁間断面は同図の右で、ヌキと脚元とに短いスジカイが取りつけてあるが、これは後補である。また桁行方向の断面はその左図で実地に見たのは、この一例に止った。

IIIは一倉英雄家の例で、下ダイコク・上ダイコク・ショウコクが仲よく、コヤうちの中梁に一列に並んで届いている。中梁の握手は素朴な繋ぎで、それがモヤのあいだの一重目の梁に載せてある。中梁のウマヤがわ

妻ハフ下の繋ぎ梁は下ダイコク柱から一気に妻の壁付き柱の二階梁へ身をうねらせて飛び降っている。まさに降り竜の壮观がある。

Nは小山重見家で、一倉家の場合に酷似している。一倉家の降り竜がこのスマイでは水平の繋ぎ梁となつてウマヤ三階を支えている。上二階はダイドコからザシキにかけて、ウマヤの上は中二階。それらの上に三階とウマヤ三階がある。二階三階に呼び名をつけたのを聞いたのは一倉家だけであった。

ナカビキの高さにまで柱頭をあげることによってコヤの中は上が高ま

り、二階として使用できる広さがずっと拡がつてくる。

ツキアゲヤネ

エンガワがゲヤ構造になつてゐる農家が普通であるが、ツキアゲを設けると、エンガワ柱の柱ヅラ(面)がツキアゲヤネの軒桁の面が同じ面になる。通しの柱ができれば、二階梁からのダシ渠梁ではあってもゲヤ構造の渠と桁の取付けが緊密化してくる。ゲヤと軸部の性格が交りあつてくる。構架の骨格が変つてくるこの点をもつと突きとめたいと希望したが、エンガワはモヤの外にあることだけしかわらなかつた。

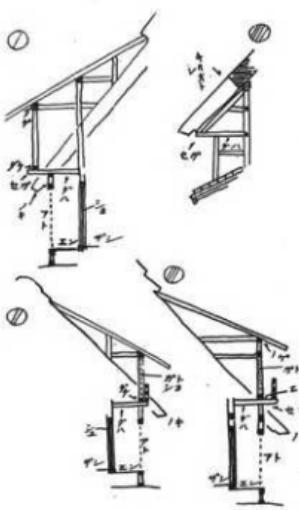


図5ノ3

ツキアゲヤネ・キリオトシヤネ	
I 小山重見家	アト=アマド
II 小林祐吉家	エン=エンガワ
III 浅見一郎家	ガード=ガラスド
IV 湯浅元江家	ザシキ=ザシキ シヨウ=シヨウジ セガ=セガイ ダケ=ダシゲタ ダハ=ダジバリ ノキ=ノキ(軒) ノゲ=ノゲタ

セガイ

ツキアゲヤネの部分が、エンガワ平面を含むとき、一階に小エンを設けると、エンガワの柱のソートヅラ(外面)を越えて張り出すことになる。この場合にはダシゲタ(出渠)を設けて、先端にダシゲタ(出桁)を支承させる。ダシゲタ下面は化粧ヅラとなる。この構造がニケエデエ(二階台)と呼ぶセガイである。本村にはツキアゲヤネが多いのでニケエデエのセガイが大へん多く見える。ツキアゲヤネでなくとも、キリオトシや、オモヤ軒廻りにダシゲタ構造のセガイが散見する。湯浅元江家のキリオトシの写真にそれがよく現われてゐる。

柱

湯浅弾兵衛家のダイコク柱が面取りで1/2ほどの面比のことは構架の項で既に記した。チョウナの刃の当り方で少し面をとりすぎたのかも知れないが、それでも古様の柱で、江戸時代初期を下らない。小林祐吉・狩野孫次两家のダイコク柱は青山ヒサ家のとともに七ツ面より少

し強い面が取つてある。

上ダイコクはカンナをかけたかと思われるが、指の感触ではチョウナに近いのもあって江戸時代の末期の年代差は分明でない。チョウナがカンナよりも古い工具であつてもカンナかけの柱よりも新らしいチョウナはつりの柱はその例に乏しくない。ただカンナの流通が緩徐だったので、チョウナはつりを古いとする考え方陷入りがちである。越後大工の系統に属する県下の大工であるから、越後三条の大工工具の歴史でカンナの産が極めて乏しく、カンナが拡

写真7 ツキアゲヤネ

→
浅見一郎家

小林裕吉家



小村祐吉一家

が案外に古くない場合もある。柱の名称が幾分混線していることは既に触れた。ただし柱のこと注意すべきは、ダミコタ柱の後ろ寄りのマジキリに柱がありそうなと思うに、柱を省略しているのを興味をもって見た。一倉松三郎家、清水六太郎家、高橋波家、高橋伝一郎家がそれである。

室境のカドを半ゲンほど離れて前後に柱があるのに、柱のない場をカドにとったり、これは構架の問題からはずして考えることのようである。

コヤ

がつたのは明治以来というほどなのであり、県下でのカンナ普及が遅かったことは考えられる。この点からも柱にしても古いと考えられるもの

ほしいことである。妻のがわの壁面のほかに體体が少いのが農家建のヒヨクな点でもあり考へてみる要がありそうである。

サスと梁でトラスを造るが、繩からげで留めてあるのがある。欠き口へ納めてホゾばめしたのもあるが、大きな木口を用いても堅牢さは留め口の固め方にかかる。それと、スジカイやヒュチ梁などがコヤだけではなく軸部一般に

古い頃の大工技術は手抜きがない。用材の適否にも敏感であり、用材の元裏、腹背の使い方もきびしい。それが素朴な構架に比して長い星霜に堪える建物を作るに成功したのである。古い頃のスマイを見てしみじみと思う。

四、ヤシキ

湯浅弥兵衛家は南面した表てを除いて、三万に竹藪をめぐらしている。セドに土蔵が二棟、東に雜舎が3棟、オモヤの北と南に整然と建並んでいる。竹林のなかの東方に、水の潤れた濠址がある。底まで竹と



写真8

(上左)一新井 高橋伝一郎家のニワ
(上右)一柏木沢・宿 青山敷茂家の

モチオクリ

(中下右上)一山子田 湯浅元江家(ドボ
グチわき庭機格子)

(下右下)一柏木沢下之前 田島伊勢堆
家(タケシ)

(下右)新井工匠 浅見光包・光父
子墓

雜木がはびこり、浅くなつた。南北に長く続いている。背面の竹林のつきたところから畠となり水田となり、その北に御堀の小字の家々がある。ヤシキの東南は畠が広がり舌状台地のへりになる。このへりに添つて、高くなつて土塁が東西に亘る。元江家はこの一画のなかに弥兵衛家の隣ヤシキとなつてゐる。

多くのヤシキ構は榛名山麓の辐射谷が小藪になつた疊波状の丘や段々

畠のあいだに横える。大小の沢水が谷あいの田んぼの傍を流れ、谷の底を削る。一つの地域の幾軒かのヤシキは、この地形に寄り添ふから、西から東へ、また東南へヤシキが連なる。山麓といつても、そう烈しい勾配はない。ヤシキの占地はスマイの周辺にゆとりをもつてゐるのが多い。宿の水路に分岐する辺りのように道の両側に矩形のヤシキが列に並んだものもある。

清水六太郎家の場合は東南向きの道に沿うたヤシキで道路からすぐにカイド、左ドマのオモヤ、ニワの前に外便所、蚕室、オモヤ東に雜舎があり、ニワを凹字状に開くように並び、セドにはカツテの後ろに井戸、ヘヤの後ろにやや離れてヤシキ神の稻荷様を祀つてゐる。

高橋伝一郎家は南向きのヤシキ、右ドマのオモヤのニワをケエドがトボに対するようすに南にあって両わきに二階建蚕室など、オモヤの東にシモヤ農具舎、西にドゾウ、セドにオカツテの後ろに井戸、西北の隅にイナリ様、背後にヤシキ林がある。

ヤシキのなかの建物配置、ケエドの位置、生きグネやヤシキ境の木立などは以上の例が概要の説明になると思う。

本村新井には一七八〇年代から一八三〇年代まで宮大工阿佐美出羽光包がいる。沼田市の河内神社社殿、前橋市光嚴寺の秋元家廟所などの建築にたずさわった名工である。その父出羽光金も宮大工であつたが事蹟が明らかでない。神道状を受けて、門弟も取立てておる人物であるが、こうした人の手に成るスマイが、村内に残つてゐるのはないか。父出羽光金は天明元年（一七八一）に歿し、出羽光包は嘉永元年（一八四八）

に歿した。浅見一郎氏の先祖に当り、墓碑は同家の墓域に並んで建ててある。

この人々の遺したランマ彫物、繩形などがどの家にかあるいはしないか、スマイの意匠についても注意を向けたが好例にめぐりあいができないかった。

（矢島勝）

資

料

船尾山縁起

(近藤義雄氏本)

揚も其後、僧天文を考見るに、夫仏淺からず、妙なるは満月かと、數おとろふるときんば、金中月かかる、厭みれへ家の業となる世の為に、爰に下總國の住人桓武天皇九代の後尾千葉次郎忠常の御子息に、千葉左衛門常政寺、弓取老人御座す、常陸下總安房上總四ヶ国の大将にて、けんほうのともしひをかゝやかし、國を治め給ける、揚又家の執權にわ、すきみのくわんしや仲光、三浦將監重友、馬場小太郎是清、上總五郎元統、其外あまたの郎等共、何れも道を正して、君を敬ひ給ひし、目出度かりける次第也、是は擬置常政殿御代（以上は「新井屋山縁起」に次がある）、一船尾山本地由来記（上）、雖あらざれば、是心の靈りとなりて、残るゝ事もしたれど、平勢（下）より被へる。

柳のぞる風に、えてみたるゝ我心のふいかに北の方、我々へ身の上ほたんの花のさくごとく、束のミとりあらされば、うきよのたのしみあらされば、明日もなるならハ、元取切て西へなけ、代おいとわんのたもふ者て、御代所へ聞合、みづからも諸共ニ心かわらんときの、ちとせをいとわん身なれども、代治のなきこそ無念也、これそきよよといつゝ、後代のらん申共、これそはたいにさわらんと、西やさらになけれど、常政殿も諸共、なくより外の事へなし、かゝる所へらうどうの中も、はさまくらんど中光申様へ、なげかせ給ふぞやむべんらん、上野田船尾山ニ立せ給ふ親世音は、れいけんあらたにまします也、九十七ほう三十三身おあらわせ、しゆ生の道あり、願をへ、たちまちに叶せ給ふ、とうけ給、是へ御願を立、然るべしと申上ハ、常政聞合、それハ乞きまほしき事にて有、其義ニ而為ならハ、其親世音へ參らんと、供人あまた船つれ、御代所諸共ニ、上野さして登ると急がせ給ふける程に、上野ニ聞へたる船尾山ニそつき給ふ、御前なりしかば、みたらせ川ニ而こりを取、わに口丁と打ならひ、南無や仏前花の左右ニわつかの宝ヲかけ、南や大ひの親世音、男子成共女子成共、子種をさつけたび給へ、南無慈悲の親世音さつた、とかんたくだいし折りかかる、揚夫々も、中光へ國の御とさん次第ニニ送らる、されハこそとよ、常政手うふの今ハ七日こもりても更ニ利しやうもなかりける、二七日も御じけん

し、三七日ニもしるなし、中光いかにと仰ける、中光うけ給、かようなれば、れいけんあらたる迎なき物とう給、御心の内ニハ候得共、百日までハ御こもり被遊然るべしと申ける、常政けにも思ひ、其義ニ而も有ならハ、百日迄へこものべし、然者別當しよくの出来ニあわんと仰ける、南谷の吉神坊龍出、親世音の御もうりをへ、拙僧が仕候と申ける、常政御らんじて、いかに御僧、此山へいつの代、何ト申人取立候そや、かたつて聞よと仰ける、吉祥坊うけ給り畏て候と、そもそも此御山に申へ、其ミけむりが獄とぞ申也、然奴に人王五拾代桓武天皇の御宇、唐天台山へ渡らせ給ふ伝教大師、延暦廿四年ニきてうましまして、ほとんど平勢へ天皇大同年來をし立てる、弘仁六年さがの天皇御時、大備ハ上野へ下向有て、其時此山御覽ましまして、是に寺りやうくわん、法華經を千部造、仏法の都となさんと思召、其比、上齊國住人に群馬太夫満行とて、関東八ヶ国の大將也、居城へ間近國分也、かれを顧んと思召、満行やかたへ入らせ給ふて、件の願仰ける、満行元るちひ第一の人のなれハ、寺ハ御望ニ立まいせんと、そま取立ばんじやう山へ上、此上山の黒神山ニて木材切らせ、武蔵の國の牛車七拾五疋、上山木材お引取、弘仁六年建立、同九年ニ成就せり、先本堂ニ親世音、きやう堂、しゆらう堂、東二ん堂ニ西二ん堂に、七堂がらんにたつ也、伝教大師聞召されハ、山へ登らんとて、満行お供なへて登らせ給ふ、つゝんで先親音堂へ入給ふて、天台山渡らせ給ふ。くうじやうばさつの御作也、ゑんぶたのんの親音、此山しやか如来と也、宮殿ニなおし給ふ、御ひかりばと過たまよ、御堂の内金色ニなりける、誠ニ難有次第なり、比へいつなるらん、かうに九年巳亥三月廿日事なれハ、代宗ゑん日是也、揚夫夫も本堂へ入給ふて、寺の次第御らんじて、金色玉をちりばめ、心も言ふ不ぞ、大師御よろこびへかきなし、いかに満行御身のゆへ、我が命も今こそじやうじゆたりける、われかたしとのたまへ、満行うけ給ふ、難有と仰ける、然は審も此寺へ御知行御付申さんと、上野へ、野都直筆書判を調、伝教大師面と並上ける、大師不辭に思召され、あらば山おあらんだめんと候へ、般舟等覺院柳沢寺とがうす、かうに九年ニかくをうたせ給ふ、夫三年も通行ハ、さつし覚頭お被御付、惣し候へ、大師あまた御弟子立供ないして、都をさしてのぼらるゝ、其時の座主がも今此ゑんじやく座主迄廿一代、其内ハ仏法の都と榮ける此山の物語是也とぞ申ける、されハこそとよ、常政ふふふの人々へこもらせ給ふける程ニ、九拾九夜とこもるる、今夜かきり

の事なれば、よく信心きもにめいじ、猶大切ニもぐるもあり、難有の親世音へ

八十の老僧と現じ、まくらがみに立候や、いかに常政、なにを折る、心すへし

ニ、大せん世界ニ子種ハ多しと申せ共、なんじさづく子種ハなし、早々かいれと

有けれハ、常政夫婦夢中ながら、枕を上げ、こなさけなき御むそのうかな、子種なくんば我々が命を取てたまへれど、即ち元ニふしにける、親世音聞合、なんじニ子種のいわれを語之聞せん、故が前生ハ越後國の妙けち山のふもとなる、子種の大じやなるが、夜ハ山口わけ入、けだものをぶくしたる事、いく千万のかずならず、妙けち山の阿ミた如来、あまりびんに思召、阿みだ經一巻かの池口なげ入、其くどくにて十六の角十四もげ、二角残り、武蔵国喜多夫といふ者え、たけぞの牛と生せん年、此寺立ル時ニ、上の山木才木本お引、森泊をなかしつゝ、腹痛ひやぶり白あわはいて死たりけり、材木引たるくどくニ而、今常政とへ生るゝ也、森泊ハ小金山、白あわハ白金山、左方みつれ共無望、歌のむくいニ面子種ハさらになりける、はやく帰れとのたまひて、けすかことくにうせに給ふ、夫よ夢さめ、かつはとおき上り、こななき御夢かな、よし夫とても是非もなし、つたなきごこうこそうらめしや、としづきをまつまける、御代免の仰にわ、いや／＼國に居りまし、むなしく帰る事共へ、我々夫婦の共へ、さいごうふかき事そとて、浮世の人にいわんべし、南無大悲の親世音、とても千子ヶ無きゆへニ、命を召したまへれやと、たれをふしてぞなきかゝる、常政ハ枕上ヶ給ふ、いかに北の方、ふかくなくも、何事も前生のこうのわざなれハ、うちみる方へなきぞとて、御代所をいさめつゝ、一しゆの哥説給ふ也

頼たてむなく國へ帰りなハ

身より仏の名はいがよせん

と、かく十六よまれたまふ、御代免説共に
前生につたなきごうのなかりせハ
命をすてゝ何にいのるらん
と説給ふ、常政殿も諸共ニ、しばしまとみ説ける、汝が只今哥の心、我もかんしたたりけり、おう／＼子種おさつけんと候へ、金色の玉、常政がゆん手のたもとなげ入給ふ、此子十才か十五才の時分としてなん、あらんかとの給ふて、かけすことくニうせにける、夫婦夢さめ、かつはとけき上り、難有や難有やと御跡を三度らいはいして、御宮殿もひらくれへ、急て帰らん諸共にとて、さよめき

わたりて、東国さしてそ帰らるニ、常政夫婦心の内、嫌しかりける事共、中々争斗なりける。

二巻目

去る程ニ常政夫婦の人々ハ、國帰り御屋かたに入せ給ふて、御一門あまたのろうどうあつめ、ケ様の次第とて、御さかつきおたまわりける、人々目出度御盃ををおしたゞき、次第次第ニまわりける、上中下ニ至る、祝事へかぎりなし、さればこそとよや、月のさわりニせきわわり、七月八九月と申ニ、御さん(ひもをと)き給ふ、御子取上ヶ見給ふハ、玉の様なる若君様にておわします、御祝へかぎりなし、かゝる處ニ船尾山より吉祥坊室案内、中光ニ対面仕、いつぞや御参詣、後打たへ候ニより、座主も申通り、御機縫伺ひニ参り候と申ける、君ニも御出ませまして、吉祥坊跡らしや、此方ガ使者の立候に幸イの御出かな、此若君へ名を付て給われて御ける、吉祥坊侍へ候とて、先祖滿の生れなれハ、相満をかたとり、相満とお付給ふ、柔の弓ニゑむき矢をつた、四方にあくまをはらい、しゆぢやう長をん、万葉長をん、萬葉長をんて、若君多く奉る、常政此音召、あら御前ニ申す御召、やと仰伸る、吉祥坊御いとまこいして、船尾山へと帰りける、かくて若君御成長、よに月まさり、日ニまさり、かうしんやの主也、五歳七歳打過て、早十歳になり給ふ、去程ニ常政殿ハいかなる山へも登せ、学文をいたせんとをもふがいかにとの始ふ、中光承り、幸伊船尾山の御本寺也、是日御登せ可然にと申けれる、常政けにも思召、先達使者を被遣、吉日をゑらみ、はかま小袖を改め、のとに者近藤丸内を被仰付、若君様をおこに乗せ、供人あまた御差ぞい、船尾山へ登山す、日かす五日と申ニわ、船尾山そ着給ふ、先達御使者ニ申相まし折から、御登山日出度とぞ、先御さかづきを給へりける、我君様ニ御づしんてもやうたい致し、座主立帰させ給へ、是を酒盛の始として、次第へ廻りける、さればにや相満殿、利こんさかし世にすべれ、一字をならへ二字覚へ、三字を覺り、文筆のことへにわ、まひに残れる事なし、宗文のたけき事、覚頭ニもすれたり、去程ニ相満殿、昨日今日ト申共、何月重なりて早拾金ニより候、ゆふゑんくわひニましまして、御すかたハ春の花、御かおはせハ秋の月、三拾三相御よそをひ、見る人きく人をしなべて、恋せぬ人へなかりける、されハこそとよ、山中の法印立の方とも、ふみ玉づさのかよう事、雨やあられのふるごと哉、御前ニつめ共御説まします事なし、是夜寝んだに打むか、しよしやくおか

んがくおわします、かゝる処へ座主が御法使來り、此間は相満殿、文文の氣附有
へし、^(一)「もとの華の盛成由、ちこ者人共ないて、花見致されよとの仰せと申ける、
九内承り、是々難有次第也。」^(二)是主へ宣誓奉願候と申されて、夫^(三)仕度致し、ちこ
立^(四)先として、^(五)ふもとのはなしと聞へたるは、是^(六)現實、爰^(七)又深み主け^(八)と申者
有^(九)誠^(十)其古へ老丈の牛たるが、物^(十一)ばつせん也。然によ落て今ハ浪人の身上
船尾山^(十二)相若^(十三)とて、万人ニすぐれたる由、^(十四)わび成ち^(十五)このましますよし承り候
と、ひとしく恋風^(十六)難成、心花をさそへてたゞほんぜんと難成処^(十七)、今日かの
ち^(十八)ふもとの花見御出の由承り、我も是丘花見に行、何卒御目にかゝり、

御^(十九)成共あづからべやと存る也。いかにやわこ共、おしとふくふもとさして上
らるゝ時^(二十)、近藤九内^(二十一)へまくの外、けいごの役^(二十二)出居たり、^(二十三)處に主けい^(二十四)はつた
と合え^(二十五)、何人^(二十六)候ぞや、くる敷わ候^(二十七)、花見^(二十八)ミ儀^(二十九)と申ける、人のけ名を
聞へ、我先祖お語るとや、自分ハ深み主けいと申浪人也。近辺^(三十)宿宅いたし難あ
り候が、いやましのまゝに花見^(三十一)出で候が、其元様ハ何人に候や、九内聞で、自
分近藤九内と申ものなり、少年のち^(三十二)花見出し故、けいごの役能有と申、^(三十三)撰^(三十四)
左様に候か、我をとまくの内へ入てたまわれと申ける、いや^(三十五)それ叶^(三十六)ざる
事、主けい重て申ける様^(三十七)、たび^(三十八)ハ道連れよなきとや候得共、たがいの義也、
こひねがわくハ入てたべと申ける、いや夫^(三十九)何と仰候共、叶^(四十)ひかたし、たゞ
是^(四十)て御なぐさみあれ、かの御台手にハ難成^(四十)しと申ける、主けい切^(四十)ハ力な
し、およ^(四十)ざれハ^(四十)三面花見申さん、然共酒を持参仕候が、自分初てそれへ参ら
せんと、引継^(四十)／三こんほし、九内殿^(四十)參^(四十)せける、九内お^(四十)した^(四十)き、引受
／^(四十)はすから^(四十)、主けい申様、今日は珍敷花の野也、花にハ一首^(四十)つけ申さん、た
んざくお子付^(四十)られる、九内引^(四十)承^(四十)ける。

こひにおもるゝ心ゆかしく

是^(四十)はな^(四十)の哥^(四十)なし、月見の哥なりと申ける、いや^(四十)哥人は月裏花をハ
一^(四十)とい見る、其心をよむと申也、九内^(四十)／＼かんか^(四十)、いや^(四十)月ハ我君
様^(四十)差て也、我を^(四十)云^(四十)たとえて申ける、主けい聞て、能^(四十)かんかへ候ぞや、御
へん様なるな^(四十)もしらぬ愚人お^(四十)、雲にも縫かくと申也、九内聞て愚人とわ、

吉くいなり、其口引せ給ふなど、たちのつかに手をかくれば、主けいも心得た
り、とゆふまゝに、両方ぬき合すでにかうよと見へる時、兩人の間に大石落て、
たかいのたらニ受^(四十)とめる、ふしきやな、其石武^(四十)にわれて、中^(四十)が^(四十)ま^(四十)い、あらわ
れ、我^(四十)は船尾山^(四十)立^(四十)ける観世音也、汝らがおんをすくわんため、是まであらわ
れ出たり、いかに主けい、相満若帝人^(四十)にあらず、かならず心よする事なれば、宮
内^(四十)も相満^(四十)と供^(四十)を以、早々寺へ帰^(四十)へるべしとのたまふて、かきけることくうせ給
ふ、兩人難^(四十)有御跡^(四十)三度らいはいし、主けいへ里へ下りける、宮内^(四十)も相満^(四十)を供^(四十)ない
て、御寺差てそ帰りける、かの観世音の御文難有共、中々申斗りける。

三番目

撰^(四十)も其後此山^(四十)住給^(四十)天狗集^(四十)つて申ける様^(四十)、相満をうばい取、月に老虎の舞を
まわせ^(四十)見物するならお^(四十)、五^(四十)三^(四十)ね^(四十)まね^(四十)かけれど、常々心にかくれ共、山の
行^(四十)力強^(四十)れ^(四十)、通^(四十)飛行も難成、をし付山王の祭礼^(四十)者、見物に氣をとられ、山
々行^(四十)力をこたへし、其時迄またんとて、天狗^(四十)ハ其假^(四十)かく^(四十)ける^(四十)去^(四十)程^(四十)、船
尾山^(四十)ハ毎年吉祥^(四十)とて、卯月廿一日の祭りにて候、ちのまいとて聞へける、
一座主初^(四十)奉^(四十)見頭衆トもに至^(四十)達^(四十)、皆々見物^(四十)出給^(四十)、撰^(四十)も^(四十)四百四人の内
^(四十)而くわひ成也、ちこ斗^(四十)拾五人^(四十)ゑらひ出し、相満殿^(四十)を初メとして、各々^(四十)持東
ニ袖をつらねて、ぶたぬへ上り、あふき車^(四十)足^(四十)びやうし、たいこつ^(四十)み、びわ
ことの拍子^(四十)を揃^(四十)舞^(四十)けるハ、面白^(四十)かりける次第なり、舞^(四十)も中半の事なるに、船尾
山^(四十)の方^(四十)黒雲^(四十)一村たなびきて、間近く來^(四十)と見へしか、ちやう夜のやみとなり、
其時^(四十)くだんの天狗^(四十)あらわれて、相満若をかいつか^(四十)、上の山^(四十)へ昇り、日本の内
ニ置なら^(四十)、座主^(四十)かぢ出されん^(四十)ハ、じじ^(四十)うや^(四十)也、唐^(四十)こし金さん寺^(四十)の天狗^(四十)のた
り^(四十)、ふかくかくさんと、天狗^(四十)ハ其假^(四十)かく^(四十)ける^(四十)撰^(四十)こそ元の星^(四十)となり、是^(四十)はふ
しきな事そとて、ちこ^(四十)をあやしめ見給^(四十)へ^(四十)、相満殿^(四十)ハなりける、一座主初^(四十)
仰^(四十)ける様^(四十)、此間山^(四十)行^(四十)力をこたれ^(四十)、天狗^(四十)のわざと見たり、座主^(四十)か一句^(四十)しめさ
んとて、御寺さして帰らる^(四十)、寺^(四十)もなれ^(四十)護摩壇^(四十)上りける、じゆさら^(四十)／＼
とをしもんで、ひじゆつをつし給^(四十)ふ、皆々法印立諸共^(四十)、しゆ事有^(四十)いく間首

折の段

うの妙くわん、大人さんふくん、日輪月輪、すせうのはし、中ニも天ハ二十八し
く、地の三十六きん、九万八千かな山神、下界の地には伊勢か神明天照皇大神
宮、熊野ハ三社の大権現、王城内五ヶ国、大和國加茂春日の大明神、東海道尾張
の国、わ、あつた大明神、伊豆の国、わ箱根三鶴両社、東山道、わ信濃國、すわ
上下両社大明神、上野国ノ一ノ宮二ノ宮三の宮皆社有、北陸道七ヶ国、國、わ上下
みたき明神、山陰道八ヶ国、石見国には白山大明神、南海道六ヶ国、は、さのぎ
國、は松世大明神、西海道九ヶ国肥後國、あみの宮大明神、總而日本國中五き
七道の内、まします、大小の神祇をしそうじおどろかし奉る、只今行者のいし
ゆを、しゆこせしめ給ふ、大小無大小の神祇とない奉り、きんせいとうぼうニ
さんせ明王、南方ぐんだりやしや明王、西方ニ大とく明王、北方金こうやしや明
王、中王大聖不動明王の利けんお、なげかけ玉へ、悪りやうま王のせうけなり
共、こんしんきらぬ事あらじ、かうまくばさうだせんまだ、かなしやな、そわ
たやらんたう、はんと、不動のしゆおも度／＼くりかけ／＼くりもとし、夜重日
重折りと申ことも、更印もなかりける、日本の内にましませば、何の子細か可
有に、唐土にまします事なれば、何と折ると申共、其かいさらにはあらされば、折
りおやめ、そうぞう一とにさらりとやめたりける、座主わたらんをりさせ給ふ
て、ハヤクはのびくとする事にあらじ、はや／＼下總へさいたし可然とぞ仰
ける、人々畏て候ど、出家式人どうしゃく三人、下總差て下りける、夜日に着
て行程、三日三夜と申にわ、千葉駿毛、そ着けり、是ハ船尾山の御使僧と申
けるハ、中光対面仕、君はかくと申上れハ、常政聞召、是ハ珍らしの使僧急キ對
面まします所、御使僧申ける様、今日十日いせん、毎年の嘉例、山王の
御祭り、ちこのまいを仕候が、いか成天まのしゆ行やらん、相模君へ見たまわ
ず、いか様天狗のわざならんとて、座主に三千百坊とくわいて、七日七夜祈して
も、更に印もなかりける、去程、我々是迄参り候なり、宮内殿、も參られよと有
ければ、しうおうしない、何とて國に帰るべしと、じめつ仕候と申、泪おぞく
どこぼしける、常政殿は聞召、きも心もきはてしが、さすがに常政殿の弓取
が、我子うしないたりとゆうとも、かなしむふせい見られて、口をしかりなん
と思召さ（思ひぬてい）にもてなしける、いか様天狗のわざなら、座主のひじつお
つくさせて給ふな、終は帰り申べし、偏、座主の御祈禱を頼み奉ると、仰ら

れて玉われや、渡印たちとぞ仰ける、法印たち畏て候と御いとま仕、船尾山江帰
りけり、かくて常政殿ハ御代所打むかい、かやう／＼と語りける、御代處比由
聞召、それハ夢かやうつゝかや、とそれをふしてなげかる、御そはなる女郎立
も、それハまことか、かなしやとどにわつとこそを上、西やさわらとなげきけ
る、常政殿も諸共、せきくの泪にむせかへり、つらぬく玉のこととなり、落る
泪の隙よりも、くどき事こそあわれ也、来年の暮の比ハ下願引下し、ミかどへだ
い致せん、くわほうがり申さんと、思ひ定し事のはの、皆夢にくちはてよ、
かゝるうなきなる事へ、いくたるてんの印そと、さしもたけき常政も、たをれ
ふしてぞなき給ふ。

（ウラ白紙、半面）

御代處も諸共、なく外の事わなし、落泪と共々、くどき事こそあわれな
り、いつそや船尾山のほせたる時、はかまのそはたけ高して、おとなしかほの
わすられ、星夜山をもかけ目で見上るにかび、やがて対面しては、さそや嬉しく跡
すべしと、長き日お相傳、今へあわびのかたの事ひ、あらなつかしの相満とり
うしこがれてなげける、復又有べき事、あらされ、先方われに引給ふ、さ
れべこそよと、船尾山、て相満殿おぞとられつゝ、七日七夜のおこないに、少も
印あざられ、今のおこないむくなり、何と折申共、相満かへるこそ、はんに
やの金もつきまとて、山、おこないなかりける、去程、山の天狗集りて、今は
通力發行也、ゆうひなるちうぱい、取相満のつれせんとて、次第／＼取程、
十日程が其内三四四五人取たりける、復又残るちご立、皆々里へ下りける、東
國から郡、衣衣部式部太夫と候へ、中仙道開森なるが、若おは思こうふかき者か
子なれへとて、首尾おぬきどり、もくろおへすて置ける、そびき金めとゆふ鬼に
なし、ちごもほもしも取くらひ、船尾山の大難義是なり、皆々かんせぬ者こそな
かりける。

四巻目

去程、船尾山、田子供うしない候もの、大勢集申ける様、如何様まんのわ
ざ、是者有まじき、しゆと心のたけくして、ちごもんどしの其上にてかくして
ハ、がいすと覚へたり、其證にわ、式部太夫が若を首ばかりくし、もくろう
おば残しけるたあり、しゆとのわざにまきれなし、下總迄もれ聞へ、憶々有

ければ、中光、君の御前へ罷出、この義かよう／＼と申上る、常政ハ聞合(付)され、けに／＼夫とさもあらん、相満が生付諸人（すくね）へすぐれ、さたに紛レへ有間敷、然者

船尾山へおし寄せ、店主を打とらんとて、都合其勢三千よき赤はた七りう、おび

たゞしく上野へ聞へたる國方の宿おと打満て、原にこそへ着給ふ、其原にちん取

人、馬の都合も成ける、去ニによつて、其気を今の代までちんばとこそへ申也報

置船尾山一面は、此事體へ聞つたへ、西谷の悪魔坊地（ごく）がやつたの悪さんミハ、

山々武人の大力、此人々先として、一山の法印たち一ツに集りて、いくさの

ひょうじよう取り／＼なり、興うがいをかまへんとて、高々臺余り作たく／＼か

こい、峯のでぱり切だいらば、急にやぐら／＼上ヶ、引所の寄場（おとし）をしをつら

い、高々所寄場（へ）、ミねに大石大木（ごく）、どうづきをしらし闇、最早ようがい、

出来たりけり、やらい致せめん／＼とて、小金とうの大よろい、一両重るざつく

とき、上おびてうどしめ、ひやくだんみがきのするあて、とらのわののみた

びお、あくつたかひ、はいたりける、五人ばかり、十五足おたつさへ、しづ／＼と

出けるハ、小山もうごくこととなり、揚又我ばんと思さんミキ、すぐれて申出

りける、小さくらおとしの大よろい二両、重できたりける、かの舟はたんのはい

立し、白がねミがきの出る有様ハ、熊のかわけ足袋はき、四人ばかりに十三足弓

と矢たづさへ、すみ出たる有様ハ、一恵申しのごとく也、後ニ統て法印立も、

思／＼の装束（そく）田口こそ出たりける、悪魔坊はやぐらの上ニ、大おん上てよば

る様、只今夫立江おし寄始ふハ、いか成者へ有けるぞや、是ハ天下にかくれ

なき、船尾山（わてき）へなし、つと孟（モ）有べき其種哉やと申てる時に、大勢

の中より、駒一ちん（一）かけ出し、やくら先立つゝ上り、大おん上ヶて名乗（な）

ハ、只今妻へおし寄せたる大将、何なる者と思らん、事もおろかや、下總國の住

人（人）くわんむ天皇九代のかうるん、千葉の左衛門常政也、かく申者ハ常政かうるど

う馬場の小太郎氏清と申者也、早々座主を渡されよ、さもなき物なら、一山の

印番人もたすかるましと申ける、悪魔坊聞て、ゆどが是に有ながら、何とて座

主を渡すへし、のぞミならば軍念ゆとの家の者、出ものミせんとゆみまゝに、五

人ばかり十五足、おつとりかゝりと引つかひ、しおつてちやうとはなす、矢ハ一陳

にすよみ出たる馬場小太郎かむな板に、はつしと立ておし付ヤ、くつと質的に扣

たる中沢小次郎が、目てのひきはらふくらしめて立たりける、是を軍の手初とし

て、千葉殿の方のぐん兵とも、矢さきをそろいて居たりける、かく悪さんミも、悪魔坊と諸共差取居たりける程、わづかの間へくつきやうの兵お百人耳いをとし、ちかく寄せてわあしかりなん、屋ぐら上る兩人一所にとんでおり、互に目と目を見合て、金ぼうおつとりて、たいせいの中はわけ入、西や東と南や北、両手がくなり十文字、ばら／＼とながたをす、わづかの間、し人山をそつたりける、兩人一所ニ落合し、ばら／＼いきをそつきにけり、かゝる処は、常政が郎等三浦正けんと名乗り出、悪魔坊と渡り合、上総の五郎と名乗て、悪さんミも、合、大刀打ニッ折折して、よくくまんと兩人老度（むん）むんすとくみ、ゑいや／＼とおし合ける、法印立の力つよかりけん、兩人一度と取てふせられ、武人の首お水もたまらず打落す、切先（きさき）つらぬき、小高き處にかけ上り、常政殿等三浦正けん、上総五郎を悪魔坊さんみが打取たり、いくさわがうどとする物也と、まいまをつてぞ見せにける。常政是を御覽して、あれ打取れめん／＼、とさいをとり直し、かゝれ／＼と下知をなす、大勢ぐん兵共、一度とつと掛りける、かく寄てへあしかりなんと、かこいの陣へ引て入、かいぜ戻せと呼掛け、かこの間近（ごんきん）おしよする、時ハよしと心得て、しつらひ置しどうづき、そこかしより切手はなせば、落花みじんと打ひしかれ、手をい死人の数れず、爰かし此の落にして、五十騎百騎（よつよつ）とおとせば、死戮りの者共、あわてゝ居たりしをりふしに、一山の法印たち、切先そろへて打出す、爰をせんとたどよかいて、さしも寄てわ三千よきと申共、どうづきをとしに気をとられ、居たる五六百騎、折立られ、ついにかなわずと思ひけん、路を見すして引けり、去々依て其所を引間の里と申也、されへこそとよ、常政殿いくさに打まけて、かゝる所は船尾山（ふねおじやま）にて、子供ではないけるおや兄弟しんないの人共、此度千葉殿御加たん申さんとて、間の内に五六百騎の加勢付、常政此由御覽して、最早是にておし寄せなは、何の子細有間接とて、都合千武百騎にて、ミあひをすかさずし寄て、時の声をそとらげる、船尾山（ふねおじやま）ハ悪魔坊さんミも、かねてこしたる事なれハこそ、日の夢事らぬ、油断してそ居たりける、此度のいくさにハ、す百人のてきを打とゆへ共、勝利おゑらるゝ事なりかたし、只打死の心掛、出、よくとさいをふる、みな／＼取物も取あい、我も／＼と切出、てきとみかたか入みだれ、安おせんどよたかいかける、此度のよせてわ、手合に國の者なれハ、案内をしりすまし、谷（や）もミね／＼も道お付、安かしこ入込で、口々火お掛、やがて本堂一

火渡り、炎のまんもへ立たり、けむりへう長天に上り、天地がすみも參り、
おひたゝ御有様也。振又のこりえ法印立、火の内正飛入やけける、目もあてら
れる次第也、振又くわん世音わ、御堂は火渡りと見へしかへ、則山に飛せ給ふ、
ひかりはなつておわします、難有かりける次第也、まことに昨日迄と金玉おちり
おめで、仏法の都とさかりける玉のうてな船尾山も、夢まほろせのごとく也、
元原にぞ成給ふ、かゝる処はくだんの天狗あらわれ申様へ、最早山。おこないな
れ、相満おれかへし、常政=「目あわせんと、せつなか内=つれかへしゃ、ふ
てのさせ雲々のせてぞ出しける、相満若お雲々くれないの扇子」て、まるかせ給
ふ、いかに常政おへたれかとおもふらん、相満て候也、此間天狗の所京=て、
唐土金さん寺の天狗のだいり=有けるが、只今帰てう仕、是まで參儀也、げんざ
いの対面は是迄と、よく見做給ふとて、三度よばり、雲の内=ぞかれける、
常政此由御覽して、口をしの次第かな、かくとわ夢=もしらすして、おくな
れい地れい仏を、ことぐくやきはらい、むりやうおつかうの事なれば、よに
ならしてせん、とくくちがいたさんとそ、常政殿の門より三十六騎の人々
ハ、北野谷ニ取こもり、常政被仰ける様ハ、いかに中光事ハ国正帰り、爰の
次第をかたれとて、方との品に渡される也、中光承り、此口をき御上、いか
なさいこの御供仕、何とて國へ帰るべし、是非御供仕らんとしきり=願い候得
共、いや／＼さいこの供ふも、國正帰んがからなり、はや／＼と仰ける、中光
由を承り、力およばぬ次第也、なく／＼國正帰るける、三十六騎の人々わ、最早
思ひおく事なし、皆じがひひしたまゝける、去ルに依、北谷をべ、今の世に至
迄、じがい沢ト申也、ともかくも三十六騎の人々、さんおみたした有様ハ、ち
しおなりしその有様、きせん上下おしなへて、いんせぬ者こそなかりける。

五段目

去ゝ程、諸事のあわれをとめしハ、下總におわします御代所=とめたり、
相満若の事共を、あけ暮り忘るゝ隙もなし、それのみあらず、常政のいくさの次
第、あんづくもてに懇お思念、泪くれておわします、かかる所ニ中光來ハ、船
尾山の次第始メおわり、御み方の有様を御代所の品々お包に申上、御代所ハ聞
召、夫は誠のかなしやとの給ふの下よりも、心地乱ましましてや何いかに中光
よ、船尾山正相満お登せる時にも御事ゆへ、常政殿の隣立も、汝がすすめしゆへ

なれば、智恵のかたきを被仰て、すでにかくよべ、守刀おぬきはし、さあのがさ
じと打かゝる、女郎立をしへだて、先々御心をしつめさせたまへど、よく／＼か
んげん仕る、やう／＼心おしづめ給ふ、御代所の給ふへのふいに女郎立、先あ
んじて見結ふや、漸くもふけし相満を封、天狗ニとられてわかる也、常政殿
に過おくれ、ミづから何と可成々とて、女郎立にすかり付、りうてこがれて
なきたまや、女郎立も承り、どうり也、御所と我々も御代所と諸共ニ、兩君様
過おくれ、世につたなきわぶしの末便のあらん事、何と成々へき身のはてと、
皆々一度=たおれよし、しお上テてぞなけける、御代所も諸共ニ、又さめ／＼
となけかるよ、かゝる所へ中光申様、先此へおくおさせ給ふとも、其かしさに
ましまさず、急御びぐにの身とならせたまへ、両君様の御ともらいを被成候て、
可然と御づしんで申上る、御代所ハきしめし、おつるなみだをとしとめ、けに
それへ尤也、なげくわまよいの事ぞかし、がみ／＼おをろし申さんとて、ぼだい
寺へ使者をたて給ふ、急々御しやうも來りつゝ、御代所の黒かみお四方の淨土と
そり下し、すゞ染衣をめし、女郎たちも諸共、皆々かみおぞをろしける、振御
やう／＼、御いとまこい仕候らせ給ふよ、時に御代所の仰にわ、最早思ひ置事なけ
れハ、急々船尾山のふもとえ行、常政殿と相満が、ぼだいの為=寺の立、御代所
んりう仕らん、女郎立も中光も、其心得て有シとて、先つかたわらへ立寄て、た
びの装束被成ける。

進行

わうじはごきのおしめで、すけの小笠の面かくし、たのむ者=ハ竹のつへ、住
なれ給ふ居たたをぞ、泪だと共に立出、ことにあゆみならわぬたび装束、振よ
中へういてんべんの有様也、又後おたのしむみづから、かく成べきとわ夢しら
ず、たけひとしき黒がみを、四方淨土へのたり内せめ、「こよまだい、いとし
心もしゆしやうう也、何とて、心ゆめしゆうほどに、のふと宿=着給ふ、夫まくがを難所
へまよいの雲もはれやきて、しん夜の月をかがやかせ、しゆうじやうさいどの
身とならん、きよくすむべきが又、ほんのふにからめられ、きもつらきも日没所
也、泪道渡するへにそがせ給ふほどに、のふと宿=着給ふ、夫まくがを難所
也とて、いさかい中=通の行んとて、ふとの浦舟船に乗り、譲うつ浪=こき出し、お
きはるかに見せお、りうしの船へかすしれづ、あや／＼とまるるうろくすも、無り

やうのかずのはてへと、思ひやられてふびん曳、かういんへんらのことばお、一
しゆの筆によまれる

うろくづのおもひや天につうじけん
はまべあらへなみにとしれん

とよませ船ふぞ、船中の御なくさみのためぞかし、西をはるかにながむれへ、び
やうびやうとして、はてはでしれず、提も広キ原あり、あれこそ武蔵野原とか
や、げにくぐ人のなくさみに、しいかの題となる事も、やくすくへぞ見へにけ
り、めてのなきさお見渡せ、油々もつり船の、其かづ有様、東ノそらし
のよめ、雲お引せしことく也、くがのなん心をよそ見て、急せ給る程、有
所の船場より見れハ浜なり、斐へいくと尋ニ、また下總の内とかや、船をあ
つめてかける共、名ハ船橋の宿に着、我國長いたりミン、八幡の宿ニ差かゝ
り、うがいてうすで身おきよめ、南無八幡大菩薩、今度みづからが大副成就就守ら
せたまとい、事ねん比にふしおがミ、いとゞ心へあしな也、いくの土か何の
日、我を待どとの者とかや、つづいて渡々大川も、人おまつとの渡、上つて聞べ
武藏国、げにや土木も我王君の國なれぞ、御代ハ目出度ときわ木の、立ぬも深
き岩付、ゆくへむらん此城ハ、花代久しきせんのふけ、猶行末へ白菊の、代々重
八重桜、今お盛のさきみだれ、花の御城と打詠め、心づかにやき給ふ、さそい
はにうお打過、榮花の其時のしきよきよてうの、あしわいも、いはつゝ衣
はしたれられ、今へきやじとしましめて、三山川へ遡りなれや、其名わこへき熊谷宿
打過、それや此常設殿や相満が、菩提の事おあんずれへ、尚も思ひわ深谷宿、
とまりくのおぼつかなくも、たびのつかれでねもたらん、夜をなきあかすから
す川、うき世にへたなけれ共、たれも我子もかわい峯の八まん、四子ほんのふ
のしみ付、ミやうかわおとさんと、心おみがく玉村の八まん宮おふし拝み、横手
萩原打過、めておはるかにがむれ、上野下野両国へ共、心かけおあだかぎ、
峯に赤城の大明神、きしにわ大浪小浪とて、大明神の御たうし有、下ニ上野大社
とて、所寄て村の名も、皆かわる代中に、いづれかわらぬ本郷社、国分の宿も
打過、と有所ニ着給ふ、御代鬼も今へは、たびのつかれにつまとのこへわや
かしとつもきて、しゃくのつかいと差して、今おかりとふし給ふ、女郎立も
中光も、是へくといたき付、やたけに思ひのうちも中々申斗へなかりける。

六卷目

去ル程ニ中光ハ、御代所いたきよせ、道の傍ほどの莫原にねさせませいらて、
御まくらおひざの上ニかきのせて、御くわい中の御薬出し、皆まいらし、薄
くかんびやうつくせ共、おものわすれだけんへなし、女郎立も見結ふてのや、
いかに中光殿、水少しまいらせ度、たづね御らん候とて、御代様おいたぎ、
中光けにもと思ひ、沢辺、下りて、水を少し汲せつた爲ニ立彌り、御口ニ入
奉るハ、御代所ニ三いきおつま、おもきを漸々上げ、いかに中光、みづか
ら此世の縁へつきはてて、今をさいごト覺たり、ミづからむなしくなる共、互お
んじることく、船尾山の法印たら、常政殿や相満が、ぼたいをどうそたまわれ
や、其次ニハ、ミづからにもねん仏申してあさすべし、なごりおしくわ候得共、
めいどの使せめくれハ、最早中光達途、いとま申して女郎立も、是おさいこの
御言ハて、あしたの露としきへ給ふ、女郎立も中光も、御死がいいだき付のふ、
いかに御代様跡ニ残るなしやと、御死がいこうこかし／＼こゑを上で、そなけき
給ふ、中光泊のひまより、くどき事もどうり也、通ぬる君の御さいに、ぜひ御
供と思ひしに、をふせおもて力なし、よう／＼國へ帰りつつ、いまはまで御供
して、又御代様、おくれてハ、御主のこらず先ニ立せつ、おもててかいあらじと
思へど、かなわぬ御ゆいけん、はら切事もなられば、さてもつたなきがうぞと
にける、やう有て女郎立よう／＼泪をしとどめ、さのミなげきを中光どの、訓ゆ
いけんのごと、然はお一重ニ思合つゝ、急ぎ船尾山のふもとへ、諸願成就の其面
ニとて、かくともなり給ふ、我々が事共ハ女身へ有けれど、御主のものおんために
も成へきようになし、便りなき身の世の中に、ながらいてせん、いさぢが
いせんめんえんと中光が、こしの物をとびかかつてぬかんとす、中光、是へとお
しととめ、いかに方々よ、女の身なれ共、諸願成就見とよけで、ともにかくとも
なりたまへと、延。いさめられ、しばしあきれていたりける、かかる鬼、御僧、若
人通らせ給ふて、こわいかにとどひ詔、中光承り、何女性へそれかし主人にて
有ける、只今はかなく成駒也、われ齋の御じひに、すがたをかくして玉へか
し、御僧などその申て、御僧にこし召さもあるハ、我れ一度かじしてみんとの玉
みて、せんじゆのだらよみかけ給ふて、しゆけんごつしゆうとくしゃうじかミ
様、くわつととなへさせ給ふ、ふしぎや御代ハ夢さめたるこちにて、たちまち
いきふき帰し給ふ、女郎立も中光も、是へくと斗りなり、時に御僧たちまち

に仏とひとあらわせさせ給ふ、我は是船尾山^{（ひきしやま）}立ける觀世音也、今へはる名山ニ有けるが、なんじがふびんと思ひ、是迄あらわれ出たりける。万願成就守らんとて、たちまちし雲に打乗つて、西の方へそ登り給ふ、難有くと御跡三度礼はいし、さて夫^{（め）}も人々へ、きいのものもひおなし、よろこびさう、心の内たとゑんへなかりける。御代専の給ふ様は、早々ふもとへ行、寺御堂の建立おいそぎたくとぞ仰けり。中光承り御尤に候と人々お先、立、ふもと差て急がるゝ、ともどきもありぬれ、しばれのいおりとぞ見えにける。立寄て先案内をこひければ、出家者人出合、いか成る人ぞと申ける。中光きいてやくるしら候へす。たびの修業者にて候なり、出家きこ者此花藏坊と申出家也、けそんとうして有けれ、人のかよいもなき所ニ、只今はしばらくまどろみ候内、觀音の御つけに、此處へたびの女生供人召つれ来レへし、なんじ心お急ぎいさめよとの御つけ也。まさしくうたかないく、是ハ^{（ハ）}としやうじれへ、人々おり入給ふて、たびのしやう東さられる時に、御代官の給ふべ、いかに中光よ、寺御堂の建立おへんしもはやく仰ける、中光承りかしこまつて候、則ぞま取ばんじう入込で、もみはんでぞ急ぎける。去^{（ム）}程^{（シテ）}、寺成就せり、中光御代所へ罷出、建立も出来仕候と申ける。御代免召御よろびへかきなし、先々御寺お覽すと、がく打てと仰て、山^{（ヤマ）}院号先の如、柳沢寺おはなき沢と直し、長元年^{（1194）}來に船尾山等覺院柳沢寺と額打セ始ふ時、当主^{（シテ）}わ花藏坊被仰付、まつせの坊号是也ける。拔又御堂へ差かかり御覽まします所ニ、船尾山ノ方^{（カタ）}もしうん一村たなびきて下ル、中光鹿老定とんで出、御堂の御前へひざまづくと見へしか、たちまちきへうせける、さてこそ龍世音お御堂へうつらせ給ふ、光りをはなつて立玉へ、誠^{（ハシ）}難有かりける次第なり、去依末世のしゆ生^{（シテ）}たがわぬ願立て、成就せざるためしなり、復又法花^{（ハス）}いわく、諸法実相と説時者、峯の嵐も法のこゑ、聖^{（セイ）}いわく、万法一女と聞時ハ、谷のくち木も皆まつも、今ほんのふと、もふぞふにからめられしづからも、かく仏たいと様をかへ、心お直し身をやつし、今建立のその功德、天地四悔とくづるゝ共、むなしく成事よもあらじ、中おんじやうにいわく、一仏淨土觀見法界、草木国土しつかい成仏と説時ハ、常政殿も相満も、一山の法師立も察して、船尾山の諸々志ゆ生、成仏せざる事もなし、今早おもひおくことなしとて、人々供ないとて有沢へ取こもり、西へ向つて手を合、觀音おくわんねんをしすまして、守刀おするりとぬき、御じかいし給ふける、武百人の女郎立も、中光お

たよりとして、いざ^{（ハシ）}御供申さんと、皆々一度^{（ヒコ）}ちがいして、目もあてられぬ斗也、さればこそ、其沢びくに沢とハ申なり、又船尾山よりあまたの御代か水つり、りうの水となれくる。思ひふかき水なれハ、思ひ何と名付たり、常政は懸船尾山のちん守にて、當宮野とあらわれさせ給へ、つゝこまき跡^{（マキザカ）}立給ふ、難有かりける次第也。御代専へ柳沢寺お聞きしたるとくによつて、思ひ川の舟射天とあらわれ給ふ、仏法僧の守ことなり、まつせのしゆ生おとい給ふ、相光殿^{（ハシガタニ）}黒山^{（ハラヤマ）}住^{（リ）}給ふ、去^{（ハシメ）}依^{（ハシメ）}黒神^{（ハシメミツカミ）}お今世まで、相満がたけと申、中光ハ主^{（ハシメ）}かしなすゆゑに、山神とあらわれて、今はるかの山^{（ヤマ）}立ける、むかしも末の代も^{（ハシメ）}めしすくなき次第也と、きせん上下おしなへて、かんせぬ者こそなかりける。

寛政六年庚午年

一倉幸吉藤写之

明治二十五年正月日

持主

加藤金治郎

六拾七才子

（近藤喜博編「神道集」より引用）

神道集

卷八

第四十八部馬橋井郷上村内八ヶ権現事

抑此八ヶ権現ハ赤津縮宮トモ申ナリ、此御神ノ由諸ヲ委ク承レハ日本人王四十
八代称徳天王ノ御時、上野国十四郡ノ内、郡馬ノ郡内、桃井煙雲山里ニ、身勝乍
ラ此所ノ由ヲ知ル民一人アリ、財宝飽満シテ所從眷属ニ乏カラズ、牛馬田畠成就
シ、耕種錦織ニ豊ナリ、五穀成熟シテ家内豐饒ナリ、何事ニ付モ不足ノ思ハ无
ク、而テ一人ノ御魂子ノ無キ事ヲ悲ム、仏天ニ祈テ女子一人儲タリ、千手ノ前ト
申シテ、乳守ト太多相付テ貢ナシ過ケリ、父ヲハ田然ノ大夫信保ト申ル、此千手
ノ姫ハ有婦ノ子ヲ養ヒ、田然蘇次家保トテ、生年二十一ノ成ルヲ聲ニ取ル、都ノ
出仕ノ代官ニ時々上テ、千手ノ前へ十六ト申ケル春ノ末ニ家保國ヘ下テ都ノ物語
ヲス、次第ニ面白キ事共多ク候ヘ共モ殊ニ脚利シ事ハ、公卿殿上人太多御集リ、
左近馬場桜詠居題云歌ノ題ワ下サル、人々皆説頗ル中ニ、十八九ト見給シ若
き殿上人ノ、中座ニ御在セシカ、

ツホロケノ別レトモミス明月ノ

月ニムナシタ返ルカリカネ

ト説マレ、人々一同ニ感シテ御簾ノ内ヨリ色々ノ御衣共ヲ脱懸ケラレ、時ニ帝ヨ
リ丹波ノ國ノ國司ニ賜給コソ御腰ヤ語ルヲ、千手ノ前コレヲ聞キ、同ク人々界ニ
生フ受ケ、都内ニ生フ受ク、何カ五隣三從ノ罪垢モ少シ消ヘサヘルヘキ、惡ノ都
恋ケチ片時モ忘ル事ソ无キ、差シテ痛楚無ク面疾テ見ヒトケル、此處ハ八十八
ニ二月、藤次家保赤男ノ代官トシテ都へ上リス、田舎ニハノ療法ノタメ、伊
家祭道ノ數々尼スニ叶ニ、父母ノ嘆中モ中々愚ナ
リ、田烈ノ藤次家保、三月十五日暁景、左近馬場桜ノ花ノ本ニテ遊ル程ニテ、裝
束知ラズ上ニ紫雲ノ小袖ヲ引キモキ、彼ノ木本ニ立寄テ、殊ニ花盛ナル小枝ヲ
手折フ、頭ニ差狂サシテ歌云、
散モセスサキヲタル花セナシ

今日ヲサカスノ庭桜哉
打説シテ、早消様ニ失ニケリ、人々門ヨリ戸ヘ出デテ尋ネ求メケレトモ、行方ヲ
知ラズ、家保ハ千手姫ニ似タル哉ト余リニ心本無ク思ヒ、則チ追テ國ヘ下リ、
此ノ人ヲ尋ルニ、千手姫ハ御他界ト答フ、家保泣々都ノ事ヲ語ル、父母ヲ始トシ

テ声ヲ調テ男女共ニ喚叫フ有様、喻テ連れ可キ方モ无シ、此人ハ都ノ花ヲ恋テ死
タリトテ清水沢ノ樽ノ下ニ植草木箱ノ蓋ヲ開テ見レバ、件ノ花ヲハ面ニ差シシテ
寝入シ如キタル也、藤次家保死屍ニ取付テ、烈々行ト叫ヒケル、父母乳母ト女
房速モ棺ノ上ニ倒レ伏シ、皆合ハト抱合ケル、而テ家保則聲押切り、棺
内へ投入ル、生年廿十一年四月へ出家シケル、父母モ共ニ出家シテ、伊香保ノ山
ノ東ノ麓、船尾ト云フ岩ノ下、葛カ蓬ト云所ニ一宇ノ草堂ヲ立テ、千手觀音ヲ本
尊シテ千手ノ姫ノ形見トテ、其ノ前ニテ朝夕ノ行法ヲハ始ル、聲ノ家保入道ハ
急ギ都へ上リ、円頓房ノ僧正トテ、都ニテ折柄院ニテ御在ス、引真下シ奉リ此寺
ノ別當ト定メ奉リ、帝へ申立テ都馬那波ノ恩ヲ所ニ賜レハ、仏法人敷繁昌シテ
人々皆請ト申合ヘリ、未ダ在家ノ時ラズ、坊中ハ三百三十三坊ナリ、寺号ノ額ニ
ハ船尾寺ト打タレケル、此寺ノ谷峯ヲ隔テ寺ヲ立テ石巖寺ト號ノ打ツ、坊舍ハ六
十六坊ナリ、別當本寺ノ別當ナル田烈大夫信保入道夫婦共此寺ニ住シテ念仏三昧
ヲ勤行ス、今ノ代ニ名ヲ得テ信保跡ナレハトテ其在家ノ跡ヲハ言保ト申ナリ、斯
雖大寺ノ滅亡ノ由緒ヲ聞コソ思ケレ、日本人王五十六代帝淳和天王御宇、天長五年
申申ノ年、上野国々司一人下給、桃苑左大将家光ト云フナリ、御子ニ若君一
人御在ス、月塞キ殿ト申ス、形ハニ勝レ善哉童子ノ如シ、情世ニ超テ自在童子
ニ相似タリ、國司ハ此ノ船尾寺ヲ國中ノ名譽ノ寺ト聞コシ食シ、若君ヲ別當円頓
坊僧正ニ進メラル、別當是經ノ児老駕身ノ幸トテ、體テ迎取り實通限リ无シ、御
年十一才ト申三月十五日マテ誕美榮ヘ、光音天ノ如シ、同年六月八日月ノ下ラ
ヘ下ラ、新水式上模枕ニテ馬ヨリ下リ給ヒツ、人語愛色アリ、御供芻王丸不
思議ニ思ヒ立チ御見ラハ、昇殿ス様ノ失給フ、彼ノ童坊中へ走り此ノ告テ
泣ケヘン、始メ大衆賛賛七十二至ルマテ、衆子ヲ散カ如ク東西南北ニ走
坊僧尋モ駭動スル事無ナラズ、菊王ハ泣々大音般御屋形府所へ走下リ、由テ此タ
ト申ス、御母自リ始メ奉リ乳母ノ女房已下、專夫卑妻ニ至テ実カト急テ寺へ走上
リ給ヘハ、其ノ行方ヲ知ラズ、寺中ノ漢キ府所ノ悲ミ歎ヲ取ニモセ无シ、御供芻
王丸ハ悲堪シテ腹算切御供進ラントテ生年十八ト申セハ朝ノ露トリ清ニケリ、
母御台御車ニ召テ、伊香保ノ沼フ尋ネ、曉キ身ヲ沉メント思食立給テ深山へ別入
リ給ヘトモ、峨々タル谷ヲ見給テ肝脾モ消給テ何クヘ行キタリ共、何フシテ量リ
尋ヌベキ、知ラザル山路モ苦キトテ木ノ上ヨリ御身ヲ投ケ給ヒケル、空キ死屍ト
成リ給フ、只御車計リ府所へ返リケル、彼ノ御車ヲ空ク返ル是ヲ今ノ世ノ人ハ車

立戸トハ申ス、御乳母ノ黒部御局ハ猶ヲ深山ノ奥へ別ケ入り、岩上ヨリ落テ死ニ
給フ死フ、今ノ世ノ人ハ黒部坂ト申ス、徳戸ノ前モ身ラ投シ、其ノ所ラ徳戸庄ハ
今ニ有ツ承ル、御後見宮内判官相満、則腹切死ニケル、其ノ山ヲハ今ノ世相満
嶽ト申ナリ、相満ト書テハ相満ト説リ、其ノ後都へ脚力走リ由ラ此トク申ス、桃
苑ノ左大將殿大ニ驚テ急セ下り給ヒシ空キ御所入り給テ、天ヲ仰キ地ニ臥テ歎キ
給ヘトモ、北ノ御方モ月臺殿セ、其ノ外敷ノ守リ乳母ハ所ニ死タリトテ、事間フ
者モ无リケリ、大将愛ニテ歌ヨリハ、同伊香保山ニテ死ナントテ御出立有リ、
彼ノ山へ上り給フ國軍勢モ、今朝限ノ事ナリトテ、大勢御供申シ打上リケル専
ニ善尺魔ノ子細有リ、何考カ申出ケル、但今國司此ノ寺へ御上リ有リ、其ノ故
ハ此ノ寺ハ我子ノ敵トナルノミナラス、婦妻ヲ始シテ多人ヲ亡ス専ナレハ、恨
ミ千万ナリ、押寄セ坊舍ニ火ヲ燃ケ、焼撃テ通ルベシトテ、大勢ニテ上リ給フ由
ラ、寺中ニ披露シケリ、大衆忽チ騒動ス、國司ハ此ノ由ラ夢々知ラシメズ、別當
ニ急キ見參奉リ、亦本尊ヲモ拜シ奉バ、子供ノ後生善處ヲモ折ラント思ヒ、左大
持家光ハ涙ヲハラハラト流ス、サテハ月臺殿カ失ヒケルハ天狗ノ仕態ニテハ无リ
ケリ、一人二人ノ別レニモ非ス、其ノ義ナラハ寄テ死ヤ人々トテ、互ニ矢合セノ
程コソ有レ、大勢乱合駆ナレバ、大衆ハ眞色ニ見ニケル、何ナルノ人仕態ナルナ
ラン、二王堂ニ火ヲ懸ケ、折筋辰巳鳳凰タ吹テ、黒煙天へ上ル、船尾寺へ吹覆
イ、児大衆諸共ニ一人モ道ルベキ方ハ无シ、上ハ巖石ナレバ昇ルベキ様モ无シ、
龍ノ野辺ニハ敵勢ハ充满シ、下ハ下ルベキ便モ无シ、為ス方無ケレバ児大衆、大
旨ハ猛火中ニ入り、手ト手ヲ取りクミ失ニケリ、而ニ此ノ火炎ニ本堂ト崇メ奉ル千
手堂ニ吹付テ、大覺院ヨリ始シテ勤足坊・真如意・真言院・灌頂堂・鐘樓・經
藏・燈明院・伝法院・阿弥陀堂・相應院・二階ノ門・三重ノ多宝塔一基・大湯屋
マテ一字モ残サズ燒弘ヒ、御堂ノ數卅三、仏ノ數一百余軒・社數廿一社、坊舍數
五百六十餘家ナリ、花嚴天台等ノ法門正教ハ數ヲ知ラズ、児大衆行キ歩ミ叶ハ
ズ、老僧謀者ハ井ゼズ、惣チ大衆召仕ノ男女眷属等ハ、一千五百余家ナリ、牛
馬類ハ數知レズ、皆猛烈中ニシテ、失セケルヨソ哀レナレ、而モ此ノ火賄チ此
峯ヲ吹超シテ石巖寺ニモ大谷・小谷・南岡・峯岡・花嚴院・法相院・法華院・
詔誦院・五輪院・三重ノ多宝塔一基・大湯屋・佐法殿マテ燒ケ上ル、塔廟堂余七
十余年余、坊舍ノ數一五百余家、一家ニ残ラズ燒失ス、其ノ間ノ家幾ヤ、唯伽
唯識法門正教、一巻残ラズ灰ト成テ、皆虚空ニ登ル、而テ國司ハ泣々留ムベキ様

無クシテ、亦都へ上リ給フ、此ノ両寺ノ本尊ノ御恨、又ハ伽覽僧坊兒大衆ノ御
歎キヤ精ケン、程無ク三病付セ給テ、人前ノ出仕モ留給ヘハ、田舎人々別レ、彼
ト云ヒ此ト云ヒ、ヨモスガラヒメモソニ聞間無ク歎ク故、其ノ年ノ冬暮ニ終ニハ
カナク成リ給フ、而テ金舟ノ月臺殿、次ノ年ノ三月中半ノ比ナルニ、天狗共カ擊
ニ乗リ奉リ、焼撃タル跡跡ニ捨進、寺ノ亡ケル故、彼ノ天狗共ツ養育奉リ、浅
間ノ峯北ニ見ニ阿妻屋御手向、並岡ト云フ峯ニシテ育ミ奉ル、天狗共ニ捨テラ
レシ後、心モ物狂ニ成リ給フテ、天狗養育ノ児ナレハトテ、山神速真ミヲ垂レ、
通力ヲ擴ラレ、神ト成リ給フ、之ニ依リ父母ヲ始メトシテ、自害セシ八人ノ男女
モ同ク神顯レテ八ケノ王子ツン申ケル、世末ニ成レハ里ヘ下テ社立住ミ給フ、
八ヶ櫛現トソ申ケル、今ノ代ノ人ハ津禪ノ宮トソ申ケル、是皆本地尊陀觀音ノ応
迹ナリ云々

(近藤喜博編「神道集」より引用 編集者が読み下し文としたもの)

榛 東 村 の 民 俗

昭和三十九年三月二十八日印刷
昭和三十九年三月三十日發行

非売品

編集兼發行者

群馬県教育委員会事務局

發 行 所

前橋市前代田町二八二一

群馬県教育委員会事務局

印 刷 所

朝日印刷工業株式会社

電話(2)四三六七番